
ただそれだけの話

タムラカエデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただそれだけの話

【Nコード】

N0108V

【作者名】

タムラカエデ

【あらすじ】

それはありふれた日常。
そして崩れゆく日常。

それは剣と魔法が織成す幻想の世界。
そして魔族に脅かされる幻想の世界。

訪れるのは、望まれた召喚と望まなかった召喚。

これはそんな物語。

ありふれた日常から異世界へと召喚される ただそれだけの話。

7 days (前書き)

7 daysの大雑把なあらすじです。

何というか うん、こんな感じに仕上がります。

あ、止めて！そんなに風だされたら吹き飛ばす！？

7 days

深淵に御座します我らが主よ。

そんな、夢を見た。

星の始まりに太陽と月を。運命の終わりに闇照らす光を。

「…ああ、最近物騒なニュースばかりだ。」

「穏やかじゃねえよなあ。…なんも起こらなきやいいけど。」

死による創造を。生による破壊を。

「…癖？」

「ああ、そうだ。まあ癖っつか、なんっつか。恭介の奴、日に日に昔に戻ってきてやがる。」

「そんな、だってもう忘れたはずじゃあ…。」

悠遠なる空を。 安寧の地を。

「何事だ!!」

「フォルセティウス様！ケテルが…ケテルが落ちました。」

「そんな馬鹿な！兵力は十分だったはずだ！！それにエノクが」

「ケテル王は反旗を翻しました。メタトロン様も」

力なる火を。 廻る水を。 堅牢なる木を。 運ぶ風を。

「もはや四の五の言ってられん！強制共鳴を」

「そんな…無茶です！今解放されている基点だけでは」

「もう時間など無い！！手をこまねいてはダアトが開くぞ」

万物を司る基点より力を捧げ、主の創られた世界を穿つ事をお許し下さい。

「おい、どうなってやがるんだこれ!!」

「踏ん張れ!絶対に離すなよ!!今こっちに」

「すまん、椎名を任せた」

「正義iiiiiiiiiiiiiiii!!」

そしてどうか、お授け下さい 総てを切り開く希望の剣を。

残ったのは、自分の親友の右腕だけだった。

なんてことはない。

これは世界が崩壊した ただそれだけの話。

prologue (前書き)

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ、初めまして。

自分の脳内をぶちまけて文字にただけの拙い作品ですが、お暇なときに茶菓子片手にでも楽しんでいただけたら幸いです。

prologue

目に映るものすべてが燃えていた。

知り合いはすべて死体になっていた。

自分を守ろうとした大切な誰かも、そしてまた

”
N e v e r g i v e u p を諦めるな！
”

ワンルームの部屋に、壁から漏れた歌が響く。

”
L o o k ! 見ろ！君の前にはE t e r n i t y ! 無限の
”

ベットから起き上がった少年は、顔をしかめながら目覚ましを確認する。

” 道！（Road！）道！（Road！）道！（Road
！）道！（Road！） ”

訳が分からない歌のせいで、夢の内容が思い出せない。
思い出せないものは思い出さないほうがいいとは、果たしてだれの言葉であつたか それが余計に彼を苛立たせる。

” Don't stopを諦めるな！ ”

ジリリリリリリリ！

悶々としてたら、目覚ましが鳴った どうやらアラームの解除を忘れていたらしい。

苛立ちをぶつけるように目覚ましを殴り いい加減頭にきた彼は、音の漏れる壁に向かって目覚ましを投げつける。

” Yesterday! 昨日なんか知るか! さあ Tomor
row! 明日に向かって ”

衝撃によって本体から飛び出た電池は、自分の頭から抜け
落ちた夢のようだった。

いつになく最悪の朝だった。

例えば、夢見が悪かったせいで、目覚ましをセットした時間の1
0分前に目が覚めたり 暫く自分の夢に悪態をついてたら、アラ
ームが鳴ったので殴って止めた。
手が痛む。

例えば、朝っぱらからご機嫌な隣人が流した趣味の悪い音楽が、
薄い壁からだだ漏れだったり ささやかな抵抗として、壁に目覚
ましをぶん投げてやったら、小気味よい音とともに目覚ましの電池
が脱走した。
忌々しい。

例えば、飲もうと思っていた牛乳が切れていたり

例えば、靴下の片方が

例えば、例えば、例えば

とまあ、そんな感じに最悪な朝だった。

らしくない。

なんで今朝はこんなに苛々するのだろうか。

少しでも気分を入れ替えようと、テレビのスイッチを入れる。

” おはようございます。10月18日、朝のニュースを

”

トーストを齧りながら、ニュースを眺める。

なるほど、ようやく晴れ空が拝めるらしい。

先週から雨続きだったためか、久しぶりの晴れの予報に少し気分が和らいだ。

” 走れ！（run！）走れ！（run！）走れ（run！）
走れ！（run！） ”

訂正、先程よりも気分が悪くなった。

いまだに音漏れがする壁に向かって、相方が見つからず出番を無くした靴下をぶん投げるが、壁にたどりつくことなく、虚しく墜落して行った。

心なしに音量が上がった気がする　　苛々する。

ありがたい事に、そんな些細な事など知らぬと世界は面白おかしく回るわけで　　つまるところ、平日である以上学校は通常運転するわけで。

学生の身分である以上、ちょっとしたトラブルなどそっちのけで登校の準備にとりかからなくてはいけないわけで。

結局は、そう　　少しばかり不愉快ないつもと変わらない日常。ただそれだけの話。

思考を明後日に飛ばしている暇があったらとっとと仕度しろと、そういうわけだ。

”
”　　以上のように、小規模ながらも連続した地震が各地に

ニュースを聞き流しながら、ため息一つに鏡を見る

少し目にかかる程度の日本人特有の黒い髪。

細い目付きに、生気が感じられない瞳。

多少整った顔立ち、その表情は　　いつも通りの無表情。

完全なホームスタイル　　もっとも、トラブルが続いたせいで顔に若干影が差しているような気がしないでもないが。

そのまま外に出るわけにもいかないの、顔に笑顔を張り付ける。
ひょうきんで、どこか憎めない笑顔　　生気のない眼はご愛嬌。
いつもの自分の外面。

うん、いい感じだ。

鞆を片手に、張り付けた笑顔は完璧。
口にするのは、始まりの合図。

「　　さあ、夜没恭介よもつきやうすけを始めよう。」

今日もまた、一日が始まる。

10 / 18 ・ 上 (前書き)

自分の脳内を文章にすることがこれほど難しかったとは。

なんだか日常編がキャラ紹介文の様になってしまった感が否めません。

そして絶望したカエデは夏風に飛ばされ、明後日に旅立つのであった
！？

いい天気だ。

寝起きからの”ちよつとした”不幸も、最近の不穏なニュースすらも頭から吹き飛ぶくらいの快晴。
昨日まで連日雨が続けていたこともあつてか、感動も一入だ。

朝特有の涼しい風が頬を撫でる　自然と身体が引き締まる。
気分一新、時間も十分あることだし少し回り道でもして　ぶべ
！？」

背中に衝撃が走る。

どうやら身体が引き締まったというのは勘違いだったようだ。
足がもつれて、何かを掴もうとした手が虚しく空を切り

そのまま恭介は、顔から地面に突っ込んだ。

「ヘイ、ジヨニー！朝から地面とキスなんて熱いじゃねえか。…
んで、お前はいつからポエマーになったんだ？」

カラツとした声が響く。

上半身を起こして振り向いた恭介の視線の先には、彼と同じ赤い
ラインの入った黒い学生服を着用した、見慣れた親友の姿。

端正な、それでいてどこか子供っぽさの残っている顔立ちに、意
志の強さが感じられる生き生きとした目。

赤味がかった茶髪を風になびかせ、彼 くしょうまさよし 九翔正義は、恭介に手
を差し伸べた。

「…ついさつきからだ、ビリー。素敵な挨拶をありがとよ。涙が
出るくらいありがたかったんで お礼にお前もキスさせてやるよ。
ああ、安心していい。地面はいつでもだれでもウェルカムだクソツ
タレ。」

差しだされた手を払いのけ恭介は立ち上がり、素敵な笑顔で指の
骨を鳴らした。

それを見て正義は、若干引きつつ顔をしかめる。

「…ご遠慮仕る。なんだ恭介、今日は随分とご機嫌斜めじゃない
か。どうした、腹でも下したか？ん？」

軽い物言いに、恭介は食って掛かる。

「お前のせいだよこのバカチン！いきなり背中に一発もらって怒
らない奴がどこにいるんだ！いつもより早く目が覚めてみれば、ど

つかの馬鹿が流してる趣味の悪い音楽が薄い壁ぶち破って聞こえてくるし　ああそくだ、きつと夢見が悪いのはそのせいだよチクシヨウ！飲もうと思った牛乳も切れてるし、履く予定だった靴下は片方　ああ、クソ！おまけに、久々の良い天気気持ち切り替えて、少し遠回りして散歩でもしようかと思った矢先にさっきのアレだ！ご機嫌斜め？当たり前だ！なまじ気持ち切り替えようとしたせいで、俺のテンションはマッハでマイナスだ！！だいたいお前　」

「オーケー！オーケー！！分かった。俺が悪かったよ。頼むからこれ以上怒鳴ってくれな。…ところで、俺が音楽聴いてたら、毎度毎度どっかの誰かさんが壁に物を投げてくるんだが、何か言うことは　「ねえよ！」　さいですか。まったく、本当に音楽の趣味に限って言えば、お前と分かり合える日が来るとは思えねえよ。」

どうどう、と恭介を宥めつつ、残念そうに正義は言った。

「それでもないさ。…槍が降ってくる頃にはきつと分かり合える。」

落ち着きを取り戻した恭介が、ニヤリと笑い言葉を返す。

「違いねえ。」

そこで漸く、お互いに笑いあった。

いつもの日常だ。

恭介と正義にとって、大小の違いはあれど、この程度の言い合いは日常茶飯事だ。

顔を合わせれば文句の言い合い、なんてことも珍しくない。

もともと2人は、あまり人に声を荒げさせるような真似はしない
例外はあるが。

面倒事が嫌いなので、言い争いが起こり得る場面になると、すぐに自分を引っ込め、適度に話を切り上げ、事を丸く収める。

恭介は正義だからこそ、正義は恭介だからこそ、心おきなくボロクソ言い合つて、適度に日常のガス抜きをする。

相手になんかあったと感じたら、適当に突っかかって、面白おかしくおちよくつて、その代償に相手の抱えているものを体一つで受け止める、そんな関係。

今回も、そう、恭介の憂鬱な気分を察した正義が、どうにかしてやるめえと突っかかってきたのだらう。

正義が手を出してこなかったら、恭介のほうから突っかかっていったらうという話はこの際どうでもいいことだ。

相変わらずおせっかいな奴だ、と恭介は独りごちる。

気分転換したつもりで、その実片隅に追いやっていたもやもやしていた気持ちが大分晴れた気がした。

「ん？何か言ったか？」

「いや別に。なんでもございません。」

教えるよーと、ヘッドロックをかましてくる正義から身を躲す。いつものようにコレと雑談でも楽しもうかと恭介が話題を探している。

「…あの、お兄ちゃん、先輩。…もういいかな？」

どこか申し訳なさそうな、澄んだ声がその場に響いた。

「…ん？」

じゃれあっていた恭介と正義は、顔を見合せ　そのまま声の主に顔を向けた。

そこには、青いラインが入った黒い学生服に身を包んだ、くりくりとした可愛らしい目が特徴的な、小柄な少女の姿。

健康的な白い肌、肩を少し超えたあたりの綺麗な黒い髪は、まとめて左右に垂らされ、見事なツインテールとなっている。

艶のある小さな口から、ため息をひとつ吐いた正義の妹　九翔^{くしよ}　椎名^{うしみな}が、少し恥ずかしそうに顔を赤らめ、困った顔をしていた。

「なんだ、椎名じゃないか。いつからいたんだ？それと、恭介の前だからって恥ずかしがるなよ。もっとオープンに行こうぜシスタ！。」

「おはよう椎名ちゃん。この馬鹿の言うことはほつといて誰が馬鹿だ！」　お前以外に馬鹿がいるなら教えてほしいね。：ああ、ごめん。それでどうしたの？」

すつとぼけた感じで正義が、それを一瞥して、笑顔で恭介が椎名に話しかける。

「お兄ちゃんの馬鹿！部屋を出る時からずっと一緒にいたじゃない！！　って違う、二人ともこんな朝っぱらから何騒いでるの！！いや、先輩がちよつと元気なさそうだったから、お兄ちゃんが突っかった時はナイスだと思ったけど…けど！！騒ぎ終わったんならすぐにここから離れようよ！恥ずかしいじゃない…」

ぷくう、と可愛らしく頬を膨らませて怒ったと思ったらしょんぼ

りして、また可愛らしく怒ったとおもったら顔を真っ赤にして恥ずかしがって　と、椎名はころころと表情を変える。

忙しい子だなあ、と恭介は苦笑して、ふと椎名の言葉の意味を考えるように周囲を見回し　ああ、なるほど、と納得してまた苦笑した。

さかきがおか
榊ヶ丘学園学生寮の入り口の真正面　そこには、周囲に目もくれず早朝から元気良く騒いでいた馬鹿二人と、好奇の視線に晒されて顔を真っ赤にする哀れな少女の姿。

勤勉な者は、迷惑そうに早足でその場を通り過ぎる。

事情をよく知らない低学年は、怯えと好奇心が混じった表情でちらちらと見ながら駆け抜け、友人と今見た出来事についての会話を花を咲かせる。

彼らをよく知る高学年は　ああまたか、と我関せずといった様子で、小走りに登校する。

そして今現在、榊ヶ丘学園の頭痛の種　通称遅刻上等組は、こりゃいい話の種ができたと言わんばかりに、3人の周囲から囃し立てていた。

遅刻上等組？

暫く周囲を観察していた恭介は、ふと眉を顰めた。

そして、おもむろに腕時計を見て　その細い眼を見開いた。

「おい！時間がやばいぞ…急がないと間に合わない！何やってんだこの馬鹿！置いてくぞ！…おいコラ！お前らもいつまでも群がってないで学校まで急げ！俺たちに時間を割いてたせいで遅刻…なんてことが教師陣にはれるようなことがあったら　わかってるな？さあ、椎名ちゃん走ろう！！」

お開きな雰囲気につくさ文句を言ってた遅刻上等組は、恭介の言葉を聞いたとたんに一目散に走り出した。

それを一瞥すると恭介は、何度も馬鹿と言われてへこんでいるふりをしている正義の尻を結構本気で蹴り飛ばし、椎名の手をとり走り出した。

「　　きゃ！？先輩、私、一人で、大丈夫、ですから！」

突然手を取られ、少し頬をピンクに染めた椎名が慌てて言うが、恭介は聞いちゃいない。

自分と正義のせいで、妹の様に大事な椎名が教師に御叱りを受けるといふのはあつてはならないからだ　　椎名の手が柔らかくて握り心地がよかったのは決して関係ない。

ちらりと腕時計を見る　このペースでいけば間に合いそうだ。

「…はあ、はあ、先輩、少し、ペースを　　」

もつとも、椎名の体力がもてばの話だが。

「うおおい、俺は置いてけぼりかよ！！ちょっとタンマ！ケツが……」

アレはもう駄目だ、捨てて行こう。

走ることと精一杯な椎名には、地面にうずくまって助けを求める馬鹿兄貴が見えていない。

哀れ正義、南無。

これは、そんな日常の朝。

結論から言うと、何とか遅刻は免れた　正義以外は。

1限目の半ばにやってきた正義は、その日の授業が終わるまでお尻を気にしていた。

放課後、恭介と正義が肉体言語で語り合ったのは言うまでもない。

後からやってきた椎名が泣きそうな声を上げるまで、それは続いた。

ちなみに　朝方片方見当たらなかった恭介の靴下は、枕の下で見つけた。

10/18・下(前書き)

初めはくっつけていた日常編と異世界編ですが、分けることにしました。

一話毎の文章量が少なくなっていましたがいまいますが、こちらの方が投稿しやすかったなので、ご容赦下さい。

チキシヨー！風に飛ばされてくる！！

コツ、コツ、コツ、と謁見の間に音が響き渡る。

広大な広間に施された豪壮な内装、ところどころに立っている壮大な柱。

重厚な石の扉から玉座まで一直線に深紅の絨毯が敷かれ、その両脇には沈痛な面持ちをした白銀の鎧に身を包む騎士や神官たちが、ある一点を見て整列している。

騎士たちの視線の先には、絨毯と同じ深紅のマントをまとった、威厳のある顔立ちの壮年の王。

セフィロト王国の最高権力者　フォルセティウス・マクルト・ユングヴィイ・アドナイメレクが険しい顔つきで玉座に佇んでいた。

コツ、コツ、コツ　玉座のひじ掛けを叩く音は鳴り止まない。

ダアトの評議会へ送った、マクルトの誇る白銀の騎士500名それが、戻ってこない。

評議会に現状の報告と、かねてより行われていた計画の承諾を貰いに行く任務。

道中何らかの事態が起きたとしても、それを対処できる力を持った精鋭たち。

騎士団は、想定されていた期日から一週間を過ぎても帰還しない。

時間がない。

これ以上待つてはいられないが、評議会の返答次第で今後の対応が変わってくるため、迂闊には動けない。

さてどうするか、とフォルセティウスは思案する。

その時、重々しく石造りの扉が開き、一人の騎士が駆け込んだ。きた。

「フォルセティウス王！ティウル様がご帰還なされました！！」

その騎士の報告に、広間の騎士や神官は安堵の表情を見せ、続いて入ってきた騎士たちを見て息をのんだ。続

傷だらけのその姿は満身創痍。

ところどころが砕かれ、ボロボロになった白銀の鎧は血に染まっている。

ティウル率いる500名の騎士団は、蒼と翠の鎧をまとった騎士たちに支えられ、僅か10名足らずになって帰ってきた。

ただごとではない、とフォルセティウスはすぐに口を開く。

「聞こう。全て話せ。」

その言葉に、美しい金髪を汚した騎士ティウルが、蒼白な顔で答えた。

「ご報告します。結論から申し上げますと、評議会は時期を待てと」

広間が騒然とする。

騎士や神官は怒りの声を上げ

「静まれ!!」

フォルセティウスの一喝で口を噤んだ。

フォルセティウスとて怒りに声を上げたいのは同じだったが、いまにも倒れてしまいそうなティウル達を見て、報告を続けさせるのが先決だと感情を静まらせ、続きを促す。

「続きを。そのあと何が起きた。」

「は。返答を受け帰還しようとした我らに、評議会は、魔族が不穏な動きを見せているとのでケテルの守護を命じました。報告を届けることが先決だと拒みましたが、評議会はそれを反逆とみなし兵士を我らに差し向けました。ダアトでの戦闘で騎士の半数が消え、我らは急ぎマクルトへ戻ろうとしましたが、ギーメルは既にダアト軍によって閉鎖されており通り抜けることができず、テッドを通りケセドに逃亡。ケセドに辿り着くまでの戦闘でさらに騎士の半数が死に絶え、残った兵もほとんどが瀕死でした。我らの事情を聞いたケセド王は重傷の騎士たちを受け入れ、警護の騎士たちを付けてくださいました。ケセド王によると、ティファレト周辺はダアトの兵がいるとの事。そこで我らはカフを通り、ネツアクへ。ネツアク領内で、マクルトへ向かうネツアクの騎士と出会ったので共にすることに。魔物との戦闘を交えながらコフを通り、今マクルトに帰還した次第でございます。」

悔しさを顔に滲ませながら、ティウルは一気に報告した。

「そうか、本当にご苦労だった。ゆっくりと休め。」

フォルセティウスの労いの言葉に、役目を終え安堵したのか、ティウルの背後で騎士たちが倒れる。

ティウルも、フォルセティウスに頭を下げ立ち上がるうとし力尽きたように倒れた。

「誰か運んでやってくれ。」

その言葉で、すぐに数名の騎士が動き、倒れた者たちを運んで行った。

石の扉から彼らが出て行くのを見て 遂にフォルセティウスは、抑えていた怒りを爆発させて吠えた。

「あの老害共が！！」

フォルセティウスの叫びが響き渡る。

広間にいた者たちも顔をゆがませ、怒号を上げた。
もう我慢できないとばかりに、次々に口を開く。

「フォルセティウス様！評議會を討ちましょう、ティウルと騎士たちの仇を！！」

「あの馬鹿共に命令される道理などない！我らを侮辱するにもほどがある！！」

「あの老害共め、初めからティウル様達を消すつもりだったのでしよう　ギーメルを閉鎖だ！？どんな建前かは知らんが、そんなことが許されるものか！！」

「魔族たちが不穏な動き？　　っは！アレが怪しい動きをしない日があるものか！！我らはフォルセティウス様の命以外で動いたり

はしない！王、あの評議会こそ叛逆罪に問われるべきです！！」

「王、すぐに会議を開きましょう。評議会は軍を動かしました。もう影で動くつもりはないのしょう。」

「ティアレットがダート軍に囲まれたとなれば、計画に支障が出ます。評議会がどんな動きをするかわかりません。フォルセティウス様、対策を練りましょう。」

王！フォルセティウス様！と、次々にフォルセティウスに声かけられる。

評議会からの返答は予想はしていた　が、軍を動かしたのは予想外だった。

どうにかしなければならぬ、と広間にいる者たちの言葉に耳を向け、フォルセティウスが頭を悩ませていると

「フォルセティウス様。会議を開くにしても、まず彼らの話を聞いた方がよろしいのでは？」

透き通った声が騒々しい広間に響いた。

喧騒が止む。

フォルセティウスは玉座の隣で立っている女性を見て、彼女の言うであろう彼ら　成り行きを見守っていた蒼い鎧のケセドの騎士と、翠の鎧のネツアクの騎士たちを見た。

ゴホン、と咳払いをして、フォルセティウスは口を開いた。

「見苦しいところを見せてすまなかった。予想外の出来事で少し混乱してしまった。君たちには感謝をしなくてはな。おかげで騎士団も全滅せずに済み、こうして報告を受け取ることがで

きた。怪我人を受け入れてくれたケセド王にも感謝をしなくては。」

言って、フォルセティウスは頭を下げた。

とんでもない、と騎士たちも頭を下げる。

「勿体なきお言葉。マクルト王のお怒りも御尤もです。事情を聞いたケセド王や我らも怒りを隠せませんでした。」

「マクルト王、よろしいでしょうか。」

蒼の騎士がそう言った後、翠の騎士の一人が頭を上げて、フォルセティウスに問いかける。

「ああそうか、君たちは確かマクルトに来る途中であつたとか。私に何か用事が？」

「ネツアク王からの伝言でございます。準備は整つたと。」

「そうか…これで四大国全ての準備が整つたか。あとは他の国の準備次第だが。」

「マクルト王、その事についてご報告が。」

蒼の騎士の一人が口を開く。

「まず、魔族が不穏な動きを見せている、と評議会が述べていたことですが…あながち眉唾な話でもないのです。」

周囲がどよめく。

フォルセティウスは顔を険しくし、話を促す。

「詳しく聞かせてくれ。」

「は。ここ最近、小規模ながらも組織化された魔族の集団がセフィロト北部を攻撃しています。」

「その話ならば聞いている。断続的に攻撃を仕掛けられるが、小規模なためケテル、コクマ、ビナーの三国で、大した被害もなく撃退できるとか。目的は分からないが、問題でもない。」

「先月までは、そうでした。…ですが今月に入ってからほぼ毎日のように、少しずつ数を増やしながら襲撃してくるそうです。コクマからの要請で、1週間ほど前からケセドからも騎士団を援軍に向かわせています。ゲブラも、ビナーからの要請で援軍を出したと聞きました。問題なのは、ビナーとコクマに魔族が集中しており、ケテルには数が増えることもなく、先月と変わらず断続的にしか魔族が襲つてこないことです。」

「…どうということだ。」

フォルセティウスは片眉を上げる。

「私はコクマからの援軍の要請の際その場に居合わせたのですが、コクマの使者は、この状態が続けばケテルの援軍だけでは対応できないかもしれない、と言っていました。ケテルは、自分の国の魔族は難なく対応できるため、攻撃が激しくなってきたコクマに…おそらくはビナーにも援軍を出しています。つまり、今現在ケテルの兵力は半分に、あるいはコクマやビナーに増援を送っていれば、もっと少なくなっています。今の状況が続けば、ケテ

ルは問題ないかもしれませんが　いや、今の状態が続けば続くほど、ケテルは危険だと思います。おそらく今も数を増やして魔族が襲撃しているコクマ　やビナーは、自分たちの国が狙われていると思っています。コクマー、ビナーを落とし、両側からケテルを攻め落とすのが目的だろう。というのが北の三国の見解です。ケセド王も最近まではそう考えておられました。マクルトの騎士がケセドに逃げ込んだ際に、評議会のことを聞いたケセド王は意見を改めました。魔族が不穏な動きをしている、と言った評議会。そしてケテルを守護しろという命令。ならば、あるいは　」

「　狙われているのは、ケテルか。」

「　そういう可能性もある、とケセド王は考えておられます。そしてこのことをマクルト王に報告し、意見を上げ、と。」

言って、蒼い騎士は難しい顔をした。

広間が再び喧騒に包まれた。

玉座の隣に立つ女性は、口元に手を当て、顔を真っ青にした。

ケテルが落ちれば、計画が崩壊する　考え込むフォルセティウスに、別の蒼い騎士が口を開く。

「　マクルト王。確証のない話なので、人々の不安を煽らないように、あくまで可能性の話だ、とケセド王はおっしゃいました。」

ですが、ダアトの一件ではば確信しておられます。評議会は何かを掴んでいて、狙われているであろうケテルにマクルトの騎士を送り込もうとした、と。実際ケテルは、今の状態で大軍が攻めてきたらひとたまりもないでしょう。考えれば考えるほど、ケテル襲撃の可能性は出てきます。マクルト王、どうかご一考を。」

頭を下げる蒼い騎士。

そして、報告を終え黙って話を聞いていた翠の騎士の一人が口を開いた。

「…マクルト王、あり得ない話ではありません。コフで魔物と戦闘した際、そのどれもが興奮しており、狂暴でした。今まで魔物の討伐など何度も行ってきましたが、あれは異常でした。何かが起る前触れかとも思います。私見ですが、いくらメタトロン様がおられようと、戦力の大半が失われたケテルでは、仮に魔族の大群が押し寄せたとしても対応できないと思います。」

広間が、静まり返った。

翠の騎士は、自分が何かおかしいことでも話したかと思ったが、隣の蒼い騎士も突然静かになった広間に何事かという顔をしている。

何かに気づかされたように、フォルセティウスは口を開く。

「よく言ってくれた…そうだ。今、ケテルにメタトロンはいない。」

翠と蒼の騎士は、驚きで目を見開く。

少し焦ったように、フォルセティウスは言葉を続ける。

「…今メタトロンには、サンダルフォンと共に使者としてアベスタ―グ帝国に出向いて貰っている。裏目に出たか…あるいはそれを知ってケテルを狙ったか。どこから嗅ぎつけたのかは知らんが、もはやケテルが狙われているのは明白だ。」

言っと、フォルセティウスは玉座から腰を上げ広間を見渡し、一呼吸置いた後 全ての者に聞こえるように叫んだ。

「聞け！！今ケテルは確実に狙われている！急いでゲブラーとケセドに伝令を飛ばせ！！増援を出させ、ケテルの兵を国まで戻させろ！首脳陣は直ちに会議室へ！！評議会とケテルの対策を練る！ケセドとネツアクの騎士たちにも会議に参加してもらう！！残りの者は戦闘の準備を！事は大きい、急げ！！」

フォルセティウスの怒号とともに、広間にいた者たちは慌ただしく動き始めた。

月明かりに照らされたマクルト国の宮殿。

内部の喧騒は、夜が明けても止むことはなかった。

世界が崩壊するまで、残り6日。

10/19・上(前書き)

地味に正義のお気に入り之歌を考えるのが楽しいです。

みんな、あかった。

ばらばらのえものは、あかった。

もりは、あかくもえていた。

ふみこえたしたいは、あかった。

いえも、あかくもえていた。

おいけてきたひとは、あかった。

かばつてくれたひとも、あかくなつた。

そして、じぶんは

” 束縛されたLiberty! 選択肢の無いFreedom!
”

そんな、夢を見た。

とりあえず、恭介は目覚ましを見て 電池入れるの忘れてたな、
そういや。

” 不自由な自由?(Shit!) 自由な不自由?(Fuck!)
訳わかんねえぜbaby
”

とりあえず、役に立たない目覚ましを音漏れの激しい壁に投げつけた。

『うおっぷ!?!?』

壁の向こうからの声に気分を良くした恭介は

「 さあ、夜没恭介を始めよう。」

とりあえず、一日を始めることにした。

” さあ! ザー、ザー、んだ! ザー、Freeザーーーー”

ザマアミロ。

「 やってくれたな恭介。さて、こいつめどうしてくれようか。」

と、開口一番に文句を言いながらパンチしてくる正義。相手にするのも面倒臭かったが、とりあえずカウンターを返すお、綺麗に決まった。また何か言われるのも面倒なので、先に先制しておく。

おっと、文句なら一昨日言ってくれ。今日は誠との約束があるんで、昨日みたいに正義に構ってる暇はないんだよ。」

恭介からのカウンターを綺麗に貰い頬をさする正義は、少し目を見開き真剣な表情で恭介を見る。

「 ……どうした？俺の顔になんか付いてるか？生憎お前ほどイケメンじゃないんで、見てて楽しい顔だとは思わないんだけどね。」

「 ……んにゃ、なんでもねえよ。で、まこつつあんと約束？なんだ、頼まれごとでもしたのか？」

なんでもない、と頭を振って正義は恭介に尋ねた。

「そんなところだよ。ちょっと書類の整理に手間取ってるんだと。そら、椎名ちゃんも来たし早く行こうぜ。」

「待つて！お兄ちゃん置いてかないで〜！」

ツインテールを揺らしながら、パタパタと走って椎名がやって来る。

恭介と正義は顔を見合わせて笑い、足早に登校した。

神代市、榊ヶ丘の麓に位置する榊ヶ丘学園。

そこに通う、榊の花が描かれた校章を胸につけた黒い制服姿の男女は、赤、青、黄の三色のラインで学年を分けられている。

黄色いラインの入った制服は一年生。

椎名を含む青いラインの入った制服は二年生。

そして

「誠、これはあの棚に纏めて置いとくよ。」

「ああ、それでいい。それで最後か？　いや悪いな恭介、助かったよ。」

「いやあ、やっとこさ終わったか。二人ともお疲れさん。」

「何にもしてない奴が、偉そうに口を開くなアホンダラ！だいたにお前を呼んだ覚えは」

恭介や正義と同じ、赤いラインの入った制服に身を包むまこ柴誠もまた、三年生だ。

学園三階の生徒会室で我が物顔で椅子に踏ん反り返る正義に、その魅力的な顔を歪ませ、凜とした声で誠が叫んだ。

「相変わらずキツツいなあ、まこっつあん。そんなおつかねえ顔で睨んでくれるなよ、せつかくの美人が台無しだ。仲良くしようぜパーシー君。」

「！！！」

柴誠。

腰より少し上まで伸ばした綺麗な黒髪をポニーテールに纏め、キリっとした目が特徴的な端麗な顔。

恭介と同じくらいの背丈で、すらりとした肢体には人目を引く豊かな胸。

凜々しい性格の彼女は、榊ヶ丘学園の生徒会長を務めている。

日々彼女は、生徒会の雑務だけではなく教師陣の使いっ走りとして教師陣にとってはそんなつもりはないのだが 学園を奔走している。

そんな彼女を、生徒たちは憐れみと尊敬をこめてパーシー君と呼ぶ。

尤も、彼女に面と向ってパーシー君と言えるのは正義位なのだが。

数少ない友人と思える彼女をそんな名で呼ぶつもりのない恭介は、普通に誠と呼んでいる。

言っまでもないが、正義とは犬猿の仲である。

「ほつとけよ、構って貰えなくて寂しがってるんだ。相手にするだけ無駄無駄。」

おどけた顔でからかう正義に食ってかかろうとした誠を、恭介がたしなめる。

「それにしても、人手が足りないなんていったいどうしたんだよ。いや、いつも忙しいのは分かるけど、それでも常に2、3人はいるだろ？」

「いや、ちゃんと人員は確保していたんだ。昨日も4、5人で整理していたんだが……。」

「……今日はこの状態、と。何かあったの？」

言葉を濁した誠に、恭介は不思議に思っただけ。

「教学部の連中だ……！」

机を勢いよく叩いて誠は歯軋りをした。

「……あー、また才力研か。今度は何なの？」

「科学部で妙な実験をして爆発沙汰だ。科学部の部員が泣きついてきて……私以外の人員を全員処理に行かせた。私も行きかけたが、この書類もあるしな。それに頼んでおいて、恭介一人にやらせるわけにもいかんだろう。」

「ぶははは、なるほど、朝から騒がしかったわけだ。あいつ等朝

っばらから愉快的なことでしてくれるじゃねえか。」

心底可笑しいと、腹を抱えて笑う正義。
頭を抱えた誠が、キツと正義を睨む。

「こっちは不快だ！！あの狂った眼鏡を筆頭に、教育学部の奴らは碌な事をしでかさない。朝早くから夜遅くまで私の時間を奪うようなことばかりして あの手人が！！」

「！！」

「構わない構わない、白髪になるよ。」

机をバンバンと叩いて笑う正義。

我慢できないとばかりに噛み付こうとする誠を恭介が引き止める。

「そうは言うけどな恭介、私は生徒会室にこの馬鹿がいるだけで精神を侵されるような気分だよ。書類整理だけだと言ったはずなんだが、なんでこの役立たずを連れてきたんだ！！」

「美しい友情さ。察してくれ…友達がいなくて寂しがってる哀れな子犬を放っておけなかったんだ。…本当に何もしないと驚きだったけどね。それにアレだ、好きな子にちょっかいを出したくなるのが男の子っていうだろ？誠が気になるお年頃なんだよ、正義は。」

顔をしかめる誠に、苦笑しながら恭介は言った。

「それは…ぞつとしないな。」

それを聞いて、寒気がするとばかりにさらに顔をしかめた誠は、

気味の悪いものを見るような目で正義を見た。

おいおい、とその視線を受けながら両手を広げて正義が言う。

「学園一のイケメンで人気者な俺を捕まえて随分なこと言ってくれるじゃないか」

「それはそれは。みんな大好き人気者の正義君が、その貴重なお時間を使ってここにいてことはやっぱり……。」

「それ以上言うな！鳥肌が立ってきた……。」

「……だいたい、何も分からない俺が書類整理に手を出したところで、さらにしつちやかめつちやかになるだけじゃねえか。それとも何だ？手伝ったらその神聖なる領域豊かな胸にダイブさせてくれちゃったりするわけ？」

だからなぜ来た、とはだれも言わなかった。

正義の言葉を聞いた瞬間、スツと顔から表情を消した誠がその場にあつた筆箱を正義に向かって投げつけたからだ。

飛んできた筆箱を難なくと躲すと正義は立ち上がって、座っていた椅子を蹴り飛ばし笑みを浮かべる。

「……っは。いいねえ、そうこなくっちゃ。いつになく好戦的じゃねえか、え？」

「黙れ！今日という今日はお前のそのふざけた笑顔を引っぺがしてやる……！」

キーンコーンカーンコーン

第もう何次か分からない生徒会室戦争を勃発させた二人に、一応恭介は声をかける。

「おーい、予鈴鳴ったぞー！…って、聞いちゃいねえ。」

俺しーらない、と恭介は生徒会室を後にする。

『ヒュウ！おいおい、そんなんじゃあたらねえぞ？もっと気合い入れてこいよパーシー！！』

『その名前で呼ぶな！ゴキブリみたいにちよこまかちよこまかと…。止まれ！そこを動くな！口を開くな！笑顔を見せるなあああああ！』

過程はどうあれ、結果が見えている勝負に興味はない。
まあどうせ勝つのは誠だろうな、と思いながら恭介は教室に急いだ。

案の定、勝ったのは誠のようだ。

右頬を赤く腫らし、ムスツとした表情で教室に入ってきた正義を見て、恭介は苦笑した。

そもそも正義は女である誠に手を出せないのです、勝つことなど出来る筈がない。

誠が、おちよくりながら逃げ回る正義を捕まえてボコボコにするという、始まる前から分かりきった勝負。

いい加減やめればいいのに、と恭介は正義に声をかける。

「お疲れさん、思ったより早く終わったじゃん。負けるの分かってるんだから、いい加減誠をからかつの止めれば？アレで結構繊細なんだから、誠は。」

「つたく、自分が蹴とばした椅子に躓いてすっ転んでちゃ世話ねえよな。おまけにパーシーの奴、結構本気で殴って来るから痛いものって。」

「自業自得だ。学校の備品は大切につて教訓だな…つと。」

いつもの調子で入ってきた国語教師の姿を見て、恭介は口を閉じた。

「はいはい。席に着け、喋るの止める。減点すつぞー。」

「すまん恭介、朝手伝って貰ったばかりなのに…」

「いや、まあ、そりゃそうなるよなあ…。」

申し訳なさそうに謝る誠の隣で、恭介はため息一つ吐いて言葉を返した。

放課後、隣のクラスからやってきた誠に頼まれて訪れた生徒会室は、朝よりもごちゃごちゃに散らかっていた。

「待て！待ってくれ！！新発売のCDが俺を呼んでるんだあああああ！！！」

コソコソと逃げるように帰ろうとした正義を引きずってきて、三人で片づける事となった。

これはそんな日常の一片。

10/19・下(前書き)

戦闘描写って難しいと、自分で書いてみて初めて思いました。
もう書いて書いて書きまくってスキルアップを ああ、風が！
？

「何故ですか!!」

薄暗い部屋の中で、なお輝きが衰えない白銀の鎧、深紅のマントに身を包んだ金髪の騎士が、声を荒げる。

騎士の視線の先には、円卓を囲むように腰をおろしている10人の老人がいる。

そのうちの一人　白髪の老人が、冷淡に答えた。

「何度も言わせるな。まだその時ではないのだ。」

「何度でも言わせていただきます!その時期とはいつなのですか!!魔族がダアトを狙っていると言ったのはあなた方だ!開けば…全てが終わってしまうのですよ!!時間など有る筈がない!!」

なおも声を荒げる騎士を、青髪の老人が嘲笑する。

「これはこれは、マクルトの騎士は礼儀というものを知らんらしい。王の程度が知れるな。…一介の騎士風情が何様のつもりだ。何故、お前にそれを教えなければいけない。」

「それが私の仕事だからです。王に、計画の可否を聞いてくる様にと命を受けました。可ならそれで良し、否ならその理由を。」

時期ではないのなら、その時期がいつなのかを御伺いしないといけません。ただ可否を聞くだけなら…可否を告げるだけなら、子供でも出来ます。私は　そう、一介の騎士の身ですので、せめて子供以上の仕事をしなければ。」

老人の嘲りに、主を侮辱された騎士は皮肉で返す。
その言葉で、円卓の周囲にどよめきが起こる。

「貴様！分を弁えろ！我らを愚弄するか！！」

「我々が、童子以下だと言いたいつもりか！！」

次々に語気を荒げる老人たちを尻目に、騎士は涼しい顔をする。
それを見てさらに憤慨する老人たちの中で、最初に口を開いた白髪
の老人が声を荒げた。

「　もうよい、もうよい！！…パトリム、余計なことをぬかすな。それで、ティウルよ。お前は我々が時期を告げるまで戻るつもりは無いのだな？」

パトリムと呼ばれた青髪の老人は、舌打ちをして口を噤む。

そして騎士　ティウルはその言葉に、真剣な眼差しで首を縦に振った。

「我々は意見を変える気はないし、もちろんお前に時期を教えるつもりもない。だが、お前は我々が時期を告げるまで戻らないという。　ならば話は簡単だ。ティウル、お前は連れてきた部下と共にケテルへ行け。今、北が魔族の襲撃を受けているという話は知っておるだろう？最近になって魔族が怪しい動きを見せている。お前たちはケテルに向かって加勢しろ。マクルトへは　こちらから

使者を送っておこう。時期が来れば、お前たちに使者を送ってやる。そら、これで解決だ。」

白髪の老人の言葉に、その意味を察したパトリムや数名の老人はニヤリと笑う。

ティウルは、理解できないとばかりに口を開いた。

「お断りいたします！ケテルのみならず、ビナー、コクマ も自国で難なく対応できるのに、何故私たちが加勢に行かなければならないのですか！！それに使者など不要です！私が、私自身の言葉をもって、王に伝えさせていただく！！…そちらがそういう気なのならば私は戻らせていただきます！！」

「魔族が不穏な動きをしていると言ったのが聞こえなかったか？それに何か勘違いをしているようだが、私は”行け”と言ったのだ。頼みではなく、命令だ。プリーズとオーダーの違いくらい、童子ではなく騎士であるお前には理解できると思ったのだが？戻らないと言ったのはティウル、お前だ。もうこれは決定事項なのだ。」

多少語気を強めて言う老人に、ティウルは憤慨した。

「それならば、なおさら計画を承諾すべきです！！それに、貴方こそ何か勘違いしておられませんか？私は、マクルトの騎士です！私に、命令をしているのは その王たるフォルセティウス様だけだ！！…それに、私は”戻る”と言いました。魔族の動向がおいしいのが事実なのであれば、早急に報告せねばいけません。」

もう何も言う事は無い、とティウルはマントを翻して踵を返す。ティウルの言葉に、そうか、とだけ老人は呟き、パンパンと手を叩いた。

薄暗い円卓の間の扉が開き、扉の外を守っていた濃い紫の鎧に身を包んだ二人の騎士が駆け付けた。

ティウルが怪訝な顔でそれを見ると、騎士の一人が口を開いた。

「お呼びでしょうか、ウラヌス様。…ティウル様が何か？」

「反逆者だ。部下ともども始末しろ。」

「…は？あ、いえ…ティウル様が反逆者ですか？」

白髪の老人　ウラヌスに命令された騎士は、困惑した表情でティウルを見る。

ティウルは、険しい顔でウラヌスを睨んでいた。

「それが…貴方たちの答えですか、ウラヌス様。」

「そうだ。言う事を聞かない駒に用は無…消えろ。　おい、何を突っ立っている！早く殺せ！！」

「は、は！…ティウル様、御覚悟を　」

命令を受けた騎士は、剣を抜きティウルに切りかかるうとして出来なかった。

武器を預けていて無手だったティウルは、振り下ろされた剣を体を捻らせて躲しつつ、回し蹴りをその腕に放って剣を奪い、そのまま振り向きざまに騎士の首をはねた。

一瞬の出来事に呆然としていたもう一人の騎士は、すぐに我に返り声を張り上げる。

「反逆者だ！ティウル様が反逆した！！すぐに兵を集める！他のマクルトの騎士も逃がすな！！」

ティウルはすぐに声を上げた騎士に剣を突き立てたが、遅かった。続々とダアトの兵が階段を上ってくる音がする。

死んだ騎士の血の臭いが漂う部屋の中に、老人たちの嗤いが響く。

「この大国の命運を決める、神聖なる場所に血を流すとは…過程はどうあれ、これで君は立派な反逆者だな、ティウル。」

老人たちは一人、また一人と奥の部屋へ避難していく。

ティウルは怒声を張り上げた。

「貴様ら！！」

「行き過ぎた忠誠心は身を滅ぼす…良い勉強になったじゃないか。部下と仲良く深淵に沈め。」

ウラヌスが嗤う。

「く　！！」

「ご無事ですか！！おい、そこを動くガア　！！」

「貴様に逃げ場などない！大人しくアアアアア！！」

次々と襲いかかって来るダアトの兵を切り伏せ、ティウルは殺気の籠った目でウラヌスを睨んだ。

下の階で怒号が飛び交っているのが聞こえる　マクルトの騎士たちが奮闘しているのだろう。

今すぐにこの老害共を切り殺してやりたい、という衝動に駆られるが部下の安否が気になるティウルは彼らに背を向ける。

そこに、鎧を血に染めたティウルの部下が、ダートの兵を蹴散らしながら駆け込んできた。

「ティウル様！！ご無事ですか！！」

「どけえ！！ティウル様、一体何が！！」

「嵌められた！！今ダートにいる者すべてが敵だ！！他の騎士は！？」

「他の者は、皆この塔の各階に散り散りとなって戦いながら、この場所へ上ってきております！！」

今なお襲いかかって来る兵の相手をしながら、ティウルは部下の報告を聞く。

猛々しい声や断末魔の叫びが段々と近づく。

駆け付けるダートの兵に比例して、マクルトの騎士も次々にティウルの下に集まって来る。

「この、邪魔をするな！！…私の剣は！！」

「ここにございます！ティウル様、ご命令を！！」

目の前の部下に切りかかろうとした敵を、奪った剣を投げて串刺しにする。

隣から差し込まれた自身の剣を受け取ったティウルは、息も置かず声張り上げ、指示を待つ部下たちに命令を下した。

「聞け！今からダアトを脱出してマクルトへ帰還する！！知つての通りダアトの兵はすべて敵だ！下へ向かつて、戦っている味方を集めつつ敵軍を突破！！進行上の敵以外は放っておけ！ダアトを脱出することを最優先に考えろ！！」
生きてマクルトに帰還するぞ、私に続け！！」

号令と共に喚声を上げ、怒涛の勢いで階段を突破していく白銀の騎士たち。

遅れるまい、と後に続こうとしたティウルの耳に、一人残っていたウラヌスの冷笑が聞こえた。

「精精足掻いてみるのもいいだろう。お前が無様に生き延びられるように主に祈っておくでしょう。」

振り返らずに、ティウルが言葉を返す。

「次に相見えた時が貴様の最後だ、ウラヌス。それまでの余生、踏ん返り返って狂ったように笑っているがいい。」

「それはそれは。期待せずに待つておこつ。」

その言葉を最後に　今度こそティウルはその場を後に部下を追いかけた。

マクルト宮殿のとある一室。

清潔感のある部屋に大量に並べられたベッドは、そこが医務室で

あることを示している。

開け放たれた窓から入ってきた夜風はカーテンを揺らし、窓際のベツトで眠っていた青年の頬を撫でた。

風のせいかな、たまたまなのか。

そこに運び込まれて丁度丸一日。

それまで、目を覚まさなかった金髪の青年　　ティウルはその瞼を開いた。

「　眠って…いたのか？」

ティウルはむくりと上半身を起こし、頭を押さえながら周囲を見渡す。

医務室には、ティウル以外誰もいなかった。

誰もいない？

ティウルは焦る。

自分の他にも何人かの部下たちがいたはずだ。

共にダアトから脱出した、ケセドに預けた部下たちを除けば唯一の生き残り。

まさか、と思いベツトから起き上がったティウルの行動は痛みによって中断された。

端正な顔を歪めたティウルは、自分の体を見る。

傷の無いところなど無かったのだろう　　体中に包帯が巻かれていた。

思い出したかのように体中の節々が痛み始める。

情けない、とティウルは大きくため息を吐いて、窓から月を見上げた。

「あら、御目覚めになられたのですか？」

部屋の扉が開く音と共に、透き通った声が聞こえた。

ティウルは月を見るのをやめ声のほうへ顔を向けると、両手に花束を携えた白い神官服に身を包ませた女性が、腰までのばした美しい白い髪を夜風になびかせ微笑んでいた。

「…私はどのくらい眠っていたんだ。」

両手に持った白い花束小分けにしながら、医務室のそれぞれの花瓶に入れている彼女に、ティウルが尋ねる。

「…おはよう。」

「ん？」

手を休めてティウルのほうを向いた彼女が言った言葉に、ティウルは訳が分からず首をかしげる。

「で・す・か・ら！朝も夜も関係なく、起きたらおはようと言うのが世界の鉄則です。」

「なんだそれは…いや、そうだな。おはよう、フレイヤ どうせ、君にそんなことを吹き込んだのはフレイだろう？」

可愛らしく頬を膨らませて、少し怒ったように言う彼女 フレイヤに、苦笑しながらティウルは挨拶をした。

「ええ、おはようございますティウル様。気持ちのいい夜ですね
それと、兄から吹き込まれたのではなく、教えてもらったんで

す。この二つは似て非なるものですよ?」

フレイヤは美しい顔に頬笑みを浮かべ挨拶をした後、少し困った表情を浮かべて言った。

それを見たティウルは面白いことを聞いたとでもいうように笑う。

「彼が君に物を教える…ね。その日には槍でも降ったのかい?」

「もう、兄はああ見えて実は賢いんですよ?」

「はは、そうでなければ王など勤まるまいよ。それに普段の彼を知っていれば、妥当な評価だと思うがね。君の言葉からもソレが伺えるんだが。」

これは可笑しいと笑うティウルを困った顔で見た後、思い出したようにフレイヤが口を開いた。

「もう、ティウル様なんか知りません!そうそう…ティウル様がここに運び込まれてからちょうど丸一日です。随分と遅い御目覚めですね…寝坊ですよ?」

「丸一日、か。随分と寝過したな。他に運ばれたはずの騎士たちの姿が見えないが、彼らはどうしたんだ?」

いたずらっぽく笑うフレイヤに、ティウルはずっと気になっていたことを尋ねる。

「あ、他の皆様は早朝に目覚められてフォルセティウス様に一連の詳細を報告した後、戦闘の準備に行かれました。ティウル様が一番最後です。」

「　　そうか、皆無事だったか…。まったく、情けないな。誰よりも早く目覚めて、部下の無事を喜ばなければいけない私が一番最後など、とんだ寝坊助もいたものだ。マクルト一の騎士が聞いてあきれる。この程度の怪我で今なお動くことができないなど、王や部下に合わせる顔が無い。」

「あ…ごめんなさい、そんなつもりで言っただんじやないんです。」

一緒に帰還した部下の無事に安堵した後、顔を曇らせ自嘲するティウルに、悲しそうな顔でフレイヤは言った。

「ティウル様が最後で当然なんです。だって、他の騎士様たちよりももっと酷い怪我だったんですよ？…正直、死んで無いのが不思議なくらい深い傷でした。皆様おっしゃっていましたが？ティウル様が先陣を切って道を開き敵を倒し、何度も部下を庇ってその身を傷を付けた、と。」

「…ケセドに預けた部下は、私などよりももっと酷い。五体満足なだけで、恐ろしいほどの幸運なんだ。それに、私の行動は当然だ。私は人の上に立つことを任された騎士だ　　ならば誰よりも先陣を切り、一人でも多くの敵を切り伏せ部下たちの士気を上げ、全ての攻撃を後ろにそらさずその身に受けて、部下に傷を負わせる事無く生きてマクルトに帰させるのが私の責任だ。勿論、私にそんな力など無い　　無いが、その責任を全うするために努力をする義務がある。ダアトでも当然その努力はした。だがその結果が　　」

その結果が、この様だ、とは言えなかった。

自分は結局、ウラヌスの言うように無様に生き延びた　　多くの部下の命を犠牲にして。

だが、確かに生き残った部下もいた　生き残ってくれたのだ。
生きている者にとつてはそれが最良の結果なのだ。

その結果をこんな有様だとは、生き残ってくれた部下や、死んで
いった部下たちを侮辱しているような気がして口が裂けても言えな
かった。

顔を暗くし、ティウルが言葉を切る。

その言葉を、やさしく微笑んだフレイヤが続けた。

「　その結果、騎士団は全滅すること無く、僅かばかりでも
生き残って帰ってきて下さいました。

ティウル様がいたから、安心して戦う事が出来て、ここに帰ってく
ることができた　さすがマクルト一の騎士だ、散って行った仲間
もきつと報われる、と彼らは言いました。お願いですからご自身を
卑下するようなことはおやめ下さい。ティウル様を情けないと思う
ような方は、このマクルトには一人もおられません。マクルトの全て
の民も、ティウル様の部下の方たちも、フォルセティウス様も、勿
論私も　全ての方が貴方を誇りに思っております。」

「　　！！」

違う、違うんだ、とティウルは心の中で自虐する。

自分はそんな風に誇られるような事は何もしていない、むしろ罵
倒されて当然のことをしたのだ、と。

もし、あの時評議会に問い詰めたりなどせず大人しく引き下がっ
ていれば　子供の使いだと嗤われるだけで、500の部下たちは
死なずに済んだだろう。

もし、あの時ケテルへ行けという命令に首を縦に振っていれば
部下の不満や王の失望を受けるだけで、500の部下たちは生き
延びたのではないか。

もし、もし、もし　と、ティウルの中で多くのたられればが渦を巻く。

そして、ふと一番聞かなければいけなかった事を思い出す。

我ながら騎士失格だと思い、心配そうにこちらを見るフレイヤにティウルが聞いた。

「すまない、失念していた。今更だが、私が報告を終えた後どうなったのか聞かせてほしい。確かさつき戦いの準備がどう、とか言っていたが。」

あ、と思い出したかのように照れ笑いをしたフレイヤが口を開く前に

「なんだ、ラヴロマンスはお終いか？甘ったるい雰囲気からいきなり物騒な話になりやがって…なあ、エウロス」

「お前が口を開かなかつたら、また違ったかも知れんがな。戦いと言ってもアツチの方だったかも知れんぞ、ウォルター。」

二つの声がその場に響いた。

「そりゃ悪かった。しかしエウロス…お前案外むつつりだったんだな。意外だ。」

「…頼むから、嫌味というのを覚えてくれないか。私は喋るな、と言いたかったんだが。」

「それならそうと、早く言えばよかったのによお。まどろっこしいなお前。」

「…もう何も言わん。どちらにしろ、もう遅い。そら見る、マクルト一の騎士様がお怒りだ。」

一体いつからそこにいたのか。

ウォルターと呼ばれた蒼い鎧を着た騎士と、エウロスと呼ばれた翠の鎧を着た騎士が言い合っていた。

ラヴロマンス、と聞いたフレイヤは顔を赤らめティウルから離れ、ティウルは不機嫌そうに彼らに向かって口を開いた。

「…それで、いつからそこにいたんだ。」

「で・す・か・ら！つて、その嬢ちゃんが可愛らしく頬を膨らませた辺りからだ。」

「…お前もう喋るな。」

ニヤニヤ笑いながらウォルターが答えたのを聞いて、恥ずかしさのあまりにフレイヤが顔を手で覆う。

言っても無駄だと分かりながらも、一応エウロスがウォルターをたしなめる。

「ほとんど最初からではないか…まったく。ケセドとネツアクの騎士様はどうやらいい御趣味をしているようだ。」

「そうは言うがな、ティウル。なかなかに入りづらい雰囲気を出していたぞ。」

顔をしかめたティウルの嫌味をサラッと受け流し、そら見たこと

かとエウロスはウォルターを睨んだ。

ウォルターは素知らぬ顔で明後日の方角を向く…視線だけは、顔を真っ赤にして体をくねらせているフレイヤに向いていた。

手で頭を押さえたティウルは、ため息一つに二人に尋ねた。

「それで、先程私が聞きそびれた質問の回答は、当然君たちがしてくれるのだろっな。」

その言葉に、エウロスとウォルターは真剣な顔で答えた。

「勿論だ。かなり省いて説明すると、今マクルトの先発隊がティファレトへと向かっている。我々も明日の朝、本隊と共にマクルトを出てティファレトへ向かう予定だ。」

「お前が眠っている間、ケテルと評議会への対策を練るための会議が行われた。」

随分と飛ばされた予定を頭の片隅に置く。

そして、会議の議題に少し疑問を抱いたティウルはそのまま言葉にする。

「…？何故ケテルが？」

「想像はついているだろうが、詳しい話は後でだ。とにかく、今メタトロン様がないケテルが魔族の大群に狙われている。早ければ、もうケセドとゲブラに伝令が届いているはずだ。ビナーとコクマーに増援を送らせ、そこにいるケテルの兵をすべて戻し、ケテルの兵力を回復させる。」

「いろいろとあるが、会議の結果は　ケテルを防衛しダクトを

潰す、だ。そら、とつと来いよ。マクルト王がお待ちだ。それともそこで不貞寝して　仲間が死んでいくのを指加えて見とくか？」

その言葉に、弾けるようにティウルはベッドから起き上がる。

彼はもはや痛みなど感じてない　鋭い目に光を宿したティウルの顔は、騎士のソレに戻っていた。

「ティウル様、まだ御身体が！！」

慌てて止めようとするフレイヤをティウルは片手で制し、ベッドの近くに置かれていた傷一つない白銀の鎧を着はじめた。

「傷など時間が勝手に回復してくれる。弱音は吐いた。十分悔いた。　ならばあとは進むだけだ。」

「　どうか、お氣をつけて。」

ガシャリ、と音を立て鎧を着終わったティウルが、深紅のマントを揺らしながらエウロスとウォルターの待つ扉まで足を進める。

「フォルセティウス様のところまで案内してくれ　それと詳しく話を聞かせろ。」

今、マクルト王国の夜がまた明けようとしている。

過去に後悔し、女性に弱音を吐いていた青年はもういない。

そこにあるのは、マクルト王国最強の騎士の姿だった。

世界が崩壊するまで、残り5日。

10/20・上(前書き)

何か会話文だけになってしまったような気がしたりしなかったりです。

ううむ…文才が欲しい。

自分は、集落の他の子供たちよりも劣っていた。

どれだけ訓練したって、鍛えたって　追いつく頃にはもつと先へ行っていた。

自分が幼かったからとか、少し体が弱かったとか。そう言うのを言い訳にしたくなかった…と思う。

長の子供である自分が他と比べて勝らないのはよくても、劣っているのは恥ずかしかったし、両親に申し訳なかった。

「気にすることはない。追いつく必要もなければ追い越す必要もない。」

両親はよくそう言って励ましてくれたが、その度になんだか惨めな気分になった。

だから、一人で訓練するようになった。

訓練の際、他の子供たちが自分にペースを合わせてくれるのが悔しかったのもある。

訓練を見る大人たちや父親が、内心失望しているのだろうなと思うと、顔を合わせる事が出来なかったのも理由の一つだろう。

いつの間にか、自分は集落の外れの森で死体を相手に訓練するようになっていた。

集落に侵入しようとして命を落とした、物言わぬ死体。

どの様にすれば、この腕を切りやすいのだろう。

どの様にすれば、この脚を折りやすいのだろう。

どの様にすれば、効率的にばらばらにできるのだろう。

幼い頭で考えながら、毎日毎日訓練した。

死体を生きている人間に見立てて、狩りの練習もした。

今日は、このルートで背後から回り込んで首を刎ねてみようか。

この木を足場に飛んで、脳天から串刺しにしてみようか。

静かに近づいて、脚の腱から切ってみようか。

子供ながらにイメージを思い浮かべ、日々死体と戯れた。

いつ頃からだろうか。

そんな毎日を過ごしていたら、いつの間にか死体を”消せる”ようになっていた。

切っ掛けは、もうどの部分かわからない使い道の無くなったソレ。放っておけば森の獣が持つて行ってくれるが、その日は、何だか目障りだったので自分で如何にかしようと思った。

このぐらいにバラバラにしたら大丈夫だろう、と思いつく限りのイメージで細切れにしようとしてソレにナイフを通したら、刃が通った瞬間に跡形もなく消えてしまった。

驚いて、すぐに他のソレにも刃を通したが出来なかった。

何が違ったのだろうと不思議に思っただけ。もしかしてイメージが大事なのかなと思い、最初の様に思いつく限りのバラバラになったソレを思い浮かべて試してみると、消す事ができた。

同じ要領で何度も他のいろいろなソレに試してみたら、同じ様に何

度も消す事が出来た。

どのくらいの大きさまで消せるのだろうかと思い、どんどん対象を大きくしながら試していった。

少し勿体ないと思ったが、まだ使ってない死体も、頑張ってイメージして刃を通したら消す事が可能だった。

他の人も同じような事が出来るのだろうか。

もしそうなら、全てにおいて劣っている自分が初めて他の人と同じ位置に立てた事になる。

そう思うと、とても嬉しかった。

その日の晩、さっそく父親にその事を尋ねてみた。

答えは、否だった。

そんな事できる筈がない、何を馬鹿なことを、と相手にしてくれない父親。

その事が悲しくてむきになった自分は、そんなはずない、と今日の事を父親に伝えた。

父親は訝しむ様な目で自分を見て 明日見せてみる、と言った。

翌日になって、自分は急くような足取りでいつもの場所へ向かった。

少し遅れて、何故か苦笑した父親がやって来た。

さっそく自分は、確保していた死体に刃を通した。

もしかしたら昨日の事は夢だったのかもしれない、と思って不安になったがそんなことはなく、ちゃんと昨日の様に消す事が出来た。

自分の言った事は本当だっただろう、と父親の方を振り向く。

あまり感情を表に出さない父親にしては珍しく驚いたような顔をして そのあと難しい顔で死体のあった場所を睨んだ。

もしかして自分はとても悪い事をしてしまったのではないか。

不安になった自分は、恐る恐る父親の顔色を覗いてみる。

暫く難しい顔をしていた父親は、ふと気付いた様に自分を見ると
凄いぞ、とおかしな笑顔で自分の頭を撫でて褒めてくれた。

嬉しかった。

父親に褒められたのは、初めてウサギを狩ることができた時以来
だった。

その事が嬉しくて、誰にもできない事ができるのが嬉しくて、そ
の後も毎日死体を消した。

何時もの様に訓練し、使った死体はその日に消した。

そのうちに、消そうと思って刃を通すだけで消す事が出来るよう
になった。

消せるのは死体限定だったが、そんな事はどうでもよかった。

朝早くから夜遅くまで、飽きもせず毎日集落の外れの森に入り
浸った。

だからだろう。

そんなことに夢中になっていたから 気付いた時には手遅れだ
った。

” YO！明日なんか来ねえ！（yeah！）昨日なんかい
らねえ！！（y e a a a a a h！！） ”

ガバッと恭介は飛び起きた。

息を乱しながら、恭介は自分の体を見る

酷い寝汗だ。

胸がざわつく。

その理由を考えようとして　馬鹿馬鹿しい、と頭を振った。
まだ始まって無い自分が、そんな感情を感じる筈がない。

何かの勘違いだろうと思って、恭介は頭に手をやりため息をついた。

”　そこにあるのは何時だつてtoday！老若男女every day today！（Fooooo！！）　”

恭介は頭を押さえながら、何時もの様に時間を確認しようと時計を探す。

枕元にあるはずのそれはどこにもなく、恭介は顔をしかめて周囲を見渡す。

”　　今日も今日とて今日で今日！昨日は今日で明日も今日！
！（today！today！today！today！）　”

果たして時計は、何時もの壁の下に転がっていた。

いつの間にか投げていたのだろう。

ため息を一つ吐いて恭介はベッドから起き上がり、壁まで歩く。
時計を拾いベットまで放り投げた恭介は、そのまま壁を蹴り飛ばした。

”　　そう、生き残るべきは今！考えるべきはnow！！ye
aaaaa　”

いつかこの壁壊れるんじゃないだろうか。

恭介は一瞬そう考えたが　まあどうでもいいかと頭を振って、汗を流すために風呂場に向かった。

” 偉い人が言わねえなら、俺たちが言ってやる！少年よ、
今を生き延びろ！！”

「…さあ、夜没恭介を始めよう。」

日を追うことにはつきりとしていく夢。

シャワーと共に頬を流れる温かいものに気づく事のなかった恭介は、その日の朝、何時もの様にうまく笑顔を張り付ける事が出来なかった。

キンコンカンコン

チャイムと共に、その日の授業をすべて終えた学生たちが慌ただしく下校や部活の準備を行う。

恭介や正義の所属する3 Aもその例にもれず、騒がしい空気に包まれた。

今日はどこへ行くのか、部活面倒臭いな、とお喋りに花を咲かせるクラスメイト達を横目に見ながら恭介も荷物をまとめる。

「…それで？一体全体どうしたんだ？」

突然、後ろの席の正義から声をかけられた。

質問の意図が分からない、と荷物をまとめる手を休めて振り向きながら俺が答える。

何なんだよ藪から棒に。今現在の状態を言っているのなら、お前の質問の意味が分からなくて困ってる、とでも答えておこうか。」

「…だからよ、お前最近なんか元氣ないんじゃないの？何か悩み事でもあるのかと思っただが。」

その赤茶の髪をかきながら、正義は心配そうに話す。

別にそんな事はないのにな、と思いながら正義の珍しい表情を見つめて、俺は口を開いた。

何を根拠に。ご覧の通り夜没恭介は、今日も何事もなく絶賛営業中で御座います。…閉店間近だけだな。」

「…おいおい、夜没恭介検定1級の俺様の目は誤魔化せねえぞ。ほれほれ、何があったか親友に言ってみなさい。このどでかい器で受け入れてやろう。ん？」

両手を広げて、カモーンと馬鹿げたことを言う正義。

そのふざけた口調とは裏腹に、心配そうな表情は変わらなかった。こりゃ何を言っても無駄そうだなと思った恭介は、とつと話を切り替えることにした。

「何なんだそのふざけた検定は。それよりこの後はどうするんだ？昨日買いそびれたCD買いに行くんじゃないのかよ。」

「逃げるなよ。」

少し怒ったように正義が言う。

「何がだ。別に付き合わなくていいんなら俺は帰るぞ。あのふざけた歌のレパートリーが増えないのは、俺にとっては嬉しい限りだ。」

少し苛々したように恭介が言い放つ。

それを見ながら、正義は真剣な顔で恭介に言った。

「…一昨日から少し調子がおかしいだろうが。夢見が悪かったとか言っていたが、それが何か関係あるんじゃないのか？頼むから話してくれよ恭介。お前が気づいてるかは知らねえけど、今日の朝もうまく笑顔作れてなかったぞ。」

「大きなお世話だ。…よくもまあそんな太古の昔の出来事を覚えているな。そもそも俺がどんな夢を見ようが、お前に関係」

「関係無いなんて言ったら、殴り飛ばすぞ恭介。普段お前がどんな夢を見ようが関係ないがな、それがてめえのその剥いても剥がれねえ薄っぺらい笑顔を引っぺがすぐらいの事なら話は別なんだよ！」

素っ気なく言う恭介の態度が癪に障ったのか、胸ぐらを掴んで正義が声を荒げる。

不穏な空気を感じたのだらう、何人かのクラスメイト達がそくさと教室から出て行った。

残ったクラスメイトは、普段仲の良い二人がどうした、と何時もとほしばかり異なる事態の成り行きを見守る。

それを尻目に、いい加減頭にきた恭介は、構ってられるかとかばかりに胸ぐらを掴んでいる手を払いのけた。

「感動的な台詞をありがとう正義君。その涙あふれる言葉はお前に気がある女子に言ってるやれ。はつきりと言うが、お前に関係ある事が、俺には関係ない。それと…ああ、残念、只今を持って夜没恭介は閉店いたしました。用があるなら一昨日来い。」

「…そうかい。お前がそういうつもりなら、俺はもう何も言わねえよ。」

「そりゃ結構。」

吐き捨てるように言ってる顔を無表情にした恭介は、その場を後に教室の入り口へと向かう。

正義は払いのけられた手をそのままに、苦い顔で恭介を見送った。さあて、こりやまずい事になったぞと、成り行きを見守っていた気のいいクラスメイトたちが頭を悩ませていると

「ごめん！お兄ちゃん待った…きゃ！？先輩！？」

可愛らしい少女の驚いた声がその場に響いた。

険悪だったその場の雰囲気が一気に霧散する。

クラスメイトたちが声の主へと視線を向けると、そこには小柄な少女があたふたとしていた。

少女　椎名は、入り口のドアを開けた瞬間に突然現れた無表情の恭介に驚きつつ　恭介から見たら突然椎名が現れたのだが
恭介の後ろで突っ立っている兄の姿を見つけて声をかける。

「お兄ちゃん、ごめん！委員会があるの忘れてた！遅くなるから、買い物には先輩と一緒に行って！それじゃ、ごめんね！先輩も、お兄ちゃんをよろしく願います！！」

それだけ言うと、椎名はその場から元気に走り去って行った。
その場にいた全員がポカーンした表情で椎名を見送った。

我に返ったクラスメイトが、空気を読んで口を開く。

「相変わらず椎名ちゃん可愛いよなあ。九翔が羨ましいよ。」

「いやあ、俺も一回でいいから椎名ちゃんにせ・ん・ぱ・いって呼ばれてみたいなあ。恭介だけ羨ましいっての。」

「俺らには恥ずかしがって口開いてくれねえもんな。しっかし元気な子だよな。その小柄な体格に似合わない実った果実もまた良し。」

「ありやあ将来とんでもない事になるぞ。正義……いや、義兄さん！ここに優良物件があるんだけど椎名ちゃんにどうだい？」

クラスメイト達の言葉に気を持ち直した正義は、冗談言うなどと言葉を返す。

「そうだろう、そうだろう。自慢の妹だからな。お前らにはもったいなくてやれねえなあ。それに、椎名の相手は恭介しか認めん。」

「何てこと言っちゃっててくれんの！？椎名ちゃんの事も考えてやろうぜ。」

突然会話を振られた恭介は、驚いて正義に言葉を返した。

こりゃもう大丈夫そうだなと感じたクラスメイトが会話を締めくくる。

「ちえ、なんだもう御手付き状態かよ。正義様の気が変わるのを待ちましようかね。」

「いつまでたったって変わんねえよ馬鹿。…んー、俺としてはちやんと椎名の事を考えてるつもりなんだけどなあ。それで…閉店しちゃった恭介君は、妹に見捨てられた哀れな正義君を置いて帰っちゃうのかな？」

クラスメイトに軽く言葉を返した後、正義はニヤリと笑って恭介に言った。

そこに先程の雰囲気など全くなかった。

恭介は、降参だとも言つように両手を上げて振り返らずに答えた。

「…オーケー。臨時開店だバカヤロウ。」

そしてやっと、お互いに向かい合つて笑った。

一件落着、と安堵のため息をついたクラスメイトは、切っ掛けをくれた椎名に心の中でグッジョブを送りながら、教室を出ていく二人に仲裁の報酬をせびった。

「おい、明日ジュースの一本くらい奢れよー。」

「はいよ。…ったく、友達思いのクラスメイトを持つて幸せだよチクショウ。」

「っは、違いねえ。」

気のいいクラスメイト達のいる教室を後にして、二人は苦笑しながら街へと向かった。

「ちなみに聞くけど…夜没恭介検定一級って誰がいるの？」

「俺だけだ。…まこつつぁんと椎名が二級だな。」

「誰が試験官なんだよ…。」

「勿論俺だ。」

「…さいですか。」

「…いやあ、売り切れてなくてよかったよかった。もしかしたら他の街まで買いに行かねえといけねえかなと思っただぜ。」

「そりゃよう御座んした。…頼むから、夜中にそいつをコンボで聞いてくれるなよ。我慢できないなら、CDプレイヤーでイヤホンして聞いてくれ。」

お目当ての物が買えてホクホク顔の正義とは対照的に、恭介はげんなりとした顔で言う。

その言葉を聞いた正義は、この世の終わりだという顔で恭介に懇願した。

「そんな殺生な！！頼むよ、今日の夜はマイコンボでこいつの大鑑賞会って決めてるんだ！！」

「迷惑だ！安眠妨害も良い所だぞ！！…言っておくがな、お前の隣の部屋が俺や椎名ちゃんじゃなかったら、一週間もしないうちに寮追い出されてるぞ！！…椎名ちゃんも何で我慢できるんだ。」

たまったもんじゃない、と恭介は文句を言う。

「椎名は寝るときは耳栓着用だから問題無い。…恭介、寝られないならDVDでも貸してやろうか？シヨッキングレンジャーとバイオレンスライダーの全巻貸してやるよ。」

「いらん！！お前、それ兄貴としてどうかと思うぞ。俺は一回、衝撃的で暴力的なお前の頭の中を見てみたいよ。つかお前、ヒーローは辞めたんじゃないのかよ。嫌いになったとか言ってたなかったっけ？なんでだったか忘れたけど。」

正義が話すともない事実とありがた迷惑に、疲れたように恭介は言葉を返す。

「おう、嫌いだ。もう俺はヒーローなんかになれねえって分かってるし、なりたくもねえ。…けどよ、やっぱり憧れてるのはあるんだよ。テレビ見てるとき、思うんだよ。人を助けるためだとか言ってる好き勝手暴れまわって、その被害でどれだけの人が迷惑してるか気にしちゃいねえ。カッコよく巨大ロボに乗って戦闘したところで、建物ボコスカぶっ壊して、その足元できっと何人も人が死んでるんだ。けど…けどよ、それでも、人を助けてるんだ。感謝されてるんだよ。迷惑極まりない自称ヒーローに笑顔で感謝してる人たちを見るとさ…なんかなあ、やっぱり憧れちまうんだよなあ…おかしいか？」

「理解はできないけど、否定もしないよ。嫌いなのに憧れるって

のはなかなか無いぞ。…お前の趣味の悪い音楽も、そんな感じの理由があるのか？」

どこか遠い眼をして話す正義にそれとなく答えた恭介は、良い機会だと常々疑問に思っていた事を尋ねてみた。

「やっぱあれ嫌いかな？」

「いつも言ってるが嫌いだ。適当に日本語と英語をくつつけただけの歌詞に、あの叫んでるだけの様な歌い方が気に入らない。」

確認するように聞いた正義に、この際だからとはつきり恭介は答えた。

きつぱりとした否定に苦笑しながら正義は話し出した。

「…俺も最初はそうだったよ。いや、嫌いっつうかどうでもよかった。店にいるときにこのグループの曲が耳に入ってくると、なんだこれ、くつだらねえ歌って思う程度だった。」

「へえ…。」

意外な事実には恭介は少しだけ驚いた。

てつきり、何かこの歌馬鹿げてるから面白い、みたいな理由だと思っていたからだ。

正義の話は続く。

「切っ掛けは…そうだな、友達がデートがご破算になったつってこのグループのライブのチケットをくれて、一緒に見に行った時だった。別にどうでもよかったけど、暇つぶし程度にはなるかと思ってた。だけどいざ見にいったらさ…衝撃的だったよ。なんつーか

な、月並みだけど、心に響いたんだ。お前の言う通り、適当に日本語と英語をくつつけただけの歌…それをさ、あのグループは必死になって歌ってた。何かを伝えたくて、歌詞だけじゃ伝えきれない想いを何とかして伝えようとして、叫んでた。ああ、そうだな。ありやもう歌じゃなくて叫び声だ。…でも、グツとくるものがあつた。元気を貰ったような気がしたんだ。」

「……………」

恭介は黙って聞く。

きつとその時の状況を思い出しているのだらう。

先程と同じように遠くを見るような眼をした正義は、温かい笑みを浮かべていた。

「そんでな、ライブの帰りにCD買って聞いてみたんだよ。普段、何気ない所で耳に入る曲。けど、このグループが歌っているところを想像したらライブの時と同じような気持ちになった。それからだっけな…毎朝こいつ聞くようになったのは。朝家が出る時や、なんか嫌な事があつた時は必ず聞くようになった。お前のソレと同じだよ。俺の、一日を始めるための合図なんだこれは。」

「…そうか。」

話し終わってすっきりとした顔の正義に、恭介は何か考えるような表情を浮かべた。

会話が途切れる。

月明かりに照らされた、榊ヶ丘町の住宅街。

寮へと向かう規則的な足音だけが二人の耳に入ってきて来る。

会話が途切れても、二人の間に特に気まずい雰囲気はない。
秋の夜風に身を包みながら、お互い無言で寮へと足を進める。

「…夢だ。」

「ん？」

しばらくして、ポツリと呟く様に口を開く恭介に、正義は顔を向ける。

「…一昨日からかな、夢を見るんだ。」

「…それは、どんな夢なのか聞いても良いのか？」

なおも呟く恭介に、正義は確認するように尋ねた。

「…昔の夢だ…と思う。」

「…昔？毎日見るのか？」

「多分小さかった頃の夢だろうな。記憶には無いけど、他人の子供の頃の夢なんて見れる筈もないから。…あまり、夢の内容は覚えていない。一昨日は、そんな夢を見た、という事だけ覚えていた。昨日は、断片的だったけど、何もかもが赤い夢だった。…今日は、何も出来なかった子供の自分が、何かする事が出来て、顔も分からないけど父親の様な人物に褒められて 何かが手遅れだった夢だった。」

「……………」

語り続ける恭介。

正義は黙って聞いている。

「日に日に、はつきりしていった。一昨日はこんな日もあるだろうと思っただけだったけど、もう三回も見た。多分明日も見る事になるんだろう。…怖いんだ。怖いんだよ正義。」

「…恭介？」

恭介の声が次第に震えていく。

正義は少し驚いて、心配そうに声をかけたが、構わずに恭介は話し続ける。

「怖いんだ…自分が自分じゃなくなってしまうような気分なんだ。お前が学校で言った通りだよ。いつも張り付けているこの薄っぺらい笑顔も今日はなぜか上手く出来なかった。朝、鏡を見たとき驚いたよ…無表情なはずの顔が、今にも泣きそうな表情を浮かべていたんだ。笑えるよな、そもそも一昨日の時点で気付くべきだったんだ。苛々したんだ。なあ、正義分かるか？」まだ夜没恭介を始めていなかった”のに苛々したんだぜ？」

「……………」

正義は何も言う事が出来なかった。

震えた声で話す恭介は、普段と変わらない笑顔のはずなのにどこか歪んでいた。

「なあ、おかしいだろ？なんで苛々するんだ？ああ、確かに苛々はするだろうさ。怒りもするし、悲しい気分になる事もあるだろう。面白い事があれば、いつもの様な馬鹿げた笑顔で笑うとも。だけど、

それはあくまで”夜没恭介”の話だ。何にも始まつちやいないただの恭介がそんな感情を抱くはずがないだろう？そんな事有り得ないんだ。なのに…なのになんで、夢の後で胸がざわつくんだよ！！”

胸の内を明かすように、震える声は叫び声へと変わっていく。

それに比例するように段々と恭介の仮面が剥がれていく。

どこか可愛げのある、親しみやすい笑顔。

おそらく大多数に好意的に受け入れられるであろう顔。

夜没恭介の日常をつかさどる顔が、ボロボロと音を立てるように崩れて行って　今にも泣きそうな、彼を知る者から見れば想像もつかないような表情が現われる。

そんなに苦しかったのか、と恭介を見る正義の拳に力が入る。

「…違う、違うんだ恭介。その感情は紛れもないお前自身の

」

「　何が違うんだ！！この表情も！この感情も！全部お前からの貰いもんだ！！全部お前から教えてもらった通りに真似てきただけだ！！”夜没恭介”を始めて、やっと九翔正義の様に振る舞えるただの人形だ！！”

否定する正義を否定して、恭介はさらに叫ぶ。

「なあ、俺がただの恭介の時に前と言いつた事があつたか？え？無いだろうが！！当たり前だ！普段のお前との言い争いなんて全部茶番だ！！”夜没恭介”はただお前を真似ているだけの存在だから普段、鏡映しの自分を見ているような気になって反発しあうんだろつさ！！元気がない？お互いを心配？っは、馬鹿馬鹿しい

「一回でも”夜没恭介”を終わらせてしまえばそんな感情消えてなくなるっていうのに……ただの恭介が感じるものなんて何一つないっていうのに……」

「……違う……」

我慢できなくなつて正義が叫んだ。

恭介は口を噤んで睨む。

構わずに正義は、慎重に言葉を選んで、諭すように言った。

「いいか、よく聞け恭介。始まりは確かに俺を真似たものだっただろうさ。けどな、ただの恭介が何も感じないなんて事は、絶対に、無い。おっと、口を開くんじゃねえぞ。黙って聞け。そもそも、お前が本当にお前が言う通りにただ俺を真似ているだけだつて言うんなら お前から見た俺はそんな表情をするのか？もしかしてお前、今自分が笑つてるとでも思つてんのか？ん？誰が見たつて今のお前を”夜没恭介”だと思ふ奴なんかいねえぞ。」

バツと、その言葉を聞いた恭介はすぐに顔に手を当てた。表情を確かめるように頬を撫でて、あり得ないものでも見るかのような目で正義を見た。

気にせず、正義は言葉を続ける。

「……今まで何も言わなかったけどよ、今言つとかねえとお前が思い違いをしそうだからはっきりと言わせてもらうぞ。ただの恭介が何も感じるものが無いっていうんなら、なんでお前は毎朝毎朝俺の部屋の壁に物投げてくるんだ？まさか朝起きた瞬間から夜没恭介を始めますとかでも言つてんのか？ん？なんで俺に夢の話をしたんだ？お前もさっき言つただろうが。怖いってんなら”夜没恭介”を終わらせちまえば良いだけの話なんだ。なのに俺にその話をするって

ことは、”お前自身”が怖いっていう感情を抱いていたからじゃねえのか？え？だいたい、なんでお前は”夜没恭介”を始めるんだ？いや、そもそもの話　お前に感情が無いっていうんなら、なんでお前は俺を真似ようだなんて思ったんだよ。」

「……………」

考えれば考えるほどに、穴だらけだった恭介の理屈。

恭介は何も言い返せない。

そもそもの始まりからおかしかったのだ。

自分には感情なんてものが無いから、九翔正義を真似た”夜没恭介”という殻をかぶる　その前提から、間違っていた。

認めたくない、それ以上聞きたくない、と恭介は頭を押さえながら違う、違うと呟く。

それを見た正義は一瞬迷ったが、言葉を続ける事にした。

「お前言ったよな、怖いって。自分が自分じゃなくなるような気がするってよ。」

「止める！！」

ついに恭介は叫ぶ　が、正義は止めない。

「もし俺の想像している通りだとするんならよ、お前が怖がってるものっていうのは」

「止めろお！！」

ならば、あるいは、と正義は言葉を続ける事が出来なかった。

恭介より頭一つ分ほど、背の高い正義。

悲痛な叫び声と共に下から伸びてきた手によって、正義は顔を驚きにされていた。

「…頼むよ。…頼むからそれ以上言わないでくれ。」

それは先程の様な否定ではなく懇願。

顔を掴んでいる手に力がこもる。

正義は何も抵抗しない。

「…それ以上言われたら　きっと壊れてしまふ。」

胸をえぐられたかのような声で恭介は正義に頼む。

気付かせる事ぐらいいは、できただろう。

ならばあとは本人の問題か、と正義は分かったとでも言うように顔を掴む恭介の腕をポンポンと叩いた。

「ごめん、正義。…今日はもう帰るよ。一人にさせてくれ。」

手を離してすぐに、正義から背を向けて言った恭介。

正義はその顔を見る事が出来なかった。

仮面を剥がされた少年は、今どんな顔をしているのだろうか。

正義は何も言わずに恭介の背中を見つめる。

「大丈夫…大丈夫だから。明日にはちゃんと、いつもの”夜没恭介”になつてゐるから…。」

言つて、恭介は歩き出した。

「恭介。」

その背中に正義が声をかける。
恭介はピタリと立ち止まる。

「後はお前の問題だから、俺はもう何も言わねえよ。ただ、これだけは頭に入れてくれ。」何も無い所からは何も生まれない。
”…親父の言葉だ。”

何も言わず、そのまま恭介はまた歩き出した。
その姿が見えなくなるまで正義は恭介を見つめて こりゃあ時
間が掛かりそうだな、と夜空を仰いだ。

住宅街を照らす月が、次第に雲に覆われていく。
明日は降りそうだな、とそんな事を思いながら、正義も寮へと足を進めた。

これは、そんな買い物の帰り道での話。

10/20・下(前書き)

結構早く書き終わると思っていた7days。

思ったより長く続いてしまって、自分の見通しの甘さに嘆いてお
ります。

いや、でも入れたい話がいっぱいあるんだよなあ・・・ぐえ、す
いません！

団扇で仰がないで！飛んでいくう

！？

カツ、カツ、カツ、と廊下に複数の足音が響く。

マクルトの王宮を足早に歩きながら、三人の男性が会話をしていた。

「それで、私たちが本隊に加わりマクルトを出発すると言っていたが、その後は？」

「俺たち本隊がティファレトに着くころには、おそらく先発隊がティファレトを囲っているダートの兵を蹴散らしてるはずだ。ダートが増援を送っていて処理できてない場合もあるかもしれないが、ティファレト側からも兵を出すからおそらく大丈夫だろう。そして先発隊と合流した後、後続の隊とネツアクの軍が来るまでティファレトに在留し、おそらく来るであろうダートの軍からティファレトの防衛。」

ティウルの言葉に、その蒼眼を鋭く光らせたウォルターが答える。そういえばそうだった、とティウルは苦い顔をして口を開く。

「…そういえば、ダートがティファレトを囲んでいたんだっただな。しかし奴らの目的が分かん。何故今表立って軍を動かしたんだ？今思えば、ギーメルの封鎖は私たちを逃がさないためではなく、何か目的があつてのことだとは思うんだが。ティファレトを囲うにし

ても、計画の妨害としか予想はできないが…妨害する意味が分らない。確かに反対はしていたが、あくまでそれは時期ではないというのが理由だった。計画自体は奴らも認めているんだ。ダートが開く事は奴らにとっても本意ではないはずなんだが…。」

「あの無駄に年取っただけの老人会の考える事なんて、今を輝く俺たちが分かるわけねえだろうが。大方、悪知恵振りしぼって良からぬ企み事でもしてるんだろうさ。俺たちにできるのは最悪の事態を考えて動くことぐらいだろうよ。」

考えるだけ無駄無駄、と青い髪を掻きながらティウルに言葉を返すウルター。

その言葉に隣で歩いていたエウロスも頷き、赤銅色の髪に隠れた目を細めて口を開く。

「その通りだ。考えるべきは評議会の事ではなく、まずケテルの防衛だ。だがお前の言う通り、ダートがティファレトを囲っているのは計画の妨害を考えての事だろう。しかし、マクルト王はその事をちゃんと考えていらっしやる。今回の作戦にはティファレトの防衛も織り込まれている。今我々が出来るのはそのくらいだろう。」

「そうか…そうだな。ダートがティファレトに来るのであればそれを守ればいいだけの話。それ以外考える必要もない。何よりも考えなければいけないのは、ケテルを守りきることだった。すまんな、話を中断させて。その後は？」

すまない、と頭を振って作戦の続きを尋ねるティウル。
気にするな、とエウロスが口を開く。

「…後続の隊と、ネツアクの軍がティファレトに到着したら、部

隊を三つに分ける。先発隊と本隊を合わせた部隊は、ザインを通り、ビナーへ。ネツアクの軍はヘーを通り、コクマへ。後続の隊は、そのままティファレトに在留し、ティファレトの軍と共にダアトに備える。ビナーに到着したマクルト軍は、ビナーの軍と詳細を打ち合わせてケテルへと向かう。コクマに到着したネツアクの軍も同様だ。両軍がケテルへと着く頃には、メタトロン様もお戻りになっているだろう。万全の態勢で魔族に備える。」

「さすがにギーマルを強行突破と行く訳にはいかないか：ケセドとゲブラーはどう動くんだ？」

「自国の防衛だ。両国とも、ビナーとコクマーに結構な戦力を送っている。ともすれば、それを狙ってダアトがティファレトから両国に標的を変えるやもしれんからな。イエソドとホドも同様だ。ダアトがティファレトに大軍を送ってきた場合、外からそれを攻めるように手筈は打ってある。」

病室での穏やかな雰囲気はどこにもない。

今行ってるのは親睦を深めるやりとりでは無く、殺し合いのための状況確認。

エウロスとウォルターの話を聞くティウルの顔は、見る者を惹き付ける穏和な表情ではなく、味方を鼓舞し、相対した敵に絶望を抱かせる騎士のソレ。

「まあそういう訳だ。ダアトにはそれなりに警戒しつつ、万全の状態でケテルを守りきる。んで、上手いことケテルを防衛した後なんだが：北側から、ケテル防衛にあたっていたケテル、ビナー、コクマー、マクルト、ネツアクの五国の軍、南側から、ダアトに備えていたケセド、ゲブラー、ティファレト、イエソド、ホドの五国の軍で南北からギーマルを突破して」

「ダートを落とす、か。」

「そういう事だ。…まあ、上手い具合に事が進めばの話なんだけどな。勿論、向こうも表立って軍を動かした以上、そういうことはあり得るって頭には入っているだろうさ。何らかの対策を立てていたっておかしくはない…いや、あの爺さんたちの事だから絶対対策はあるだろう。けどよ、セフィロトの十国から攻められてみる…俺だったら人生諦めるね。」

「…心にもない事を。君だったらたった一人でも暴れまわってそうだな。」

作戦の説明を締めくくるようにウォルターがおどけた口調で言い、ティウルがお前だったらやりそうだと軽い口調で返した。

カツ、と足音が止む。

立ち止まった三人の目の前には、謁見室とは違い質素な作りの会議室の扉。この扉の向こうにフォルセティウスがいる。

ティウルはそのまま木製の扉をノックしようとして、それを中断し、後ろで待つ二人の方に振りかえる。

「どうした？入んねえのか？」

「何か聞き残してもあったか？」

ウォルターとエウロスが、何かあったのかと怪訝そうな顔でティウルを見る。

その視線を受けながら、頬を掻いてティウルが口を開いた。

「その…なんだ。今更になつたが、助けてもらつてすまなかつた。君たちのおかげでマクルトに帰還する事が出来た。ウォルター、君があの場合にいなかったら騎士団は全滅していただろう。エウロス、君たちネツアクの騎士と合流出来てなかつたら、私たちは無事にコフを抜ける事が出来なかつただろう。感謝する。」

言つて、頭を下げるティウル。

ウォルターとエウロスはお互いに顔を見合わせ　　気にするなとティウルに笑いかけた。

「っは、そんな事かよ。気にすんな気にすんな。困った時はお互い様だ。」

「此方としても君たちがいなかったら、無事にコフを抜けられなかつた。あの化け物にとどめを刺したのは君だろう？感謝するのは私の方だよ。」

その言葉を聞いて、ティウルもまた軽く笑う。

そして、今度こそ扉をノックした。

少し間をおいた後、入れ、と厳肅な声が返ってくる。

「…失礼します。」

そう言つてティウルは、顔を真剣な表情に戻して扉を開けた。

扉の向こうには、険しい顔をしたフォルセティウス王と二人の天使が、待ちかまえていたかのようにそこに居た。

会議が終わり、閑散とした一室。
そのテンプルの上で手を組んで、フォルセティウスは一人頭を悩ませていた。

ケテルの事も心配だが、何よりもダートの評議会の動きが気になる。

今の今まで動かなかったダートが、表立って軍を動かした事それがフォルセティウスの悩みの原因だった。

一応の対策はした。

今現在ティファレトを囲っているダートの軍は、昨日出発した先発隊とティファレトの軍によって追い返されているはずだ。

ゲブラーとケセドには一応の備えはしておくようにと通達はある。

イエソドとホドにもティファレトに大軍が攻めてきた場合、打って出るようにと伝令は送った。

が、あの評議会が黙ってそれを見過ごすのだろうか。

ギームルの封鎖はティウル達を逃がさないようにするためだったのではなく、何か目的があつてのことだろう。

ティファレトに兵を向かわせたのは計画の妨害以外に考えつかない。

だが何故？

奇しくも、ティウルと同じ考えに至ったフォルセティウスは眉間にしわを寄せる。

リスクが大きすぎる。

フォルセティウスがどういう行動をとるかなど評議会は分かりきっているだろう。

評議会の行動は、自身を攻める口実を与える物だと理解しているはずだ。

現にフォルセティウスは、ケテルを防衛した後ダートを攻め落とす計画を立てた。

何か対抗しうる策があるのだろうか　いやそんな物がある筈がない。

セフィロトの十国に一点に攻められては、対策も何もないのだ。仮に何かしらの策があつたとしても、それならそれで最悪十天使を向かわせれば全て片がつく。

ダートが落とされるのは時間の問題であり、確定された未来。

だから、だからこそ、何故評議会は軍を動かしたのか。

それほどまでに計画を妨害したかったのか？

有り得ない。

彼らは計画自体は反対はしていない。

あくまでも時期の問題だという理由での不承認。

そもそも、この計画の発端は彼らなのだ。

妨害して何の意味がある　だが妨害以外に何の理由があるのか。

魔族が攻めてきた騒動に乗じて、手薄の国を取るか？

これも有り得ない。

ビナーとコクマーを攻めたところで、下手すれば魔族との戦闘に巻き込まれる。

ケテルを攻めたところで、待っているのは魔族の大群だ。

ケセドとゲブラ　を攻めたところで、彼らに何の得がある？

そう、意味など無い。

そもそも他国を攻め落とす理由が無い。

フォルセティウスと同様に、評議会もセフィロトにおいて最高の権力を持っている。

いや、場合によってはフォルセティウスよりもその権力は大きい。指先一つで十国をある程度好きなように動かせる彼らが、そもそ

もの話として軍を動かす必要性は皆無なのだ。

故に、目的が分からない。

故に、恐ろしい。

組まれた手に力が入る。

自身を混乱させることが目的なのだろうか　ならば、その目論見は成功している。

だが、評議会が自身の身と引き換えにそんな企みをする程、おめでたい性格などしているはずもない。

馬鹿馬鹿しい考えを頭の隅に追いやり、フォルセティウスは思考の海にその身を沈める。

その時会議室の扉が開き、二人の人物が入ってきた。

「失礼します、フォルセティウス様。扉を叩いてもお返事が無かったので、失礼ながらそのまま入らせていただきました。…遅くなりましたが、只今帰還いたしました。」

「何だその言い方は。俺に対する当て付けか、エリヤ？何度も言わせるな。あの道理のわからん馬鹿共が、いつまでもこねるからいけないのだ。それに遅くなるのが嫌だったのなら、とっとと貴様だけ帰れば済む話だっただろうが。」

扉が開く音と共に、凜々しい声と人を見下したような威圧感のある声がフォルセティウスの耳に入ってくる。

フォルセティウスが思考を中断して声のする方へ視線を向けると、マクルト特有の白銀の鎧に身を包んだ透き通るような白い髪をした男性と、純白のローブに身を包んだ灰色に近い白髪の男性が口論をしていた。

「誰もそんな事を言っていないだろう、エノク。お前を置いて帰るなど出来る筈もないだろう。それにフォルセティウス様の御前だ、
慎め。」

「…なんだ、そこに居たのかフォルセティウス。人が一仕事終えて帰ってきたというのに、労いもせず難しい顔をして良い御身分だな。」

ローブの男の辛辣な言葉に苦笑しながら、フォルセティウスは口を開いた。

「…帰ってきたか。長旅ご苦労だったな、エノク、エリヤ。」

「いえ、国の為ならばこの程度の事など何とも御座いません。
エノク、慎めと言ったはずだが。」

フォルセティウスの労いの言葉に頭を下げた後、エリヤと呼ばれた鎧の男　サンダルフォンは、隣の男を睨んだ。

それに対してエノクと呼ばれたローブの男　メタトロンは、知った事かと鼻で笑う。

「っは、何度も同じことを言わせてくれるなよ、エリヤ。毎度の事だが、何故俺がこの男に対してそんな殊勝な態度を取らなければならん。それに一応はこの男の頼みを聞いてやったんだ。そんな風に睨まれる覚えはないんだがな。」

「　　エノク!!」

「構わんよ、エリヤ。エノクの言う事は当然だ。私に仕える者でもないのに、無理を言って頼みを聞いて貰ったのだ。感謝こそすれ、

怒る事など何もない。」

メタトロンの尊大な態度に憤るサンダルフォンを、フォエウセテ
イウスは片手で制した。

その言葉に、ザマアミロでも言うように人を食ったような顔で
メタトロンの口を開く。

「…だ、そうだが？貴様の大好きなフォルセティウス様がこう言
うんだ。あんまり怖い顔をしてくれるなよ。それに言っておくがな
エリヤ。俺はこの男だから、聞かんでもいい頼みをわざわざ聞いて
やったんだ。他の奴が同じ様な頼みをしてきたら即刻串刺しにして
たところだよ。そこを勘違いするな。」

「…もういい、フォルセティウス様の寛大なお心に感謝するんだ
な。」

「あまり難しい顔をするな、エリヤ。本来なら君だけに頼むしか
なかった任務をエノクは快く手伝ってくれた…有難い事だよ。

それで、結果はどうだったのだ？」

納得いかないと苦い顔をするサンダルフォンに苦笑しながら、フ
オルセティウスは仕事の成果を尋ねる。

尋ねられた二人は、表情を真面目な顔に一転させて答える。

「結論から言えば、火神と水神が立った。…これだけだと聞こえ
はいいがな、有事の際という限定つきだ。」

「フォルセティウス様、アベスターグは今、ダエーワとの争いで
手が離せないらしいのです。」

「そうか…ミストラとヴァルナが動いてくれるか…。それにしても、
ダエーワが？絶対悪がまた動いたのか？」

フォルセティウスはメタトロンの報告に一安堵した後、サンダル
フォンの言葉を聞いて訝しげに尋ねた。

「普段のいざこざを誇張表現しているだけで、実際は大した事な
ど無い。ただ此方に増援を送りたくないがための口実だ。」

「そんな事はない。我々がアベスターグに入った時も何度か悪魔
に襲撃されただろう。あちらはあちらで大変なのだ、二神を動か
してくれただけでも感謝しなくては。」

吐き捨てるように言うメタトロンの、サンダルフォンが反論する。
その言葉に、反吐が出るとも言うように顔をしかめたメタトロ
ンが口を開く。

「だから言っているだろう、あそこはそれが日常茶飯事なんだ。
人の一挙手一投足に善だの悪だのごちゃごちゃ抜かすような奴らに
とっては、毎日が世界滅亡の危機だろうよ。聞けよ、フォルセティ
ウス。あの馬鹿共、俺が口を開くたびに悪だ悪だと五月蠅くて敵わ
ん。エリヤが止めなかったら串刺しにして皆殺しにしていたところ
だ。」

「滅多な事を言うな。あれはお前の口のきき方が悪いからだろう。
あんな言い方では誰でも不快な思いをするに決まっている。」

余程の事を言ったのだろう。

サンダルフォンは苦い顔で注意したが、メタトロンはそれを鼻で
笑った。

「っは、戯けた話だ。現界している神が一天使の戯言に腹を立てるとは随分と器の小さい。フォルセティウスの爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいな。…それにあれは奴らがおめでたい頭をしているからだ。ダートが開けば奴らも善だ悪だと遊んでる場合ではなくなるといふのにああだこうだと…。フォルセティウス、確かに奴らは有事の際には手を貸すとは言ったがな、期待はするな。おそらく事がうまく進んだ場合には手を貸しては来ないだろう。ダートが開く間際になって慌ててやって来るか、勝利を目前としたときにやってきて恩を売っていくかのどちらかだ。」

あまり期待はするなと言うメタトロンの言葉に、構わないとフォルセティウスは難しい顔で答える。

「いや、上出来だ。最悪の事態に駆けつけてくれるだけでも有難い。勝利を目前にやってきたとしてもそれが押しの一手になってくれるなら御の字だ。アフラの双壁の言質が取れたのならこれ以上は望むべくもない。しかし本当にダエーワは問題ないのか？もしアレが本腰を入れて動いているのならこちらとしても被害が来ないように警戒する必要があるが。」

「無い。身の程知らずに襲ってきた悪魔たちも挨拶程度だった。何時もの様に絶対悪がアムシャの馬鹿共をからかって遊んでいるだけだろう。」

「…問題はないとは言い切れませんが、アベスターグ内から戦火が広がるほどではない事は確実です。」

メタトロンとサンダルフォンが断言する。
ならば安心だと、フォルセティウスは安堵のため息をついた。

「いや、問題が無いのなら良かった。まったく…これ以上心配事が増えたら王の責務を放棄していたところだよ。」

「おお、そいつはいい。おいフォルセティウス、お前天使にでもなつたらどうだ？…そうだな、ザドキエル辺りはどうだ？アレも天使になつて久しくないからな、そろそろ引退しても良い頃合いだろう。後継として立候補してみろ。ザドキエルには俺から言つてやろう。」

「はは、私に正義を名乗れと？私ではその器じゃなからう、エノク。しかしそうだな…いざとなつたら天使になることも視野に入れておくか？私の後はティウルにでも任せておけば安泰だろう。」

冗談を言い合う二人を　メタトロンは結構本気だが　苦い顔で見ながらサンダルフォンが口を開く。

「フォルセティウス様、冗談でもそのようなことをおっしゃらないで下さい。私たち以外の者が聞けば皆卒倒致します。それに王、ティウルは王の器ではありません。彼は人の後ろで待つ事が出来ない人物です。彼は騎士としてしか生きていきません。それにしても…何かお悩み事でもあるのですか？ここに来るまでの間、兵たちが慌ただし動いているのを見ました。私たちがいない間に何か起こったのですか？」

「　　そうだな、そうだった。お前たちには話しておかねばなるまい。」

サンダルフォンの質問に、フォルセティウスが険しい顔をして答えようとする。

だが、メタトロンがそれを何とでもないような口調で中断した。

「それは俺も気になっていたところだがな、まず先に客を入れたらどうだ？」

訝しげな顔でフォルセティウスはメタトロンを見る。

彼の言葉の後から間をおかずに、扉をノックする音が聞こえた。

「…噂のティウルがお出ましの様だ。」

メタトロンの言葉に、フォルセティウスは、丁度良かった、とため息をついて 入れ、と口にした。

「…失礼します。」

その言葉と共に扉が開き、ティウル、ウォルター、エウロスの三人が入ってきた。

「よく来た、ティウル。ウォルターとエウロスも済まなかったな。これから丁度今後の話をしようと思っていたところだ。…体調の方はもういいのか？」

フォルセティウスの言葉に三人が頭を下げる。

そして、頭を上げて悔しそうにティウルが口を開く。

「はい、もう大丈夫です。フォルセティウス様、ご心配お掛けして申し訳御座いませんでした。…今回の失態、どんな罰でもお受けいたします。お預かりした騎士の大部分を失い、騎士として恥ずかしい限りです。何も言える事は御座いません。」

「よい、気にするな。仕方のない事だ。頭を上げる、ティウル。お前でなかったらおそらく騎士団は壊滅していた。…今回の事は評議会の動きを予想できなかった私の失態なのだ。お前は十分期待に応えてくれた。」

「勿体無きお言葉でございます。この失態は戦場での働きで必ずや。…フォルセティウス様、御二方は何時頃お戻りになられたのですか？」

もう一度フォルセティウスに頭を下げた後、メタトロンとサンダルフォンを見てティウルは尋ねた。

「つい先程だ。…ティウル、その様子だと手酷くやられたらしいな。王国最強の騎士が情けないぞ。何があつたのかは知らんが、例えそれが負けて仕方のない事であっても、勝利を奪い取ってこのマクルトに部下を無事に連れて帰って来るのがお前の役目のはずだ。気合を入れなおせ。」

「返す言葉もございません、サンダルフォン様。今回の事は全て私の責任です。必ずや汚名は返上いたします。…それで、失われた部下の命が戻って来る事はありませんが、せめて彼らが報われるように身を粉にして働かせていただきます。」

サンダルフォンの厳しい言葉に、恥じ入るようにティウルは謝罪する。

それを見たメタトロンが無茶を言うなと口を開く。

「おいおい、あんまり虐めてやるなエリヤ。ティウルが負けて帰って来るなんて滅多なことではないだろう。…それで、お前はどこの魔王と戦ってきたんだ？」

「…ただの人間だが？それにサンダルフォン様の仰ることは事実だ。貴様が口を挟むなメタトロン。」

きつい口調で言つて、ティウルはメタトロンを睨む。

「俺の聞き間違いか？」様が抜けているようだが。一応俺は貴様の好きなエリヤと同じで国を守る守護天使なんだがな。忘れたか？唯の人間如きがこの俺に不遜な態度をとるな。串刺しにするぞ。」

「やってみるがいい。その前に貴様の首を刎ね飛ばしてやろう。何故フォルセティウス様に敬意を払わない貴様に様付けなどしなればいけないのだ。そもそも不遜な態度なのは貴様の方だろう。フォルセティウス様の寛大なお心でそれが許されているが、正直貴様が王と一緒にの場所にいただけで不快だ。報告を終えたのなら早々に飼い主の元へ帰れ。」

険悪な空気が漂う。

フォルセティウスとサンダルフォンは、またかといった表情をして顔を手で押さえる。

ウォルターとエウロスは茫然とした表情でそれを見ていた。

セフィロトに存在する十国のそれぞれに一人ずつ存在する守護天使。

人を超越した身でありながら、各国に仕え国を守護する彼らは、現界にいる神が居ないセフィロトの民たちにとって神とほぼ同じ存在であり、敬うべき対象である。

ケテルを守護するメタトロンもその内の一人であり、尚且つ現守護天使において最強を誇る。

そのメタトロンに対して、騎士の鏡ともいえる礼儀正しいティウルが敵意を向けて暴言を吐いている。

彼らしくもない態度に、ウォルターとエウロスは生きた心地がしなかった。

そんな二人をそつちのけでメタトロンとティウルの口論が続く。

「ふざけた事を抜かすなよ、ティウル。何度も言うが、何故俺がフォルセティウスなどに敬意を払わねばならん。俺が仕えているのはケテルの王だ。決してフォルセティウスなどでは無い。」

「此方こそ何度も言わせるなよ、メタトロン。私が仕えているのはフォルセティウス様だ。断じてケテルの王では無い。故に、貴様に払う敬意など一欠片も持ち合わせていない。」

「…ああ、道理だな。でなければ貴様などとうの昔に串刺しにしている。まったく、あまり噛み付いてくれるなよ、ティウル。らしくないな。」

「そうだな、私もなぜ自分がまだ生きているのか不思議に思う時があるよ。いや、済まない。思っていた以上に余裕が無かったみたいだ。」

「いつも言っているだろう。お前は俺と同じ”最強”の騎士だ。ならば常に堂々として余裕を持っている。それが部下を安心させる事になると分かっているだろう。」

「そうは言うがな、私にはなかなか君の様に唯我独尊にはなれる気がしない。」

険悪な雰囲気から一転、友人の様に笑いあう二人を見て、ウォル

ターとエウロスはもう訳が分からないとばかりに思考を放棄した。
まあ初めて見る者にはこの状況についていけないだろうなど、サ
ンダルフォンは二人に同情した。

「それで、メタトロン。先程も言ったが、早くケテルに戻った方
がいい。フォルセティウス様からまだ聞いていないのか？」

「…何？おい、どういう事だフォルセティウス。」

ティウル言葉に、顔を真剣な表情に戻したメタトロンがフォル
セティウスに尋ねる。

いつもと変わらない二人の様子に苦笑していたフォルセティウス
は、やっと終わったかと口を開いた。

「…もういいのか？そうだな、これからそれを話そうと思ってい
たのだが…メタトロン、率直に言うが今ケテルが危ない。魔族の大
軍に狙われている。後の事はいいから、すぐにケテルに戻れ。おそ
らく本国に戻ったケテルの兵によって、ケテルの王も事態は把握し
ている筈。詳細は彼に尋ねろ。」

「…分かった。直ぐに城に戻る。」

フォルセティウスの言葉に応えるやいなや、メタトロンの体が白
光に包まれていく。

「メタトロン…私たちも直ぐにケテルへと向かう。…フレイを任
せた。」

「誰に口を聞いている。お前たちは亀の様にのんびりと来るがい
いさ。ケテルに着く頃には串刺しの魔族共が迎えてくれる。」

光に包まれ、消えていくメタトロンのティウルが声をかける。
メタトロンは当然だと答えて　白光と共に跡形もなく消えた。
ケテルの城の守護者の間へと戻ったのだろう。
ティウルがさっきまでメタトロンの居た場所を見つめていると、
後ろから安堵の声が聞こえた。

「なんだ、どうしたんだ二人とも。」

ティウルは振り向いて、冷や汗をかいていた二人　ウォルター
とエウロスに声をかける。

「まったく…気が気ではなかったぞ、ティウル。」

「どうしたってお前…いつお前の首が飛ぶのかと思うと、生きた
心地がしなかったぞ。」

「あー…いや、済まない。分かってはいるんだがな、どうしても
彼と顔を合わせるとこうなってしまうんだ。」

心配そうにため息をついて話す二人に、ティウルはバツが悪そう
に答えた。

呆れた顔で、サンダルフォンも口を開く。

「毎度の事だがな、ティウル。王でもないのに守護天使に向かっ
てあんな口を聞ける者など、後にも先にもお前だけだ。…まあ、奴
に関しては気持ち分からないでもないんだがな。」

サンダルフォンの言葉を最後に、いい加減話を進めようとフォル
セティウスが口を開いた。

「さて。」

その一言で、ティウル達の顔色が変わる。

そもそも、先程の様な話をしている場合では無かったのだ。

ティウル達は真剣な眼差しで、フォルセティウスの次の言葉を待つ。

「ティウル、作戦の内容は。」

「ここに来る前に彼らから聞いて把握しています。」

「念のために聞くが、体の方は大丈夫なんだな？」

「問題ありません。」

「ならばお前にも本隊に加わって作戦に参加してもらおう。
つ発てる？」

い

「直ぐにでも。」

フォルセティウスの確認に、ティウルは即答していく。

「よろしい。…ウォルター、エウロス。君たちは？」

「準備は既に整っています。あとはご命令を。」

フォルセティウスは、エウロスとウォルターにも確認を取る。
ティウルと同様に二人も即答する。

フォルセティウスは一度頷くと、三人に命令を下した。

「いいだろう。本隊が今出発の最終準備をしている筈だ。三人とも本隊の準備が整い次第、共にマクルトを発て。ティウル、本隊の指揮はお前に任せる。今度こそ、お前が望む勝利を挙げて見せる。」

「御意。」

一度フォルセティウスに頭を下げ、三人は足早に会議室を出て行った。

去っていくティウル達を見つめながら、サンダルフォンがフォルセティウスに話しかける。

「フォルセティウス様：。」

「分かっている、君の心配は尤もだ。だがティウルなら大丈夫だろう。」

「いえ、そうなのですが、そうではなくて：。」

珍しく言葉を濁すサンダルフォンを、フォルセティウスは訝しげな視線で見る。

その視線を受けながら、サンダルフォンは申し訳なさそうに口を開いた。

「その、フォルセティウス様。：申し訳ありませんが、私がマクルトを外している間に何があったのか聞いてもよろしいでしょうか。：。」

「……………すまん、失念していた。」

太陽の光に照らされたマクルト王国。
城門付近では、慌ただしく走り回る重装備の兵士たちの姿が見える。

猛々しい騎馬の嘶きと響き渡る武器の金属音が、戦いの時が近い事を告げていた。

世界が崩壊するまで、残り4日。

10/21・上? (前書き)

長らく、大変長らくお待たせしましたあ!!

いや、忙しいということもあったという言い訳もしちゃいますが、一ヶ月もかかってしまったのは申し訳なかったです。

本当はもう1キャラあたり出したかったのですが、書いてるうちに頭の中と少し違う展開になっちゃいまして、ハイ。

ああ、腐った脳内を分にとめるのはムズカシイイイ。

遅くなりましたが、949PVと166ユニークありがとうございます!!

評価を入れてくださった方もいらっしやることに感激です、大変励みになります。

これからもえっちらおっちら頑張っていきますのでどうか宜しくお願いします。

とある二階建ての一軒家の一室。

六畳間の和室には、三人分の布団が敷かれている。

その部屋の片隅で、大人しそうな黒髪の少年が一人で旅行用の大きな鞆を漁っていた。

暫くして、お目当ての物を見つけて頬を少し緩ませた少年の耳に、ガラリと襖が開く音が耳に入ってきた。

少年が音の方へ顔を向けると、赤味がかった茶髪をした活発そうな少年が襖を閉めて黒髪の少年の方へと歩いてきた。

黒髪の少年は少しだけそれを見つめていたが、直ぐに興味を無くして漁った荷物を整理する作業に没頭し始める。

それに腹が立ったのか、少し顔をしかめて茶髪の少年が黒髪の少年に向かって声をかけた。

「おい！」

「………？」

黒髪の少年は作業の手を休めて、茶髪の少年が誰に声をかけたのだらうと周りを見る。

その和室には黒髪の少年と茶髪の少年しかおらず、こいつ舐めてんのかといった表情で苛ついた声で茶髪の少年が口を開く。

「何キヨロキヨロしてんだよ！お前だよお前！」

「……何？」

やっと自分に向かって話しかけているのだと気付いた黒髪の少年は、だがしかし何故声をかけられたかを理解できずに、若干顔に不思議そうな表情を浮かべて茶髪の少年に尋ねる。

その態度が茶髪の少年を何故か更に苛立たせるが、それでも茶髪の少年は声を押さえて黒髪の少年に向かって口を開いた。

「お前、自分の親父のこと好きか？」

「……？好きだけど、君は僕のお父さんの事嫌いなのか？」

ますます訳が分からない、とばかりに顔に困惑の表情を浮かべた黒髪の少年は一応自分の意見を言って、茶髪の少年に質問をする。

「……！！なんで好きなんだよ！……俺はお前の親父なんか大嫌い」

黒髪の少年の言葉に、今度こそ憤慨した茶髪の少年は怒り露に怒鳴って 最後まで言葉を口にする事が出来なかった。

自身の父親を嫌悪する言葉を聞いた瞬間に、黒髪の少年が茶髪の少年を蹴り飛ばしたからだ。

部屋の壁まで飛ばされた茶髪の少年は、何が起ったか分からないという表情で黒髪の少年を見る。

怒りを内に隠した無表情の黒髪の少年は、ただじっと茶髪の少年を睨んでいる。

それを見て、やっと自分が何をされたか理解した茶髪の少年は

「いつてえええええ！」

耐えきれなくなつて叫び声をあげた。

叫び声に反応したかのように、ドタバタとした足音が部屋に近づいてくる。

ガラっという音と共に乱暴に襖が開かれ、白髪混じりの茶髪に無精髭を生やした男性と、艶やかな黒髪を腰まで伸ばした女性が慌ただしく部屋に入って来た。

無精髭の男性は壁際で蹲つて叫んでいる茶髪の少年を見ると、驚きで目を見開いて声をかける。

「おい、どうした正義！」

「正義君！？……恭介！貴方何したの！？」

黒髪の女性は茶髪の少年　正義を一目見ると口を手で覆い、傍に立っていた黒髪の少年　恭介に向かって問い詰めた。

恭介はなおも無表情で正義を睨んだまま、自身の母親である黒髪の女性の質問に答える。

「……こいつ、お父さんの事大嫌いだって言った。」

「当たり前だ！お前の親父なんて人殺しの悪い奴じゃないか！！」

「正義！」

痛みより怒りの方が勝ったのか、恭介の言葉に痛みを堪えた正義

が叫んで返す。

正義の言葉を聞いた瞬間、父親であろう無精髭の男性が凄惨な剣幕で正義を叱って言葉を止めようとした。

「……………」

だが遅かった。

正義の言葉を聞いた恭介は直ぐに拳を振りかぶって正義を殴りに行こうとする。

「ヒイ!？」

「ちよつと恭介!？やめなさい やめなさいってば!!」

先程蹴り飛ばされたのが効いたのか、正義は怯えた声をあげて父親の影に隠れた。

恭介の母親はまた殴りに向かおうとする恭介を、慌てて抑えて止める。

母親に抑えられた恭介は無理矢理自身の母親を振りほどく事が出来ず、だがしかし正義の暴言を許す事も出来なかったので、何とか抜け出そうと母親の腕の中でもがいていた。

母親に抑えられた物静かな少年が父親の影に隠れた活発な少年を殴りに行こうとするという、普通に考えれば立場が逆だろうという光景。

父親に拳骨を貰った正義が泣きながら恭介に謝るまでこの奇妙な光景は続いた。

二人の出会い、そこから始まった。

薄暗い部屋の中、部屋の隅に設けられたベッドで厚めの布団がもぞもぞと動く。

暫くすると、目を半眼にした少年が布団をどかして腰を起こした。寝ぼけ眼で頭を掻きながら、少年　正義は大きく欠伸をした。

目を擦りながら正義は時間を確認する。

六時か、と呟きながら正義は眠そうにベッドから起き上がり、窓際にのそのそと歩いて行つて窓を開く。

秋だからだろう、まだ外は薄暗い。

昨夜から雲行きが怪しい外の様子をそれとなく眺めながら、正義は秋風に身を晒し頭を覚醒させる。

（……しかし、また懐かしい夢を見たもんだ。）

髪を風になびかせながら、正義は見た夢を思い出してため息をつく。

自分がまだ幼い洩垂れ坊主だった頃の夢。

恭介と初めて出会って、蹴り飛ばされた苦い思い出。

我ながらム力つくガキだったよなあ、と正義は思い　　周りから

見ればまだまだガキか、と苦笑した。

（あいつも、また昔の夢見てんのかなあ……。）

” 一昨日はこんな日もあるだろうと思ったんだけど、もう三回も見た。多分明日も見ることになるんだろう。”

昨晚、怯えながら胸の内を明かした親友。

また今日も忘れてしまった筈の昔の夢を見て、その笑顔の仮面の内で泣きそうな顔を浮かべる事になるのだろうか

正義は遠い眼をして、今も夢の中にいるであろう恭介の事を想った。

「……さつぷ。」

遠くを見つめていた正義だったが、暫くして少しだけ体を震わせると、窓を閉めて棚の方へ向かう。

「これこれ、これが無いと始まらないっしょ！……昨日なんだかんだで聞かなかったからなあ。」

正義は嬉しそうな顔で、棚から昨日買ったCDを取り出す。

手早く包装を破ってごみ箱に投げ捨て、パッケージからディスクを取り出した正義は、待ちきれないという表情でコンボにディスクを差し込んだ。

” Destinyなんてぶち壊せ！！（Destroooooo y!!） ”

「よしよし、今日も良い感じにご機嫌じゃねえか。やつぱ痺れる

ねえ！」

コンボから流れてくる、恭介曰く適当に英単語と日本語をくっつけただけの叫びの様な歌。

その歌を聴きながら、やっぱりこのグループはたまらねえ、と正義は顔をほころばせる。

暫く新曲を堪能した後、正義はいそいそと登校の準備を始めた。

” そんなクソツタレにはこう言ってやれ！俺は運命をぶち壊す運命なんだってなあ！！ ”

「さつて。そんじゃまあ、今日もいつちょ頑張らしようかね！」

その日の朝、正義が部屋を出る時間になっても、何時もの様に壁の向こうから物が投げつけられる事は無かった。

「……そういうわけで、何時もみたいに音楽聴いたにも関わらず、一日が始まったって気がしねーんだよなあ。」

「一体全体誰に向かって話してるんだお前は。」

「お前に決まってるだろうがバカチン。」

「……何の脈絡もなかったんだけど。」

「お兄ちゃん、さすがにそれは無理があると思うんだけど……。」

曇り空の下、いつも通りの登校風景。

昨日の事があったので少し心配していた正義だが、恭介は普段と変わらない様子だった。

そう、普段と変わらない 異常が見られた三日前までとは違う、張り付けられた完璧な笑顔と完璧な殻を被って正義に話しかけてきた。

まるで昨日は何事も無かったと、夢の事など知らぬと言わんばかりの態度で。

やっぱり時間がかかりそうだなあ、とそんな事を思いつつ、正義は非難の目で見える恭介と椎名を見ながら口を開く。

「いや椎名、だって恭介の奴今日は壁に物投げつけてこなかったんだぜ？」

「……先輩、どこか具合悪いんですか？ 大夫ですか？ 学校休んだ方がいいんじゃないですか？」

正義の言葉を聞いた椎名は信じられないといった顔で恭介の体調を心配する。

対して恭介は、げんなりとした顔で正義に文句を言う。

「いや……あのさ、それってお前にとって良い事なんじゃないのか？ 毎日の如く俺に文句言ってくるくせに、何もしなかったらしなかったで突っかかって来るのかよお前は……。」

「おいおい、冗談言ってくれるな。音楽聴くのもそうだがな、毎朝の様にお前が壁に向かつて物投げてこないと気合入らねえんだよ。いや、むしろその為に曲流してるのもあるのかもしれない。」

すぐさま反論する正義。

その言葉に、恭介はとてもステキな笑顔を浮かべて正義に詰め寄る。

「ああ、そうかい。よく分かった。今すぐ地面舐めるように土下座しやがれクソツタレ。つまりアレか？お前は毎朝俺を苛立たせる為に、あのフザケタ歌大音量で流してんのか？ん？」

「まあ半分合って。オーライ、落ち着こうぜ兄弟。」

正義が答えるや否や、恭介が拳を繰り出す。

危なげにかわした正義は、そのまま恭介から後ずさりして距離を取りつつ宥めようとする。

チツと、舌打ち一つに拳をかわした正義を見ながら恭介が口を開く。

「……はあ。まあ、そう日もあるさ。正義が心配する事は何にもないよ。」

言外にこれ以上は触れるなという言葉に、正義はピクリと肩眉を少し上げた。

（……警戒してんのかねえ。なんだかんだで昨日の事引きずってんのか。）

別にそんなつもりで言ったんじゃないんだがな、と正義は肩を竦める。

「別に。心配なんざこれっぽっちもしてねえよ。」

「さいで。」

それだけ言うと、恭介はそっぽを向くように前を向いて歩き始めた。

正義も何も言わずに後をついていく。

何も知らない椎名も微妙な空気を感じ取ったのか、無言でぴよこぴよこと二人の後をついていく。

榊ヶ丘学園へと向かう道。

商店街の通りを三人は無言で歩き続ける。

「いいから出せつつってんだよ！」

朝故に静かだからだろう。

少し遠い路地からの怒鳴り声が三人の耳にはっきりと聞こえた。

「……で、何だと思う？」

「さてね。どうせ碌な事じゃない事は確かだと思うよ。ほら行くぞ。」

「え、ちょっと待ってお兄ちゃん！先輩！」

聞こえた声について少し言葉を交わすと、直ぐに恭介と正義が駆けだした。

慌てて椎名も後を追う。

精肉店と八百屋の間の小路。

怒鳴り声の元凶の場所へと駆け付けた三人の目に映ったのは、困った顔をした一人の少年と、それを囲む複数の少年の姿。

所謂カツアゲの現場だった。

少し離れた場所から三人はその様子を覗く。

「ほら、やっぱりお約束だ。」

何とでもないように恭介が言う。

正義も呆れ顔で口を開く。

「いや、そりゃまあ。そうだろうとは思ってたんだけどさ。朝っぱらから元気だよなあ。つーかあれ若松の奴らだろ。何してんだこんなところで。」

「だからカツアゲだろう。目玉腐ってるのかお前。」

「何で榊ヶ丘に居るのかって事だよバカチン!!」

鼻で笑う恭介に正義が食ってかかった。

あんまりにも他人事のように呑気なやりとりをする二人に、椎名が怒鳴る。

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!!あそこにいるの嵐君だよ!!?助けなきゃだよ!!」

「……!!分かってるからそんな怒んなよ椎名。……んで、どうするんだ?」

うるせえ、と正義は片耳を手で押さえ、恭介に尋ねる。

恭介はその細い目を更に細めて淡々とした口調で呟いていた。

「 恐喝しているのは複数の学生。紺色のブレザーに、深緑色と茶色のチェックのズボンを着用していることから若松高校の生徒だと分かる。だらしく着られた制服を見るに、奴らは所謂不良と呼ばれる人種だろう 正義の言ったように、何故隣町の若松の奴らが早朝からこの榊ヶ丘に居るのかと思いはしたが、馬鹿の考える事など分かる筈もないのでその考えを頭の隅に追いやる。……恐喝されているのは見知った少年。よくもまあ頻繁に厄介事に巻き込まれるものだと思うが、普段のアイツの態度を考えると自業自得かという気がしないでもない。……まあ性格を考えると酷な事だとも思うが。 さて、俺の取るべき行動は何か。正直なところこのまま無視して学校へと足を進めたいのが本音だ。生憎と俺はヒーローなんかじゃない だが、悪者という訳でもない。俺の知らないところで事が起こっていたのなら我関せずでいられた。見なければ、声を聞かなければ無視をすることもできた。だが、しかし

恐喝の現場を見てしまった。頭の悪そうな馬鹿共の鳴き声を聞いてしまった。だったら人として無視を決め込むわけにもいかないだろう。……それが知り合いなら尚更だ ああ、そうだ。助けなきゃなあ……。」

言っと、恭介は酷薄な笑みを浮かべる。

（……単純に唯の八つ当たり相手見つけて嬉しいだけじゃねえか。てか、やっぱり俺の勘違いだったみてえだな。ちよつとしたことでボロが出やがる。それ以外が完璧なだけにタチが悪いなあ……。しかし、なんだ。この様子だと今日も夢見ちまったらしいなあ……。）

正義は苦い顔で頭をポリポリと掻く。

「……先輩？」

「瞳孔ガン開きにして何良い人ぶってんだよ恭介。お前ソレ人助けるようなツラじゃねえぞ。」

心配そうな椎名に次いで、一応正義も声を掛ける。

「黙れ。俺一人でやる。……事が終わるまで案山子みたいに突っ立ってる。」

が、恭介は鋭い視線を不良に向けたまま、笑みを崩さずにそう言った。

その声には色は無い。

勘弁してくれよ、と正義は天を仰ぐ。

（おいおい、一体全体どれだけクレイジーな夢見たんだよコイツは。つーかよお、俺を真似てるだけだつってたけど、俺はそんなおつかねえ顔しねえつーの。……いや、それ以外にも色々おかしいんだけどさ、気付いてんのかねえ恭介の奴。いや、たぶんアイツの中の九翔正義像はアレなんだろうなあ……。しかし、コレ俺が抑えねえと冗談抜きで悲惨な事が起こりそうな気がするなあ。オーサムワンゴッド。名前も知らないどこかの誰かの神様、全く神様なんぞ信じちゃいないこの哀れな子羊である俺に救いの手を差し伸べちゃくれませんかねえ？……無理デスネ、ハイ。ああマジかよチクショウ。嫌だなあ、ほつときたいなあ。下手すれば恭介とガチで殴りあいしなきゃなんだもんなあ。あー、帰ってえ。）

軽く現実逃避をしている正義を尻目に、恭介は不良たちに向かっ

て歩き出す。

「お兄ちゃん……。」

「へいへーい。しゃーねーな。何とかすつから、お前は大人しく
そんで見てろ。」

正義は、心の中でもうお手上げだと言わんばかりに白旗を上げつ
つ　まあそういう訳にもいかないだろうと、顔を曇らせる椎名を
ヒラヒラと片手であしらい、手の骨を鳴らしながら恭介の後を追
隣に立つ。

「……邪魔したら蹴り飛ばすぞ。」

「誰に口利いてるんだお前　　氣い抜いて俺に殴り飛ばされない
ように隅っこで怯えてろ。」

（こうなったら、もうなるようにしかならねえだろ……俺も色々
発散しようかな。）

考えるのが面倒臭くなってきた正義は、この際だから自分も発散
するかと、獰猛な笑みを浮かべる。

「そんじゃまあ……いつちょやりま　　っておいコラァ!？」

正義が言葉を言いきる前に、恭介が駆けだす。

「お前の気合入れにつきあう義理はない。」

「　　ああ、御尤もだよクソツタレ!!!」

秋葉原^{あきはばら}は、困惑^{ごんぱく}していた。

特段何かした訳でも無い。

普段通りに起きて、普段通りに寮を出て、普段通りに登校した筈なのに

「だからさあ、ちょっと俺たちお金無くて困ってるんだよ。少しでもいいから貸してくれないかなあ。」

(……なのになんで、朝からカツアゲにあっちゃうかなあ。)

商店街を歩いているといきなり小路に連れ込まれ、瞬く間に囲まれた己の不幸を嘆きながら、だがしかしそれを表情には出さず、若干の苦笑いを浮かばせて嵐は口を開く。

「いやあ、ですから僕も生憎と持ち合わせが無いんですよ。ハハハ……いやあ、どうしましょう。」

「あんだコラア！？テメエ嘗めてんのか？ああ！？」

(うつわ、おっかない。だからなんだよこれ、どうなのこれ、そうなのコレ！？だから僕こっぴどく怖くて無理なんだってば！！！)

不良たちの怒声に肩をびくりと震わせて、後ずさりする嵐。

口元を引き攣らせ、助けを求めるように目を泳がせる。

自身と、それを囲む不良たちとは少し離れたところで、我関せず

とばかりに壁にもたれかかっていた不良の仲間だろうと思われる少年と目があったが、知った事かとすぐに目をそむけられた。

孤立無援。

助けてくれる人物はおらず、かと言って自分で如何にか出来る程の度胸も無い。

だがしかし、金を渡すつもりなど毛頭ない　となれば、自ずと結末は見えてくる。

痛いのは嫌だなあ、パンチ一発で済ませてくれないかなあ　と、そんな事を思いながら嵐は諦めた様に溜息をついた。

それが癪に障ったのか、あるいはいけると思ったのか。

薄ら笑いを浮かべていた不良たちは、壁に追いやるように嵐に詰め寄り、そしてその内の一人が黄色いラインの入った黒い制服の襟元を掴んで怒鳴る。

「いつまでも黙って突っ立ってんじゃねえ！いいから出せつつつてんだよ！！」

「……と、言われましても。無い物はどうやっても出せないんですけど、どうしましょう？」

「ごちゃごちゃうるせえんだよ！スカしてんじゃねえぞデメエ！！」

澄ました様子の嵐を見て、不良たちがいきり立つ。

「わざわざ若松から出向いてやってんのにフザケタ態度とってんじゃねえよ！兄貴、やっちゃっていいですか？」

（出向いてくれなくて結構だよ本当に。早く殴って終わりにしてくれないかなあ。）

傍迷惑も大概にして欲しい、と思いながら、冷めた目で嵐は兄貴と呼ばれた人物に視線を向けた。

その視線の先、不良たちに声をかけられた人物は　　さもありなん、先程嵐と目を合わせた、壁にもたれかかっている一人の少年。金のメッシュが入った乱雑に切られた髪を揺らし、興味無さ気にそつぽを向いて煙草を吹かしているその姿は、絵に描いたような不良のリーダー格である。

「……知らん、俺に聞くな。お前らの好きにすればいいだろう。」

煙を吐いたリーダーの少年は、頭を掻きなが鬱陶しそうに目を細めた。

「そんなあ、酷いっすよ兄貴。わざわざ榊ヶ丘まで出向いたんですから暴れまわりましようや。」

「それこそ知ったことじゃない。……こんな気分悪い天気の中、隣町まで連れ出して何をするかと思ったら、胸糞悪いセコイ真似だ。俺は関わらんぞ。」

空を見上げて顔をしかめたリーダーの少年は、不良の言葉を切って捨てた。

そしてもう一度煙草を吹かし、ちらりと嵐に目をやって言葉を続ける。

「　　だが、そうだな。一発殴ってとっとと終わりにしてやれ。……ソイツもそれを望んでるだろうさ。俺も早く帰りたいしな。」

「ウィーッス。……へへっ。ご愁傷様だな、最高の一発を食らわせてやるぜ。」

（いやあ、わかってらっしゃる。さすがリーダー。……いや、良くは無いけど一発で済むならそれに越したことは無いよ本当に。）

ニヤリと笑って、不良は指の骨を鳴らし始めた。

何とか一発で事が終わりそうな様子に、ほっと安堵の顔を出す嵐。それを見たりーダーの少年が鋭く目を細めた。

「待て。おい、お前。」

「はい、何ですか？」

（……あれ？何かマズったかな？）

内心少し焦って嵐が答える。

「別に、こいつ等を殴り飛ばして逃げようと思えば逃げれるんじゃないのか？勿論こいつ等は追いかけるだろうが、表通りに出れば助けてくれる奴は居るだろうに。……無抵抗で居ても、お前には何の得にもならないと思うが。」

「ハハハ、買い被り過ぎですよ　ご覧の通り僕はひ弱でして。」

（　恭介先輩や正義先輩と同じタイプか。……道理で。）

先程までの無関心とは打って変わった様に、嵐を睨むリーダーの少年。

鋭い視線を受けながら、嵐は面倒臭いのを隠して苦笑する。

視線をただ真っ直ぐとリーダーの少年に向けたまま。

「本当にひ弱な奴は、こんな状況でそんな事は言わん。……事勿れ主義を否定はしないがな、それじゃあ大切なものも守れなくなるぞ。」

「いやあ。生憎と、大切な人とか居ないんですよ。」

いやに突っかかってくるな、と思いながら無難に嵐は答える。

その答えに、リーダーは暫く嵐を見つめる。

そして、少し間を置いて煙を一つ吐き、口を開いた。

「そうか、それは良い事だ。……その黄色いライン、確か一年だったか。全く、中学生と大差無いというのに、よくまあそんな態度を取れるもんだ。殴り屋といい蹴り屋といい、榊ヶ丘はこういう類の奴しか居ないのか　もういい、やれ。」

もう興味など無くなったとも言つように、正義から視線を外したリーダーの少年は不良に指示を出す。

お預けを食らっていた不良たちは、誰が殴るかで揉めていた様だった。嵐の襟元をつかんで怒鳴りつけた、髪を半分真つ赤に染めた不良が勝ったようだ　リーダーの少年の言葉に嬉々として、再び嵐に詰め寄る。

「へっへ、改めてご愁傷様だな。んじゃ、さっそく」

不良が拳を振りかぶる。

嵐はびくりと肩を震わせたが、目は閉じずにじつと不良を見る。

「そんな毎日絡まれてるみたいに言わないで下さいよ、正義先輩。一体何をしに？」

「助けに來たに決まってるんだろぅがバカチン。」

まるで道端で出会ったかのように呑気に話す嵐に、見ればわかるだろうが、と正義はあきれた口調で返す。

「どうも有り難う御座います。いや、てっきりストレス発散かと思いましたよ。恭介先輩怖い笑い方してましたし。」

「テンメエ、コラ　ギャフ!!」

「……いや、間違ってるわけじゃねえんだけどさ。なんか納得いかねえな。」

「ちょ、タンマ　ヒゲア!!」

「それは良いですけどね、獲物全部取られちゃいますよ　あー、あれは痛そうだ。」

嵐はそれとなく恭介の方へと目をやり　見事に鳩尾に蹴りを入れられた不良を見て、うわあ、と顔を顰める。

嵐の言葉に、何だと、とわざとらしく顔を向けた正義は、バッタバッタと不良を蹴り倒す恭介を見て、諦めたかのように頭を振った。

「おーおー、結局アイツ一人で持ってたやんの。」

「そりゃ、今にも殴る寸前だった不良の顔に飛び蹴りを入れると

いう離れ技をやったのけた後、間を置かず他の人に向かって行きましたからね。脅されてガクガク震えてた僕に一声も掛けずにですよ。いやあ、正義先輩は優しいなあ。」

大きく溜息を一つ吐いて大袈裟に言う嵐を、正義は鼻で笑う。

「言うじゃねえか。お前に構ってたから出遅れたってか？……まあ、恭介もやり過ぎない様にはしてるみたいだし、今日のところは譲ってやるかな。」

「恭介先輩何かあったんですか？」

「気にすんな。おいアキバ、恭介あんまり余裕無いから、変に突っついてやんなよ。お構い無しにぶっ飛ばされるぞ。」

薄々感じてはいるが一応、と尋ねる嵐。

それに対し正義は、くれぐれも余計な真似はするな、と釘を刺しておく。

「そりゃコワイ、気をつけます。」

嵐は肩を竦めて答え、好き勝手に暴れまわる恭介を見る。

正義も結局手を出すことを諦めたので、不良たちの叫び声をBG Mに二人は恭介を観戦することにした。

「それにしても、あの人たちタフですね　うわあ、さっきのもそうだけどよく飛び蹴りとか何回も出せるなあ。」

「程よく手加減してるんだらうよ。お前も言ったじゃねえか、ストレス発散だって　いや、いつ見ても蹴りであんな人が飛ぶとか

ありえねえわ。漫画かよ。」

「いい性格してますよね。それもあるんでしょうけど、ああいう風に程よく痛めつけられたら向かっていく気が起こらなくなるって聞いたことあるんですが　は？壁飛び！？映画ぐらいでしか見たこと無いですよあんなの。人間辞めてますね。」

「さあな、思考回路がどうにかなってんじゃねえのか？なんつっても不良って言う人種だし　アイツの身体能力は人外認定だよ。あーらら、あの脛蹴りは痛えよなあ。」

「正義先輩も大概似たようなものだと思いますよ　いつ。金的とかえげつないでしょ恭介先輩。」

「お前さりげなく言うよな。殴っていいか？」

恭介が聞いてないのを良い事に、言いたい放題の正義と嵐。

二人が好き勝手言ってる間に、倒れても何度も向かっていった不良たちも、呻くだけで起き上がることは無くなった。

終わったか、と最後の一人が起き上がらなくなったのを見て、二人は立ち尽くす恭介に近づこうとして　足を止めた。

もう起き上がる者は居ない。

嵐を助けるといふ建前上、立ち向かってくるものが居ないのであればそれで終わりの筈なのだが　なのだが、恭介は蹲る不良に向かって足を進めた。

「おい、恭介？」

正義は眉を顰めて声を掛けるが、恭介は答えずに足を進め、一人の不良の前で立ち止まった。

顔を抑えて蹲る、髪を半分赤く染めた少年　嵐を殴ろうとして、開幕一番に顔に飛び蹴りを食らった不良だ。

「　　おい。」

呻き声しか聞こえない小路に恭介の声が響く。

静かで、それでいて迫力のある声。

声を掛けられた不良は、痛む顔を抑えながら恭介を見上げて

「　　ヒツ。」

怯えた様な短い悲鳴を上げた。

見上げた先の恭介は、笑っていた。

ただ、笑っていた。

不良はそれが恐ろしかった。

とっつき易い、大多数の人に好意的に受け入れられるであろう笑顔が　射抜くような鋭い視線を放つ、全く笑っていない細い目をしたままそんな表情を浮かべる恭介が、何よりも恐ろしくて堪らなかった。

「……確か、その腕だったよな。俺の大事な大事なコウハイクンを殴ろうとした腕はさ、今お前の顔を抑えているソイツだったよな……？」

笑みを崩さないまま、淡々と恭介が言う。

「ア……いや、ぢが……。」

蹴られた際に口の中でも切ったのだろう。

怯えて肩を震わせる不良は、声を濁らせながらしどろもどろに答

える。

恭介は更に笑みを深めて、言葉を続ける　口調は淡々としたままに。

「違わない。……いや、ああそうか。お前の意思とは無関係に腕が動いてしまったのか。じゃあ尚更　そんなイケナイ腕とは、此処でサヨナラしとかないとなあ？」

「う、うべんなぞ　」

目元をうつすらと涙で滲ませながら、必死に謝ろうとする不良。謝罪の声など聞こえぬとばかりに、恭介は構わず足を振り上げる。不良の顔が恐怖に歪む。

（　　やつべ！チクショウ、何ボケツとアホみたいに突っ立つてんだ俺はあ！！）

「　　先輩！！」

「わーってる！テメエも来い！！」

それまで恭介の行動を見守っていた正義と嵐は、最悪の事態に弾ける様に駆け出した。

（　　間に合うか？恭介じゃねえが、飛び蹴りでもしねえと不味いか！？）

何故黙って成り行きを見ていたのか。

何故やり過ぎないと思ってしまったのか。

何故恭介なら大丈夫だろうと信じてしまったのか。

ここに駆けつける前に、外面だけ取り繕って中身は不安定な状態だと確認したばかりだったというのに。

我ながらおめでたい考えだった、と正義は内心愚痴りながら、蹴り飛ばすことも止む無し、と足に力を籠める。

だが恭介の行動は、正義でも嵐でもなく、別の人物によって止められた。

「何の真似だ。」

今まさに足を振り下ろそうとした瞬間、突然飛んで来た吸いかけの煙草。

容易く手で払いのけられてポトリと落ちた吸殻には目もくれず、恭介は足を不良の上に置いたまま投げてきた人物を睨む。

「……………」

その人物　不良のリーダー格の少年は何も言わずに、嵐と会話した時と変わらない位置で壁にもたれかかったまま、新しい煙草に火を点けて煙を吐き出す　視線は恭介へと向けたままに。

「…………だんまりか？空気も読まずに邪魔してきたからには、何か言いたい事でもあるのかと思っただが。　　ポイ捨てはするなとママに教わらなかったのか？」

「…………で、そのママは人の腕を壊すなども教えてくれなかったわけか。いつから蹴り屋から壊し屋に転職したんだ？是非とも教えて欲しいもんだ。」

「そもそも、そんなフザケタ渾名を名乗った覚えは無いんだけど

ね。……で、何の真似だ。」

嘲りを嘲りで返された恭介は、特に気にすることも無く変わらな
い笑みのまま分かりきった質問をする。

溜息混じりに煙を吐いたリーダーも、やれやれとでも言ったかの
ように口を開く。

「名乗った覚えは無くても、そう呼ばれている事ぐらいは知って
いるだろう。まあ、なんだ。随分とご機嫌が宜しくない様だが、そ
の足でソイツの腕を壊すのは止めてくれないか。一応そんなんでも
学友だね。どうしてもというのであれば　まあ、相手にはなるが。」

「　　っは、笑わせないでくれよ。」

その言葉に、恭介は笑いを嗤いに変える。

「今の今まで壁際でガタガタと震えて仲間がやられるのを黙って
みていた奴が、今更何を言っているんだ。」

「恐喝を行動に移したのはこいつ等だ。ならば当然、その代償を
払うのもこいつ等だ。俺の知った事じゃあない。手を出す寸前で、
ただみつともなく怒鳴った事に対する代償としてはこれで十分過ぎ
ると思うが　その足を振り下ろすというのなら話は別だ。……そ
こから先は俺の領分だね、黙って見とくという訳にはいかないんだ
よ。」

「十分かどうかはお前が決める事じゃないと思うんだが。」

「そしてお前が決める事でもないだろう。とにかく、その一線を

越えるなら俺が相手をするという事だ。……まったく、嫌々ながらもついてきて正解だったよ。一応これでも、こいつ等の頭なんでね。お前のストレス発散のために、ソイツの腕が壊されるのを黙って見とくのは忍びない。」

「何だと　　グア!!」

リーダーの少年の言葉に、何が気に障ったのか恭介は言い返そうとして　　顔面から地面に突っ込んだ。

正義が背中から恭介を蹴り飛ばしたからだ。

リーダーの少年との会話で大丈夫かとも思いはしたが、恭介の足は不良の腕に乗せられたままだったので、先程のような手遅れになる前に、と正義は躊躇わずに飛び蹴りを繰り返したのだ。

「おい正義、一体　　」

「うるせえ！いい加減にしとけよテメエ!!」

体を起こし、何か言おうとした恭介の言葉は、正義の怒鳴り声にかき消された。

恭介の襟元を掴み引き寄せた正義は、なおも声を荒げる。

「お前、今自分が何してんのか分かってんのか!? イラついてるからって人様の体ぶち壊す様な真似してんじゃねえよ! それだけはやっちゃいけないだろうが!!」

「……………」

恭介は俯いて黙っている。

正義はそんな様子の恭介を見て舌打ちをし、更に何か言おうとし

て 止めた。

少し深呼吸した後、頭を搔いて正義は口を開く。

「……九翔正義は自分のイライラを他人にぶつけて、拳句の果てに腕壊すまでやるようクズだよ。」

「……違う。」

「そんなら、それを真似ている夜没恭介は、そんなくだらねえ事しねえよな？」

「……………ああ。」

「オーケー。」

短く、消えるような だがはっきりとした回答を聞いた正義は、恭介の襟元から手を離して不良のリーダーの少年を見る。

「……それで、お前さんはどうするんだ？」

「どうするも何も。殴り屋がまともで良かったよ。……………おいカズ、立てるか？」

「……………はい。」

リーダーの少年は、煙草の火を懷から出した携帯灰皿で消しながら、腕を踏み潰されかけた不良に声を掛ける。

苦しそくに答えながらもゆっくりと立ち上がる不良を見ると、また別の不良に声を掛けた。

「トモ、お前は？」

「……大丈夫です。」

「そうか　退くぞ。……ほら、だらしないぞ。」

「はい。……おい、テメエらずかるぞ。」

トモと呼ばれた不良と短く言葉を交わした後、リーダーの少年は近くで倒れていた不良を立たせて、肩を貸して歩き出し、その場を後にした。

それに続くように、他の不良も次々とその場を去ってゆく。

去っていく不良たちを暫く眺めた後、正義は地面に座り込み俯いている恭介に向かって手を差し出した。

「……おい、恭介。俺たちも行くぞ。」

「　　雨だ。」

恭介は、差し出された手をとらず、ポツリと消え入るような声でそう言った。

「あ？」

「……だから雨だ。降ってきた。」

それだけ言うと、恭介はまた黙り込んだ。

正義は短く溜息を吐くと、手を引っ込めて嵐のほうへと向き直る。

「行くぞ。」

「……いいんですか？」

「ほつとけ。椎名も待たせてるんだ。それにほら、マジで降り出してきやつた。」

「椎名さんもいるんですか!？」

「……お前なあ。」

椎名がいると聞いたとたん顔をはころばせる嵐に、分かりやすい奴だ、と正義はげんなりとした顔をする。

「言つとくがな、椎名はやらんぞ。」

「またまたあ。お義兄さんったらいけずだなあ。」

「……お前いつか絶対ぶん殴つてやるからな。」

「キヤー、椎名さんタスケテー。」

「おい、待てお前それ勘違いされるだろうが!あ、思い出した俺が不良と同じってどういう意味だ!!止まりやがれテメェ!!」

ポツポツと雨が降り始める中、そんなやり取りをしながら、二人は恭介を残して去っていった。

恭介はそんな二人に顔を向けることも無く、ただ一人雨の中に身を晒し、座って俯いたままだった。

暫くして、その場に鳴る何かを殴ったかのような鈍い音。

その音は段々と激しさを増す雨音にかき消され、誰の耳にも入る事は無かった。

これは、そんな雨の日の朝の話。

10/21・上? (前書き)

前回に引き続き遅くなり、申し訳ありませんでしたあ!!
せめて2週間に1話の投稿にしたいのですが・・・くう。

今回、日常編の続きと言う形で投稿しました。

本当は異世界編を投稿しようかと思いついて執筆していたのですが、さすがに先の内容の薄さだと色々飛ばし飛ばしな内容になってしまふかなと思いついて、急遽こちらを執筆するという形になりました。楽しみにしてくださいっている方々には、大変申し訳なく思っておりますですはい。

そして1325pv、230ユニーク有り難う御座います!

だんだんと読んでくださる方が増えていくので、かなりモチベーションに上がります。

それでは日常編をどうぞ。

「……で、結局恭介先輩はお休み、と。」

嵐はそう言つて口にウィンナーを放り込んだ。

「ん、まあな。遅刻して来るだろうぐらいは思つてたんだが、まさか来ねえとは思わなかつたわ。」

正義はそう返して、自分のおにぎりにかぶりつく。

「ふーん、意外にセンチなんですねあの人。」

「今更だろ。あいつはあれでガラスのハートなんだよ　おい、アキバ。そいつは俺の卵焼きだ。」

正義は、嵐が摘んだ卵焼きを箸でビシッと指して睨んだ。

「ガラスはガラスでも強化ガラスでしょ。まあ、親友に飛び蹴り食らわされた拳句に説教されたんだから分からなくもないですけど、と。」

知らん顔で卵焼きを口に入れる嵐。
正義はそれを見て憤慨する。

「おい、テメエ!!」

「食べながら喋らないで下さい。」

「……お兄ちゃん、きたない。」

「……………」

椎名にぴしゃりと言われ、正義は箸をそのままに、悲しげな顔で頂垂れた。

昼休み。

嵐が、朝助けてもらったお礼に、とジューズを手土産に正義のクラスにやってきて、ついでお昼と一緒にしませんか　椎名さん、と言いつつ出したため、正義、椎名、嵐の三人は榊ヶ丘学園の屋上へ来ていた。

正義は、握り飯の入った箱とおかずの入った箱を別々に分けた量の多い弁当。

嵐は、母親に作ってもらったごく一般の2段重ねの弁当。

椎名は、女の子らしくこじんまりとした可愛い弁当。

やや広めのレジャーシートの上で、三者三様の弁当を中心に昼食を楽しんでいた。

いったん止みはしたものの、何降り出すかも分からない曇り空の下で。

「……大体よお、テメエのがあるじゃねえかテメエのが。」

恨みがましい目で嵐を見ながら、正義は自分のおかずをつつく。

「そりゃあ、椎名さん手作りのお義兄さんのお弁当が美味しいからに決まってるじゃないですか　ああ、僕のが欲しいならどうぞ。いつそ丸ごと交換しましょう。」

ススス、と自分の弁当を差し出しながら、嵐はひょいっと正義の弁当からから揚げを掠め取る。

差し出された弁当に目もくれず、また正義は怒鳴った。

「いらん！ テメエのを食べつつってんだよ、眼鏡力チ割るぞ！！」

「毎日椎名さんの愛情が籠った手料理を食べてるんですから、少しくらい分けてくれてもいいじゃないですか。」

「……お兄ちゃん、大人気ない。」

嵐は口を尖らせ、もふもふと大人しく自分の弁当を食べていた椎名も非難する。

白い目を向けられた正義は、気まずそうに椎名から顔をそらした。

「もう、お弁当くらいいいじゃない。仲良く食事できないの？」

「やだね。こいつが俺を義兄と呼ばなくなったら、抱きしめてキスしてやるよ。」

「嬉しいな、ますますお義兄さんって呼ばなきゃじゃないですか。」

しかめっ面の正義を見て、椎名は呆れ顔で小さく溜息をつき、自分の弁当箱を嵐のほうに差し出した。

「嵐君、私のでよかつたら交換しよう？量は少ないけどお兄ちゃんのと一緒だよ。」

「いいんですか？有り難う御座います！」

「ちつとは遠慮しろよテメエは！！」

嵐は喜んで椎名と弁当を交換し、さつそくアスパラのベーコン巻きを口に入れると、たまらないといった表情で頬を緩ませ破顔した。

「やっぱり椎名さんのお弁当は美味しいなあ。いや、もう国宝級ですよこれは。」

「もう、言い過ぎだつて。いつも通り普通に作ってるだけだよ。」

嵐君のも美味しいよ？お母さん料理上手なんだね。」

「いやいや、確かに母さんの弁当は美味しいですけど、女の子の手作り弁当と比べたら霞んじやいますよ。」

「ふふ、私のお弁当はそんな立派なものじゃないよ。」

過剰気味な褒め言葉に、椎名は満更でもなさそうに少し頬を染める。

嵐は、もじもじと照れている椎名を見て、眼福眼福、とずれる眼鏡も気にせずに、だらしなく頬を緩ませた。

「……へー、仲睦まじいことで。椎名がアキバと浮気したって恭介に言つとくわ。」

キャツキャウフフな雰囲気醸し出す二人を、面白く無さそうに

まじまじと見つめていた正義は口を開く。

その言葉に、椎名は顔を真っ赤にして正義のほうを向き、プンプンという言葉を実現したかのように怒り出した。

「もう！私と恭介先輩はそんなんじゃないって何回言えばわかるのー！」

「すまん、ブラザー。どうやら我が妹は、知らんうちにお前を振っちまっていたようだ。」

「……お兄ちゃんの馬鹿あー！」

なんてこった、と大げさに手を額に当て空を仰ぐ正義。

言葉を発するたびにピヨピヨとツインテールを揺らす椎名の姿を、心の中にそっと収めながら、顔を顰めて嵐は口を開いた。

「馬に蹴られて何とやらですよ、正義先輩。」

「はっ、馬でもロバでもサラブレッドでも何でも持って来いよ。全部刺身にして食ってやる。椎名はもうお手つきなんだ、お前にやらん。」

正義は、へへんと腕を組んで、何故か得意気な顔で鼻を鳴らす。

「……流石にロバの刺身はきついんじゃないですか。」

「……お兄ちゃん、最低。」

じと目で睨んだ嵐が続いて、動物好きの椎名が止めを刺す。
一瞬の間。

「……っーかお前、これどっから持ってきたんだよ。」

聞こえないフリをして、強引に話題を変えた正義が、足元のレジャーシートを手で叩く。

彩り鮮やかな、そこそこの広さのファミリー用のレジャーシート。雨が降り止んだばかりで、まだ屋上が所々濡れているため流石に腰は下ろせなかったので、嵐がどこからか調達してきたのだが

「ああ、オカ研から失敬してきました。」

「オカ研ってお前……自分のところだろうが。っーかなんでオカ研にレジャーシートなんてあんだよ。」

オカルト研究部。

通称オカ研。

正式名称は教学部なのだが、所属する部員がこっくりさんをやりたり、黒魔術を真似た怪しげな儀式をしたり、果てには夜中に学校の校庭で魔法陣的な何かを描いて、集団で降霊紛いの事を行ったりと、常日頃からぶっ飛んだ活動を行っているので、周囲からはオカ研と呼称されている。

何故か、所属する部員はそう呼ばれることを嫌っているのだが。

正義は、自らが所属する部活をオカ研と呼んでいいのか、と呆れ顔で尋ねる。

「いいんですよ、間違っていないですし。大体、あり方は神道における古来の神々やその信仰についての理論的考察を行う部活なんです。それが何を間違ったのか、オカルト遊びをやったり、わけの分からぬ心霊写真でギャーギャー騒いだり、この前なんて心霊スポ

ットに探検に行くとかで、危うく連れて行かれるところでしたよ。もういつそオカルト研究部に名前を変えてもいいと思いますね僕は」

何か思ふところがあるのだろう、嵐は苦い顔でそっけなく言った。

「ああ、それとオカ研にはレジャーシートどころか、寝袋にバーベキューセット、キャンプ道具もありますよ。」

「マジかよ……。」

「深夜に事を起こす部員もいますし、課外活動なんてしょっちゅうですから。」

思い出したかのように付け足された嵐の言葉に、正義は啞然とした。

「よく辞めないで続けられるよな。俺だったら、あそこの扉開けた瞬間に裸足で逃げ出す自信があるね。」

「まあ、一応教学部だけあって資料には事欠きませんからね。」

感心する正義の言葉に、嵐は苦笑しながら傍に置いてある本をぽんぽんと叩いた。

正義は、何気なくひょいっとその本を手に取り　そして本の題名を見て、呆れた。

「……」カバラの神秘”ねえ。神道云々はどこいったんだ。」

「参考資料です。」

正義から素早く本を奪い返して、嵐はきっぱりと笑顔で言った。

「そんなに本が好きなら文芸部に行きやあいいのによ。部室も才力研の隣だし、椎名も文芸部だからお前にとっちゃいいんじゃないの？」

溜息を一つ吐き、もっともなことを言う正義。

それを聞いた椎名はにっこりと話し始める。

「文芸部より専門的な資料が沢山あるからだよね。それに嵐君は半分文芸部員みたいなものだよ、お兄ちゃん。頻繁に文芸部に逃げてきて、私と一緒に本読んでるんだ。部員の皆も嵐君に優しくしてくれてるし あ。」

次第に顔が険しくなっていく正義を見て、しまったと言葉を切ったときにはもう遅かった。

「　　おい、アキバ。」

片眉をピクピクと動かして正義が嵐を睨むのと、嵐がばつと顔を背けたのは同時だった。

睨み続ける正義に対して、どこ吹く風とばかりに嵐は何食わぬ顔で明後日の方を向く　内心冷や汗を掻きながら。

「つまり、アレか。テメエは放課後毎日、椎名とラヴラヴチヨメチヨメしけこんでやがった訳か。」

「ちよつと、お兄ちゃ　　」

しけこむ、という言葉に反応して顔を真っ赤にした椎名が口を開いて反論しようとするが、正義に遮られる。

「うるせえ！お兄ちゃんはそのなこと許しません！！」

「過保護すぎる兄は嫌われますよ、正義先輩。」

「！！」

「！！」

顔を真っ赤にしてあうあうと口を動かす椎名をそっこのけで、ギヤーギヤーと騒ぐ正義と嵐。

椎名が正気を取り戻してもくだらない言い合いを続ける二人。

さてどうしようかと椎名が頭を悩ませていると、パンパンと手を叩く音が聞こえてきた。

椎名が音のした方に顔を向ける。

正義と嵐も口論を止め、椎名に倣い顔を動かした。

「はいはい、お取り込み中ごめんなすつて。」

3人の視線の先には、一人の少年が居た。

ボサボサ黒い髪に、中肉中背、そして赤いラインの入った黒い制服。

ごくごく普通の、榊ヶ丘学園三年生の男子生徒　くたびれたような表情と、揉み上げまで繋がった立派な髭以外は。

「あ、部長。」

「あれ、文芸さんとこの部長さんじゃないですか。」

「ん、木俣のつつあんっじゃねえか。屋上まで来てどうしたよ。」

「……お前さんを探しにだよ、このバカヨシ。椎名と屋上で飯食べてるって聞いたから来たんだが、オカ研とこのまともな方の眼鏡もいたか。」

三者三様で言葉を掛けられた少年　文芸部部长、木俣沢郎は、きのまたたくらう疲れたように低い声で言った。

ちなみに正義や恭介と同じ3・Aのクラスメイトである。

「まともな方の眼鏡ってなんですか、まともな方って。」

心底嫌そうに嵐が拓郎に文句を言う。

「嫌ならまともじゃない方の眼鏡を何とかしてくれ、嵐。そうすりゃ皆普通の眼鏡だ。」

吐き捨てるように言う沢郎の言葉に、嵐はピクリと片眉を上げる。

「……また部長が何かしでかしたんですか？」

「あの狂った眼鏡が何かしない日なんてあったか？一昨日、科学部で妙な実験やらかして爆発させただろうが。昨日は何処か知らない煙にミステリーサークルを作ってきたらしい。学校に苦情が来たそうだ。それに」

「本当にやっただんですか、アレ。」

捲し立てる拓郎に割り込むように嵐は言った。
感心したように正義も口笛を鳴らす。

「アイツは有限実行を絵に描いたような奴だ。問題なのは、その悉くが俺たちにとって有難くない事ばかりだという事なんだがまあ、聞け。ここからが本題だ。」

うんざりとした顔で沢郎は続ける。

「そう、重要なのは今日だ。あの狂人、一昨日の実験を今度は文芸部でやらせると言い出した。機材を科学部から奪い取っていや、譲渡か。奴と関わる事が無いから、連中はきつと泣いて喜んで差し出したろう。とりあえず、機材は用意したから文芸部でやらせろと言いやがったんだ。勿論、お前らの巢でやれと反論はしたさ。だがな、本や道具が多すぎて実験できないとぬかしやがる。おい、他人事じゃないぞ椎名。下手すれば我らの楽園は火の海だ。一度言ったからにはあいつは絶対やるだろう。教職陣は、生徒会任せ治安維持部隊そして困ったことに、その我らが学校の誇る最強の生徒会は、殆どが校務で招霊高校まで出向いていて、放課後まで戻ってこない。放課後じゃあ遅いんだ。事が起こってからじゃ遅い、起こる前に止めるんだ。そう、つまり お前が頼みの綱だ、嵐。全く、探しに行く手間が省けたよ。」

「え、僕ですか？」

突然振られて素つ頓狂な声を上げる嵐。

「大役だな、骨は拾ってやるよ。」

「嫌ですよ。正義先輩が殴ってくれば済む話なんじゃないですか

？」

「触らぬ神になんとやらだ。」

しれつと言う正義に、嵐は苦い顔をする。

「おいおい、このバカに頼めるなら遙か昔にそうしてるさ。何年あの狂人とトラブルになったと思ってる。生憎と、正義も恭介も事アイツに聞いてだけは関わろうとしなくてな……薄情なこった。だが、風の噂で聞いたぞ、嵐。お前さん、アイツと随分仲がよろしいそうじゃないか。唯一、あの狂人を止める事が出来るらしいな。」

「どこの噂ですか。無理に決まってるでしょう。」

「後生だ、他に頼める奴が居らんのだよ。俺の胃のために何とかしてくれ。」

沢郎に泣きつかれ、勘弁してくれと嵐は頭を抱える。

「いや、僕じゃあ役不足ですって。」

「ちなみに、これは部長命令。決定事項だ。出来る出来ないじゃない。やれ。ちなみに拒否した場合は、今後文芸部室の立ち入りと、椎名と会話することを禁じる。」

渋る嵐に、ついに沢郎は止めの一言を口にする。

あんまりにもあんまりな言葉に嵐は呆然とする。

文芸部は、嵐にとっての避難所なのだ。

そこに入れないのも、ましてや椎名と会話できなくなるのも死活問題。

「そりゃいいや。おいアキバ、別に止めなくていいぜ。それでもって一生椎名から離れとけ。」

いい事を聞いたとばかりに、正義は笑う。

だが三人にじろりと白い目を向けられると、肩を竦めて笑うのを止めた。

「……はあ、わかりましたよ。やればいいんですよ、やれば。」

「おお、やってくれるか!」

げっそりとした顔で、だがかしはつきりと口に出された嵐の言葉に、沢郎は歓喜する。

「やらざるを得ないでしょう。脅迫じみたこと言っておいて……もう。」

ぶつぶつと言いながら、椎名と交換した弁当箱を片付け、傍にある本を手取る。

「椎名さん、お弁当美味しかったです。すみませんけど、僕の弁当箱とレジャーシートは、放課後に文芸部室にもって来てくれると嬉しいです。」

「うん、わかった。……今行くの?」

「善は急げですよ。それじゃあ、誘っておいて申し訳ありませんが、僕はお先に失礼しますね……はあ。」

嵐は椎名にそう返すと、大きく溜息を吐いてその場を後にした。

「意外だな。」

視線で嵐を見送った後、正義がポツリとつぶやいた。

「ん？何がだ。」

「アキバだよ。なんだかんだで断ると思ってたんだが。……自分から面倒事に首突っ込んでいく奴じゃないからな。」

「そりゃあ、部室に入れない、椎名と話せないってなったら行くしかないだろう。」

何を言ってるんだと沢郎は呆れるが、正義は真剣な顔で続ける。

「行かないとあいつが困るって？……どうだかな。多分あいつは」

「

そこまで言うと、ちらりと横目で椎名を見て、言葉を切った。

椎名も沢郎も不思議そうな表情で正義を見ている。

（あいつは何があっても困らない。あいつは何があっても動じない。部室には入れなかつたが、椎名と話せなかつたが、きつとまた代わりを探すだけ……だと思っただけだな、多分。まあ、こいつ等に言うことでもねえか。）

妄想を振り払うかのように正義は軽く頭を振り、空気を変えるように口を開いた。

「そついやとつあん、俺に用があるとか言ってなかったか？」

言われて、ああそつえば、と思い出したかのように沢郎は本来の要件を告げる。

「すまんすまん、こつちが本題だ。正義、お前さんに客だ。」

「客って……お前それ随分時間たってんじゃねえのか？」

「知らん、俺も人伝に聞いた話だ。連中、モテまくりのお前のメッセンジャーになるのが嫌だったんだろうさ。」

じと目で見える正義に、しれつとした口調で返す沢郎。

「んあ？女の子か？」

「お前に用があるのは嫉妬に狂った野郎共か、お前の外見に騙された哀れな女生徒だけだろうよ。中庭で待ってるらしいからさっさと行って振ってやれ。」

しっしつと手を振りながら、顔を顰めて沢郎は言う。

誰も言わないことで、待ちぼうけになる女子をほっとけなかったからわざわざ言いに来たのだろう。

こいつも大概人が良いなと思いながら、正義はよっこらせと腰を上げる。

「待たせちゃ悪いから俺もちょっくらいってくるわ。後片付け頼むな、椎名。」

「はいはい、行つてらっしゃい。失礼なことしちゃだめよ、お兄

ちゃん。」

「母ちゃんかお前は……。」

あー面倒臭え、と頭を掻きながら正義は屋上の出口に進んでいく。

「そうだ、正義。俺は5限目は欠席すると伝えておいてくれ。どうにも胃が痛くてたまらんからな、保健室で寝て過ごす。」

心底疲れたような沢郎の言葉に、はいよとつつあん、と手をひらひら振りながら、正義は屋上を後にした。

「すまん、椎名。胃薬を飲むから水をくれないか？」

「はい、どうぞ部長。あんまり無理しないで下さいね？」

「奴がくたばるまで俺の気苦労は絶えんよ。」

放課後、授業が終わり開放感に満ち溢れた3・Bの教室。

招霊高校から戻ってきて、職員室で報告を済ませた誠は、少しクラスの様子でも見に行こうかと思い、それが間違いだったことに気づき後悔した。

教室に入った瞬間クラスの友人に発見され、そのままあれよあれよと話しに付き合わされることになってしまったからだ。

「そんでき、あの狂った眼鏡なんて言ったと思う？」

「……頼むから、生徒会室以外であの狂人のことを言わないでくれ。帰って早々、あの男の話など一言たりとも聞きたくない。」

今日の授業の愚痴から、果ては聞きたくない男の話まで聞かされて、心身ともに疲れきっている誠は、うんざりとした表情で溜息をついた。

「もう、つれないなーマコちゃんは。そんな悪い子には……こうだにゃー!!」

誠の友人の少女は、そっけない態度に頬を少し膨らました後、素早く誠の後ろに回りこんで飛びつき、程よく焼けた健康的な体を押し付ける。

「……!!ええい、離れる猫女!毎度毎度事あるごとに抱きつくなど何度言えわかるんだ!!」

「えー?だってマコちゃんってなんか抱きつきたくなるような体してるしー。今日はお姉さんマコちゃんがなくて滅茶苦茶寂しかったんだからにゃー?」

誠が怒鳴るのも気にせず、少女　猫女は明るく話す。

何とかして振り払おうと誠がもぐ度に、彼女の肩まで伸ばされ、綺麗に染められた金髪が揺らぐが、そんな事などお構いなしに猫女は誠の体を堪能する。

「相も変わらず良い体してまんにゃー。いつも思うけど、このけしからんメロンをちよつとばっかしお姉さんに分けてくれてもいいと思うのですよ。」

誠の胸を弄り回しながら、猫女は口を尖らせる。

「胸を揉むな！制服にしわが出来るだろう！！」

胸を触る手をぺしつと叩くと、猫女はけちーと言って、今度は頬ずりを始めた。

「良い香りだにゃー。お姉さんが男だったら絶対マコちゃんと結婚するにゃー。」

「お前が男だったら迷わず警察に突き出すぞ、私は。」

考えるだけで恐ろしいと、誠は身震いをする。

「そうそう、男女といえば。」

「また突然だな……。」

唐突に話題を切り替えた猫女に、誠が苦笑する。

「今日、姬ちゃんが正義君に振られてたにゃー。」

「は？伊豆那さんが？」

軽い口調で、クラスメイトの失恋を話され、呆氣に取られる誠。
クラスメイトで、猫女と同じく大切な友人の伊豆那姫いづなひめがよりにもよって九翔正義あのかに振られたと言う。

「そうだにゃー。昼休みに告白してすっぱり振られたらしいんだ

けど、結構堪えたみたいだったにゃー。」

「だからあれほど止めておけと言ったのに……。」

良家の生まれで、頭脳明晰、容姿端麗、性格も穏やかで、いつも浮かべている柔らかくて暖かい笑みが魅力的な完璧超人の彼女なのだが、流石に失恋は辛いだろう。

何の天変地異が起こったのか、少し前から正義に惚れてしまったらしく、何度も相談を受けた。

正義のことが話題に上がるたびに、誠はあいつだけは止めておけと忠告はしたのだが

「およー？もしかしてちょっと安心してるかにゃー？」

「……それ以上言うとか口を針で縫うぞ。」

目を光らせた誠に睨まれ、キヤーと言いながら離れる猫女。

そして誠の前に移動すると、微笑みながら口を開いた。

「まあ、姫ちゃんが好きって伝えただけで満足だって言うってたにゃー。逆に正義君に謝られてちょっと申し訳なかったって言うってたよ。しかし正義君もぶれないよね。今まで告白してきた子全部振ってるんでしょ？」

「それはそうだろう。九翔に告白するのは大概が奴にとって碌に知りもしない奴らだ。好き嫌い以前にまず相手のことすら知らないんだから当然の帰結だ。告白されて、はい付き合いましたようで付き合うような奴ではないからな、九翔は。そして九翔のクラスの女子は自身に気がないことが自然と理解できるから告白もしない。」

「ふーん、意外と真面目なんだにゃー正義君。お姉さんちよつと気になってきちゃったかも。」

「止めておけ、アイツは色恋沙汰より妹のほうが大事だからな。振られるのがオチだ。」

ニヤニヤと獲物を見る様な目をした猫女に、誠は苦い顔をした。猫女はぷーと口を尖らせると、そういえば、と口を開く。

「正義君って、誰かに告白されるって話は結構聞くけど、いつも一緒にいる恭介君にはそういう話は全く聞かないよね。クールで力ツコいいんだけどにゃー。」

「ああ、恭介には九翔妹がいるからな。」

「え？やっぱあの二人付き合ってるの？」

「いや、付き合ってるって周りに思われれば儲けものらしい。」

興味津々で尋ねる猫女に、苦笑して誠は答えた。

「まあ九翔も妹は恭介の物だと常日頃言ってるし、やはり思うう人が多いんだろうな。もっとも、一年の頃はそうではなかったが。」

「なんかあつたのかにゃー？」

「一年の中頃にな、三年の先輩に告白されたんだ。それをこつ酷く振ってな……拳句の果てには一緒にクラスだった私を連れてきて私と付き合ってる言い出したんだ。まったく、とばっちりが酷か

ったよ。結局二年になるまで恋人ごっこをしてたな。」

「うっわ、意外！マコちゃんにも春があっただにゃー。」

「そんな立派な物じゃなかったがな。」

へー、と意外なことを聞いたとでも言うように猫女にまじまじと見つめられた誠は、当時の状況を思い出して軽く笑った。

そんなまことを見て微笑んでんだ猫女は、ふと何かに気付き、誠の後方のクラスの入り口を指差してニヒヒと悪戯っぽく笑った。

「噂をすれば、正義君だにゃー。」

「何をやってるんだアイツは。」

誠が振り向くと、入り口で正義が誰かを探すようにきょろきょろとしていた。

そして誠と目が合うと、朗らかに笑い、口を開いた。

「おい、パーシーー!!」

「おっとお？これはもしかするともしかしてかにゃー？」

目をキラキラと輝かせる猫女を尻目に、不快な名称で自分呼ぶあの男をどうにかしようと立ち上がる誠。

「わざわざ隣のクラスまで来て何のようだ。それとその名で呼ぶなど何度言えば」

「開口一番うるせえなあ、まこっつあん。そんなことより、デー

トしようぜデート。」

誠の言葉を遮り、正義はとんでもない言葉を口にした。

3 - Bの時間が止まる。

放課後になってそれなりの時間は経過しているが、まだクラスに残って自由に過ごしている人も多い。

つまり、3 - Bの少ない視線が一斉に二人に集中したのだが。

猫女が顔を両手で覆い隠してにやーにやー高い声を上げている以外に音は無かった。

ありえない言葉を聞かされ、クラス中の好奇の視線を寄せられた誠は頭の中が真っ白になり

「な、な、な」

「……な？」

「何を言ってるんだこのタコナスビがあああああああ
あ！！！！」

「ヒゲブ！！！」

正義の間抜け面をぶん殴った。

そして3 - Bの時間が動き出す。

触らぬ神に何とやら。

あちゃー、と頭を手で押さえる猫女を除いた3 - Bのクラスの面々は、一連の出来事を脳内から削除し、何事も無かったかのように行動を再開した。

「おい、いきなり何しやがる」

「黙れ、それ以上口を開くな。一体何を企んでいる。」

頬を手で押さえ文句を言う正義をクラスの外まで引きずり、般若のような顔で低い声を出す。

「……あー、悪かった。言い直すよ。」

まだ痛む頬をさすりながら、正義は謝罪する。

らしくない態度をとる正義に違和感を感じた誠は、先程とは別の驚きで片眉を上げた。

「悪いが、ちょっと付き合ってくれねえか？話してえことがあるんだ。頼む。」

「……ここだと人目に付く。話せる場所に連れて行け。」

少し考え、短く答えた誠。

正義はサンキュ、とだけ言つと足早に歩き出した。

誠も無言で正義について行く。

部室棟から、何かが爆発したような音が微かに聞こえる。

何処かの狂人の高笑いも。

何処かの苦労人の胃の痛みも。

何処かの少年の怒鳴り声も。

何処かの少女の悲鳴も。

何処かの事態収拾のために慌ただしく駆け回る者たちの足音も

った。

すでに学園を後にした正義や誠の与り知るところではなか

これは、そんな放課後の話。

10/21・上？（前書き）

異世界編だと思ったか？残念！まさかの日常編だ！！

あ、御免なさいすいません謝ります殴らないで！？（切実）

どうも、タムラカエデです。

何とか今月中に投稿することが出来ました。

本来この話というか、似たような内容なのを、7daysが終わった後の第二部にぶち込もうかとも思っていたのですが、一身上の都合（当社比3倍）により、今回にもって来ました。

ぶっちゃけここらへんで書いとかないと皆さん訳分かりませんもんね、ハイ。

わっかりずれえ拙い文章で申し訳ない限りです。

結構難産というか、時間も掛かったし、2話分凝縮したような文章量になつとりますです。

で、次こそ本当に異世界編投稿します。

異世界編は二つに分けて投稿する形になると思いますです。

次々回のプロットは半分出来上がってるし、今度こそ2週ぐらいで投稿したいなあ。

では、正義と誠のリア充回をお楽しみください。

10/21・上？

「おっちゃん、こし餡一つ。……お前は？」

「カスタードを。」

「へい毎度！！いいねえ、デートかいお二人さん？お似合いじゃないか。」

「勘弁してくれ。」

「息もぴったりじゃないか。……いいねえ、おじさんも若いときはさ」

「いいからさっさと作れよおっさん！！」

赤く夕日に照らされた榊ヶ丘商店街に、威勢の良い焼き屋のオヤジの声と正義の音が響く。

何処か落ち着いて話せる場所でも、と正義と誠は商店街を歩いていたのだが、突然正義が小腹がすいたと言い出したため、たまたま近くで商いをしていたたい焼き屋で先のようなやり取りをするに至った。

たい焼き屋のオヤジに茶化され怒鳴る正義に白い眼を向けながら、誠は口を開く。

「開いた口が塞がらんとはこの事だな、九翔。自分からデートしようなどと誘っておいてその言い草は何だ。……お前は気付いているかわからんがな、一応私も女子でね。詰まるところ、人並みに傷ついたりもするんだが。」

正義は隣に立っている誠の方を見て、あからさまに驚いたような態度をとると、からかうように口を開いた。

「そりや初耳だ。ってこたああれか、お前は俺にホの字ってことでいいのか　ついゝ!？」

「笑えない冗談だ。不愉快な妄想は死んで墓の中でやってくれ。」

踵で思いつきり足を踏まれ痛みで体を震わせる正義を、心底嫌そうな顔をしながら誠は睨んだ。

誠の侮蔑の視線など気にもならないほどの痛みには耐えながら、若干涙目で正義は震えた声を出す。

「……おっさん、こいつのカスタードをマスタードに変えてくれ。」

二人の様子を生暖かい目で見ながら、たい焼き屋のオヤジは羨ましそくに語り始める。

「いいねえ、兄ちゃんが羨ましいよ。構ってもらえるうちが華つて奴さ。ウチのカミさんなんてよお」

「聞けよ!!！」

「兄ちゃんもつれないねえ。ほら、こし餡とカスタードお待ち！」

たい焼き屋のオヤジは正義に怒鳴られると、残念そうな顔をしてたい焼きを二つ差し出す。

「はいよ、勘定。」

「毎度！また来ておくれよ！！」

朗らかに笑うたい焼き屋のオヤジに苦い顔をしながら、正義はたい焼きを受け取ると、誠と共に屋台を後にした。

「ほらよ。」

「……もう少しまともな渡し方は出来んのかお前は。」

隣で歩いていた正義からいいかげんに放り投げられたたい焼きを片手で受け取りながら、誠は溜息をついた。

落とせばよかったのに、と舌打ちをする正義を軽く睨むと、誠は鞆を腋に挟み受け取ったたい焼きの袋を開けた。

作りたてのたい焼きの香ばしい匂いが鼻腔を擽る。

誠は自分でも気付かないうちに頬を緩ませ、熱々のたい焼きを口に入れた。

（……へっ、女の子みてえに笑いながら食いやがって。たい焼き一つでそんな顔するなんざ安いなあ。）

幸せそうにたい焼きを口に入れる誠を横目で見ながら、口にした

ら本人が激怒するようなことを思う正義。

「人から物もらったときはなんて言うか教わらなかったのかよ、パーシー。」

そして、よせばいいのにそんな言葉を口にした。

「くたばれ。」

そんな正義に、低く、短く、怨嗟の声で返す誠。

怒りを抑えるかのような肩の震えは、正義の言葉から来たものなのか、それとも

「……可愛くねえなあ。もつとこう、ありがとう正義君みたいな一言が言えねえのかよ いややっぱいいわ。世界が崩壊するな。ああ、愛しのたい焼きちゃん。君の兄弟をアイツに献上した結果がこれだよ。」

歩みを止めて俯く誠に、同じく正義も足を止めて不満を漏らし、鞆を脇に挟んでたい焼きの袋を開ける。

「やっぱ焼きたてはいいなあ。」

袋から流れ出る香りを満面の笑みで堪能した後、正義は大口でたい焼きの頭部を食いちぎるようにかぶりつき

「……うげ。」

思いつきり顔をしかめた。

「
」

正義は、口に頭部をくわえたままという何とも滑稽な姿のまま、苦い顔でたい焼きの胴体に視線を集中させる。

豪快に頭を食いちぎられ無残な姿となったたい焼きの胴体からは、とろりとした中身が零れ落ちようとしていた 香ばしい焼きたての匂いの中に仄かに甘い香りを漂わせた、薄黄色のカスタードが。

「
」

正義は、苦い顔のまま中身が零れ落ちないように胴体を調整した後、器用にくわえた頭部を口の中に入れる。

そしてゆっくりと咀嚼しゴクリと飲み込むと、

「
　　言えよ。」

恨みがまし気な声でそう言った。

「
……お前が間違って渡したんだろうが、この馬鹿。」

「だから最初にテメエが食ったんだから、教えてくれたっていいだろうがつつてんだよ！」

吐き捨てるように言う誠に、正義が怒鳴る。

誠の手には、チラリとこし餡を覗かせた、頭部を小さく少しだけ食べられたたい焼き。

そして、誠は正義に詰め寄りそのたい焼きを正義の目の前に持つていくと、目を吊り上げて正義に負けず劣らずの音量で怒鳴った。

「私に豆をぐちゃぐちゃにして練り上げたような汚い物を食べさ

せておいて、その言い草は何だ！かつこよく渡しておいて間違えま
したなど笑い話にもならんわ！！受け取ったときに確認ぐらいして
おけこのタコナスビ！！」

尤もと言えば尤もな言い分だが、こし餡を馬鹿にされたことに力
チンと来たのか、目の前に差し出されたい焼きを手で乱暴に払い
のけて正義も更に声を張り上げる。

「テメエ今全ての日本人を馬鹿にしたぞコラ！！毎日生徒会室で
緑茶啜ってるような奴が餡子嫌いとか、日本人全員に頭下げやがれ
！！」

「それは関係ないだろう！餡子じゃなくて豆が嫌いなんだこのボ
ケ！！」

「尚更悪いぞ！カスタードなんて甘ったるいワケわかんねえもん
食いやがって、ご先祖様が墓の中で泣いてるぞ！！」

「お前は世界全ての女性に土下座しろ！カスタードを馬鹿にする
なら、金輪際ショークリームやケーキを口にするなよ！！」

「食うか！そもそもカスタード食いてえならそのショークリーム
食えばいいんだろうが！！たい焼きで食ってんじゃねえ！！」

「お前が聞いてきたんだろう！！死んで詫びろタコナスビ！！」

「！！」

「！！」

商店街のど真ん中で人目も気にせず怒鳴りあう正義と誠。

怒りに顔を歪ませ、二人は本気で喧嘩をしていた　たい焼きの中身で。

「……ハッ。ただかこし餡が食べれなかった程度でそんなにムキになるとは。」

多少は抑えたものの、語気を強めたまま自分の事を棚に上げて正義を侮蔑する誠。

そして、もういいとも言つように正義から距離をとると、

「そんなに食いたいのならくれてやる!!」

頭部を少し失ったたい焼きを正義にぶん投げた。

「あづっ!?!」

正義はそれを受け取ろうとして失敗し、少し冷めたもののまだ温かい焼きを顔面にべちゃつと食らって腋に挟んでいた鞆を落とした。

そして正義が顔を抑えるのと同時にたい焼きも地面にぼとりと落ち

「キャン!!」

どこからか走ってきた犬が啜えて去っていった。

「あ、おいコラ犬!!」

正義は咄嗟に顔を抑えた手を伸ばしたが、空を切るだけだった。

そして間を置かずに慌しい足音が聞こえ、正義が音のほうに顔を向けた瞬間に、ドンと走ってきた男とぶつかった。

「っと、すみません。大丈夫ですか？」

急いでいるのか、早口で正義に声を掛ける男。

「ん、ああ問題ねえよ。」

適当に言葉を返しながら、正義は男を見る。

黒いジーンズに黒いパーカーという怪しい姿。

身長180を超える正義と同じくらいの長身。

深く被られたフードからは口元と白い髪がわずかに見える程度で、顔がわからない。

「それはよかった。すみません、急いでますのでこれで。」

フードの男は正義の言葉を聞くと、口早にそれだけ言って、来た時と同じように慌しく去っていった。

「……さっきの犬でも追っかけてんのか？」

「強盗して逃走中かもしれんぞ。」

先程まで険悪だった空気は、思わぬ出来事で霧散したようだ。呆然としながら正義が呟き、誠が肩をすくめてそう返す。

「黒ずくめだからって犯罪者扱いはいでえだろ。俺らだって全身真っ黒なのによ。」

先程落とした鞆を拾い、そりゃあんまりだと言つ正義。

「お前みたいに額に餡子つけてる犯罪者がいたら愉快だな。」

笑いを含んだ声で誠に言われ、正義は自分の額を触る。

誠に投げつけられた時についたのだろう、又メツとした手ざわりとともにこし餡が正義の手に付着した。

「畜生あの犬め……俺のこし餡……。」

「止めろ、みつともない。」

消え入るような声を出し、味わうように手に付いた餡子を舐める正義に、誠は呆れる。

お前のせいだとしても言いた気に正義は誠を見ると、ずっと手に持っていたカスタードのたい焼きを差し出した。

「あー、なんだ。悪かったな。そら、ちょっと冷めたがこいつやるよ。」

誠は差し出されたたい焼き　だったものを見る。

頭部を失つて胴体だけになったたい焼きは、まことにたい焼きを投げられた時や、先程男とぶつかつた時の弾みで握りつぶされ、カスタードも殆ど袋の中に零れてぐちゃぐちゃになっていた。

「……いらん。」

いまいましてにたい焼きを見て言う誠に、正義は舌打ちをする。そして暫く悩んで、たい焼きだったものを食べ始めた。

「……まじい。」

「いい気味だ、全部食べろよ。」

一口食べて、うげえと顔を顰める正義を、誠はざまあみると鼻で笑う。

「まったく、テメエといると碌な事にならねえ。」

もう言い返すのも疲れたと、ちまちまとたい焼きだったものを食べながら正義はぼやく。

「まったくだ。だいたいなんでお前なんかと一緒に下校など……。」

「

「こっちの台詞だ。いくら女子つつつても、テメエとじゃ色気も何もありやしねえ……ん？」

そこまで言つて、ふと何故こんな状況に至ったかを考える二人。そして、本来の目的を思い出し、正義が口を開く。

「……確か喫茶店が向こうにあった筈だ。」

「すぐ行くぞ。ぐずぐずしているとまた下らない事で争って目的を忘れる。」

「違いねえ。」

そしてお互いに溜息を吐くと、足早に商店街の奥へと進んだ。

「……そついやあの犬、大明神に似てたな。」

「大明神？……ポチタロウか。確かに黒い毛色のチワワだったが、こんな所にいるわけないだろう。招霊町だろう、お前の実家は。」

「アイツ普段プルプル震えて怯えている割には、行動範囲広いかな。ここにいたっておかしくねえよ。いつもどつか居なくなるんだよなアイツ。」

「嫌われてるんだな。」

「違えよ！！アイツはいつも何かに怯えたように震えて吠えもしない犬だがな、俺にだけは吠えてじゃれ付いてくるんだよ。」

「つは、同等に見られてるんだな。」

「んだとコラー！！」

「喚くなタコナスビ！！」

喫茶店への道のりは遠い。

”いらっしやませー！！”

道中色々とありはしたものの、なんとか喫茶店に落ち着いた誠と正義。

窓際の席の角で、壁際に誠、テーブルを挟んで向かい合うような形で正義が座っている。

ミルクティーをそこそこ味わって、さてイチゴショートでも食べようかとフォークを取る誠の対面では、既にコーヒーゼリーを平らげた正義がアイスコーヒーを啜っていた。

何も乗ってないトレイの上には、空のゼリーの入れ物が転がっている。

「……よくまあそんな甘ったるいもん食えるよな。女つてのはどういう舌してんだよ。」

目の前で幸せそうにケーキを食べる誠を見て、正義はコーヒーを片手にげんなりとした顔をしていた。

先のたい焼きの件のお詫びとして奢らされた恨みも含んだ言葉を吐いた正義に、誠は白い目を向ける。

「お前の舌よりはましなつもりだ、九翔。カフェイン中毒になつてくたばれ。」

「デメエは糖尿病にでもなりやがれ。」

「恭介はケーキでも喜んで食べるのにお前ときたら……。」

「アイツはカレー以外なら何でも美味しい美味いと言って食うさ餡子も食うぞ。」

互いに互いを睨みながら罵倒し合う誠と正義。

傍から見れば美男美女のカップルに見えるだけに、何だ別れ話かと二人に視線を向ける周囲の客もちらほら。

「……まあいい。別にお前にケーキの美味さを理解してもらわなくても、私には何の害もないからな。」

お前と話すとケーキが不味くなる、と誠が視線を正義から外してケーキを口に入れる。

「太るぞ。」

そして誠がケーキの甘さに頬を緩ませたところに、正義が止めの一言を放った。

忠告なのか嫌味なのか　間違いなく後者の意味合いの言葉に、誠は静かにフォークを置いて、こめかみに青筋を立てて正義を睨むが、直ぐに諦めたかのような溜息を吐いた。

「私は何故お前みたいな奴がもてるのかがわからん。」

「そりゃあお前、顔は良し、頭も良し、おまけに性格まで良いんだからモテモテに決まってるだろうが。」

「そういう事を平気で自分で言う様な奴が、何故もてるのかがわからんと言っているんだ。」

呆れたような口調で誠に言われ、正義は方を竦める。

「俺だつてわかんねえよ。別に顔は自分でもそんなに悪くねえと思ってるし、一応身嗜みも整えてるからそこそこ見れたもんだろう。授業だつてちゃんと聞いてりゃ点数なんてある程度取れるし、適当に当たり障りのない、人受けのいい事言つてりゃそんなに嫌われることもねえだろうさ。」

視線を逸らして頬をぱりぱりと搔く正義を、誠は無言で見つめる。

「嫌われることがねえイコール好かれると思ってる訳じゃなかったんだけどなー。何でまた碌に話したことねえ奴や、顔も名前も知らねえような奴のハートをゲットしちまうのか……ホント、俺が聞きてえくらいだよ。」

そう疲れたように締め括るった正義は、一口コーヒーを飲み、小さく溜息をついた。

珍しく弱音にも似た言葉を吐いた正義に、誠は意外なものを見たとしてもいような顔をした。

「まあ、お前も色々大変なんだな。」

「おうよ、うまく振るのも大変なんだぜ？」

「まあそれはそれとして、だ。」

「おい、もうちょっとくらい労わってくれても良いんじゃないのか？おいコラ。」

大いに不満がありそうな顔で文句を言う正義を無視して、誠はじと目で口を開く。

「他所で八方美人に振舞っている割には、私には馬鹿にしたような態度しかとらないのはどういう訳だ。」

不貞腐れたようにコーヒーを口に含んだ正義は、誠の言葉を聞いて呆気にとられたかのような顔を見ると、ゴクリとコーヒーを飲み込んで、そのままコップを持った手で誠を指差した。

「何だ、お前俺に優しくして欲しかったのかよ。」

「違う！誰かに勘違いされるような言い方をするなタコナスビ！」

頬を少し赤く染めて声を荒げる誠など気にせず、正義はコップを置くと、そのまま上半身をテーブルに伏せて笑いを堪えるように肩を震わせる。

「……ッ。そうだよなあ、なんだかんだで、女の子だもんなあ……。ククツ。からかわれるより、優しく扱って、欲しいもんなあ。恭介の、クツ、言つた通り、誠ちゃんは、繊細な、乙女だつたわけだ　ブフツ。」

言って、正義は涙目になりながら少し顔を上げた。

目の前には顔を真っ赤にして俯いる誠
怒りではなく恥ずかし
さで肩をプルプル震わせている。

それを見た瞬間、もう我慢できないとばかりに正義は爆笑する。

「プハハハハハハハハハ！ そんな顔真つ赤にしちやつて可愛
いじゃねえか、ええ？ ま・こ・と・ちゃん？ 駄目だ、止まらねえわ、
最高だわお前！！ 何時もその憎まれ口の裏で正義君つて意地悪だな
ーとか思つちやつたりしてた訳だ…… わりいわりい、ダハハハハハ
ハハハハハハ！！」

コップが揺れるのも気にせずにテーブルをバンバンと叩いて、心底愉快だと笑う正義。

目元に薄つすらと涙を浮かべながら睨む誠に気付くと、正義は皿から落ちたフォークを手に取り、ケーキを少し取り分けて誠の口元

まで持っていく。

「　　ククツ、そんな可愛らしい顔で睨んでくれるなよ、まこつつあん。ほら、お前の好きなケーキだぜ？あーんしてやるよ、あーん。」

ほれ、と正義がニヤニヤしながら誠の前でフォークを揺らしたところで、プツリと何かが切れる音がした。

「　　もう我慢できん！表に出ろ、九翔！！お前のそのいけ好かない顔を原形も留めない位に殴ってやる！！」

テーブルを叩いて立ち上がり、業を煮やして叫んだ誠を、面白いものでも見るかのような顔でニヤニヤしながら正義は両手を広げる。

「まあまあ、落ち着けよ誠ちゃん。そんなこと言っても心の内はわかってるんだぜ？気にすんな、普段は喧嘩ばかりしてるが俺はちゃんと受け入れてやるよ。ほら、俺の胸に飛び込んで来い。」

「くう！お前のその何もかも理解しているというような顔が腹が立つ！！」

悔しがる誠などどこ吹く風とばかりに、余裕綽々の笑みを浮かべる正義。

「　　お客様。申し訳ありませんが、他のお客様のご迷惑となりますので、もう少しお静かにお願いします。」

そして誠がまた口を開こうとした時に、迷惑そうな顔の店員に釘を刺された。

周囲を見回した後、居心地が悪そうに腰を下ろす誠。

そんな誠をニヤニヤと見ながら、性懲りもなくまたケーキを刺したフォークを誠の口元まで持っていく正義。

「お前まだ」

「まあ食べよ。話はそれからだ。」

誠にキツと睨まれても、まるで何かを試すかのように誠の口元からフォークを動かさない正義。

誠は暫く迷って 顔を赤らめながら目を瞑り、恐る恐るケーキを口に入れた。

「……本気で嫌なら、フォークを奪うなり何なりすれば良いのによお。マジで意外だ。」

「」

「オーライ、分かっているから睨むな。これからは、それなりに気を使ってお前と付き合っていくことにするよ。」

口を動かしながら睨む誠を、片手をひらひらと振ってあしらい、正義は小さく溜息をつく。

そしてコーヒーを一口飲むと、先程のような馬鹿にしたような顔ではなく、いたって真面目な顔で口を開いた。

「まあ、なんだ。お前は齒に衣着せぬつつーか、上っ面じゃねえ物言いの方が付き合やすいんじゃないかねえかって思ってたんだけどなおべっか使われたって嫌な気分しかしねえだろ、お前。」

「それはそうだろう。調子のいい事をべらべらと話されるよりは、ある程度本音を言ってもらう方が好ましいに決まっている。お前程とまでは言わないが。」

何を言ってるんだ、と誠は少し首をかしげる。

「そうかい。んじゃあ、さっきも言っただけどそれなりに気を使うことにするさ。」

柄にもない正義の物言いに、誠は困惑の表情を浮かべた。

「んだよ、なに訳分かりませんってツラしてんだ。」

「いや、私はただ、他の奴には愛想を振り撒くせに、何故私には態度が違うのかというちよつとした事を聞きたかっただけなんだが……まさかそんな答えが帰ってくるとも思ってたくなくてな。」

戸惑いがちに誠が言った言葉に、漸く合点がいった正義は、何だそんな事かと口を開く。

「ああ、なるほど。そりゃ簡単な話だ。お前がその他大勢じゃないからに決まってるだろ。」

「は？それはどういう」

「有り体に言っちゃまえば友人と違ってることなんだが」

訳が分からないという誠の言葉に、正義が言葉を重ねるが、それが更に誠を悩ませる。

（もしかして完全に予想外だったのか？またなんか難しく考えてんじゃねえだろうな……。）

「お前がどう思ってるかなんぞ知ったこっちゃねえよ。ただ、俺がお前を友人って思ってるつー事だけ知つといてくれりゃそれでいい。」

「すまん、頭がこんがらがってな……。」

「構わねえよ、俺も変なこと言っちゃまったな。」

頭を抱える誠を見て、どうしたもんかと正義は頭を掻くが、一度小さく深呼吸した後、何かを決めたように口を開いた。

「あー、悩ませちまってこんな事言うのもなんだがな、これ以上ぐだぐだしても話が進まねえし、そろそろ本題に入っちまおうかと思うんだが。」

正義の言葉に、誠は表情を変える。

なんだかんだでくだらない話ばかりして、隅に置かれた本来の目的。

話したいと誘ってきた正義の態度が態度だっただけに、誠から本題を促すのはなんとなく憚られたが、正義も漸く話す決意を固めたようだ。

薄々と話の内容の予想はついてるが、と誠は静かに耳を傾けて正義の言葉を待った。

「本題つつつても……まあ、恭介の事なんだけどな。」

（まあ、そうなるだろうな。）

正義は何かあれば恭介に 誠にとつては非常に遺憾ではあるが、恭介も何かあれば正義に相談するだろう。

その正義がわざわざ誠に話したいこと とくれば、おのずと恭介のことであると察しはつく。

「……恭介の奴、最近おかしいんだ。」

おかしい、とは。

隠し事か何かか、と誠は一瞬考え、そしてすぐにその考えを止めた。

恭介は基本的に隠し事はしない 隠してると周りが思ってるだけで、聞かれれば答える。

仮に、隠し事か何かがあったとしても、正義が聞けば答えるだろうし、最悪殴つても聞き出せば済む話 正義ならまず殴つても聞き出すだろう。

そう、基本的に恭介絡みなら正義一人で解決できる問題 それをわざわざ誠に相談するということは、正義一人では手に余る、厄介な問題。

さてどんな話が飛び出てくるのかと、内心冷や汗を掻きながら、誠は目を細めた。

「あー、どう話せばいいか。……おい、誠。お前恭介のことどのくらい知ってたんだ。」

正義は暫く悩んで口にした言葉に、誠は一瞬訳が分からなくなっ

た。

「おい、何の関係が」

「頼む。」

誠は怪訝な表情で口を開いたが、正義の顔を見て不満を飲み込み、淡々と話し始めた。

「　　榊ヶ丘学園3 - A。18歳。身長170弱。成績は上位。身体能力優秀。黒髪黒目。好きな物は牛乳。嫌いな物は辛口のカレシ。死んだ魚のような生気のない目をしていて目つきは悪いが、何時も笑顔を振り撒いている。それで、これが何か」

「全部、話してくれ。」

正義は一体何を言わせたいのか。

誠は少し悩んで　諦めたように溜息を吐いた後言葉を続けた。

「　　稀に変わった口調で話すことがある。……両親だけではなく、親族全てが既に他界している。明るく笑ってはいるが、きつと内心では冷めている。笑顔も張り付けただけだろう。お前と同じだ、九翔。悪く言えば八方美人だな。」

これで満足か、と多少の皮肉を込めて誠は言った。

恭介とは一年からの付き合いだが、話していると極稀に変な口調で話すことがあった。

何時もすぐに元に戻るの、別段言葉にするほどの事でもない、誠は思っていた。

両親の話に関しては、一年の頃に何かの話の種で聞いたところ、何とでもない様な口調で話されたことがあるのを覚えている。

ずっと恭介と付き合っている内に、誠は自分や正義などに向ける笑顔と他人に向ける笑顔が違ふことに気付いた。

知人だろつという人物との他愛のない話に、薄っぺらい笑顔でニコニコと相槌を打つ恭介を見て、ああ、きつとどうでもいいんだろつなと思う場面も少なからずあつた。

それが、一体なんだというのだろうか。

誠より付き合いの長い正義なら当然知っていることだろう。

別に改めて話すこともない。

むしろ正義が知っていて誠が知らないことなんて山程あるだろうに、正義は一体誠から何を聞いたかつたのだろうか。

「そりゃそうだろうな、俺がそう教えたんだから……。そうか、そこまで知ってるんなら……。」

訳の分からないことを言つて、腕を組み難しい顔をする正義。

誠はいい加減先程の意味を問いただしたかつたが、普段から何の躊躇いもなくズバズバと物を言う正義がここまで言い淀むのは余程の事なのだろうと思い、ただ黙つて正義が話し始めるのを待った。

「恭介の両親と親戚が既に亡くなつてゐるつていう話なんだが……。」

暫くして、正義は難しい顔のまま重い口を開き、ゆっくりと話し始めた。

「アイツの両親と親戚な、殺されてんだよ。」

誠は、正義の口から出た予想外の言葉に、驚きで目を見開いた。
……確かに、確かに死因は聞いていなかった　聞く事でもなかつたし、知りたい訳でもなかった。

病気が事故での不幸と思っていたのだが、まさか殺されたとは思ってもみなかった。

腕に力が籠る　　こういう事かなのかと聞きたいが、それよりもなによりも

「　それは、私に言っていることなのか。」

「言っているわけねえだろうが。俺だってこんな事誰かに聞かれました話したくねえよ。けどこれを話とかねえと何も始まらねえんだ。」

聞きたくないことを聞いた、とでも言う誠の言葉に、苛々した様な口調で正義は返す。

それもそうだ、友人の不幸話など誰も好んで話したがるに違いないだろう。

それでも話したのはそれが必要だったからに過ぎない。

「……すまん、無粋な事を聞いた。」

「いや、いい。俺も言い方が悪かった。」

誠は思慮のかけた言動を謝罪し、正義は片手をヒラヒラ振った。話の序盤からこんな事では先が思いやられる　誠は相当重い話が出ることを覚悟して、気分を少し落ち着かせるためにあまり手をつけていなかったミルクティーを一口飲み、正義に視線を向けた。誠に視線で続きを促された正義は、コーヒーを一口飲んで喉を潤し話を続ける。

「それで……そうだな、両親と親戚一同が集まった場所で事が起こったんだが　幼い恭介もそこに居て巻き込まれた。」

「なら恭介は　　」

「　　両親の死を間近で見ている。」

「　　」

誠が言葉を言い切る前に、正義が言葉を重ねる。
誠は目を閉じて深く溜息をつき、押し黙った。

薄暗い空間、充滿した血の臭い。

血だまりの中で、幼い恭介が家族の死体をうつろな眼で見ている。

誠は、そんな映画のような場面を想像して　そしてその想像に、自己嫌悪で顔を顰めた。

「その事件で運良く恭介だけ生き残って、縁あって俺の家で預かることになったんだが……その事件の後から、恭介は心を閉ざしちまった　分かり易く言やあ、感情が無くなっちまった。」

腕を組み険しい顔をした誠は、目を閉じたまま片眉を上げる。

感情が無い。

果たして、そんな人間がこの世にいるのだろうか。

感情が希薄な人間はいるだろう。

良心、罪悪感、愛情、恐怖、憎み、恨み、善意、悪意、喜怒哀楽

あるいは何かしらを感じられない、欠如している人間も存在しているかもしれない。

だが、今生きているのなら……仮に、自分には感情が無いと言う人間が居たとしても、それを誰かに話しているという時点で感情があるのと同じなのではないだろうか。

「……難しい顔してんじやねえよ、分かり易く言えばつつたろ。全く感情が無い人間なんていねえ。指先一つでも動かしてりや、そいつにや立派に感情があるさ。少なくとも俺はそう思ってる。だが、まあ問題なのは……恭介が自分に感情が無いって思い込みまってるって事だ。」

「……馬鹿げた話だ。確かに冷淡ではあるかもしれないが、普段はちゃんと」

「家に來たばっかしの頃は酷かった。何が起こったって無感動。呼びかけても返事一つしやしねえ。いつつも能面みてえなツラして、飯と寝る時以外は一人で何処か遠くを見てやがる。生気のねえ死んだ魚のような目だな。まだガキだった俺は、本気でアイツに感情がねえのかと思った。正直、怖かったよ。」

片手で顔を抑えながら、独白するかのように語る正義。

当時を思い出してか、あるいは別の感情からくるものなのかその声は少し震えていた。

「暫く経って、ちよつとした切っ掛けで、恭介から自分に感情がないってことを聞いた。その時の俺は、何のつもりか恭介に感情を教えてやるって言ったんだ。今思うと、ガキが何を偉そうに、何様のつもりだって感じだけだな。」

懐かしむように、段々と暖かい笑みを浮かべる正義。

きつとその時の出来事が、正義と恭介の仲を確固たるものにしたのだろう。

誠は、自身が入り込めるような余地など無いのだろうなと軽く嫉妬を覚え 何を馬鹿馬鹿しい事を、と頭を振る。

「たまに恭介が妙な口調で話すっつってたら。あの変な口癖みたいなやつは、そんな時からのもんだ。俺がそうやれと教えた。」

「……？何でまたそんな妙な事を。」

「そうだな……おい、ちょっとお前アイツの妙な口調を真似してみろ。」

怪訝な表情の誠に、正義はニヤリと笑うと悪戯っぽくそう言った。少し考えるような素振りを見せて、まあやればわかるかと誠は口を開いた。

「……突然恭介の真似をしろと言われても、そう易々と言葉が浮かんでくるものでもない。

九翔の無茶振りに、どうしたものかとあまり手をつけていなかったミルクティーを一口飲む 甘い。

このまま味わって飲み続けたいところだが、何を考えているか分からない九翔のニヤついた顔が嫌でも目に映る。

別にこのまま無視しても良いが

「

「んで、お前は今どんな気持ちなわけよ。」

「 どんなもなにも、腹が立つに……ああ、なるほど。なん

ともまあ回りくどい真似を。」

漸く理解した、と誠は呆れたように溜息を吐く。

「確かに回りくどいが、いい方法だろうが。ガキが考える事なんてそんなもんだ。」

じと目で見られ、肩を竦める正義。

そして、ズズズと音を立てて一気にコーヒーを飲み終わると、昔を振り返るかのように話し始める。

「……最初は恭介もちんぷんかんぷんだったさ。どんな気持ちとか聞いたって、首かしげるばかりだったよ。だから教えた。こんな時はこういう気持ちなんだ、こんな時は喜ぶんだ、こんな時は悲しいんだ、こういう時は怒って良いんだ、こういう事をするとなんか、笑うときはこんな顔するんだ……ってな。」

片肘をつき、その腕に顔を乗せて、空のコップをクルクルと回す正義。

「妙な口調で話して……俺の表情を、言動を真似て、段々恭介は明るくなっていった。そのうち、口調なんて関係なしに笑顔を見せるようになって、なんでもねー事でもニコニコと楽しそうに笑うようになったんだ。」

透明のプラスチック製のコップの中で、残った氷が揺れに合わせる様に踊る。

「確かに、アイツにや感情があっただ。あっただよ……。起こっちゃったもんを忘れられるはずもねえが、それを馬鹿言

い合って笑って誤魔化せる程度にはなったんだ。それで良かった。それだけで十分だった。それで上手く行くはずだったんだ……。」

ガシャガシャと、少くない数の氷がぶつかり合って耳障りな音を立てる。

「まあ、実際世の中そんな上手く行くはずもねえ。幸か不幸か、夜没恭介は見事に”復讐”を果たして 結局ゼーんぶパアになっちまりましたとさ。」

グシャリ、と苛立ちをぶつけられたかの様にコップは潰され、中の氷は音の無い悲鳴を上げて砕けた。

正義は吐き捨てるように言った後、用済みのコップをトレイの上に粗雑に放り投げる。

潰れたコップに蓋がともに機能するはずもなく、トレイの上には氷がぶちまけられた。

知ったこっちゃねえ、と正義はトレイを無視して、いすの背もたれに上体を預けた。

対して、”復讐”などという穏やかではない言葉を聞かされた誠は息を呑み、目を見開いて顔色を変える。

「おい、復讐とは一体どういう」

「おいおい、テメエの脳みそはサル以下か？もしそのすっからかんの頭の中に一欠片でも何かが入ってるっつーんなら、何があったのか分かりそうなもんだがな。」

「」

口調こそおちゃらけているものの、全く笑っていない目に押されて誠は黙った。

復讐　簡単な話だ。

両親を、親族を殺された少年がどのような復讐を果たしたかは想像に難くない。

だが新聞やニュースでもめったに無い事件が、自分の身近に、しかも友人に起こっていたなんて事は俄には信じられないし、信じたくない。

「そんな、馬鹿な」

「馬鹿だよ、ホントにな。まだガキだった……止められるもんじやなかったんだ。」

「いや、それでも」

誰かを、殺すなんて事。

嘘であってくれ、と否定するかのように言葉を探す誠。

「嫌か？理解できねえか？認めたくねえか？……構わねえよ。だつたら無かつた事にしてくれ　大歓迎だ。」

窓の外を見ながら正義は素っ気無く言った。

一番この出来事無かつた事にして欲しいのは他でもない正義だろう　誠は再び口を開くことが出来なかつた。

無言の状態が続く。

別に見られてる訳でもないのに、何となく正義の方を見辛い。視線を逸らすかのように、誠は正義と同じく窓の外を見た　疾

うに日は落ちていて、外は暗かった。

「アイツにとって幸運だったのは」

ポツリと正義が口を開く。

「アイツにとっての幸運は、その時のショックが何かでアイツの身に起きた不幸を忘れちまったってことだ。両親が殺された事も、復讐を果たした事までな。……今の恭介は、ただ両親が病気が何かで死んで家に預けられたって事しか知らねえ。」

それは……それは、きっと恭介にとって良い事なのだろう。

両親が殺された事、そして恭介が果たした復讐は、抱えて生きるには重過ぎる。忘れられるのなら、忘れてしまったほうが良いのだろう。

無理やりにもそう思うことにして、誠は軽く視線を下げた。

「そしてアイツにとっての不幸は、自分に感情が無い事だけを覚えちまつてるってことだ。アイツは、生まれた時から自分には感情が無いと、そう思い込みしまったんだ。家に来てから今まで俺と一緒に積み重ねてきたもん全部忘れちまつて俺の真似をして感情がある振りをしてるって思い込みまつてる。……なあ、俺と恭介、似てるか？」

「……笑えない冗談だ。」

沈痛な面持ちで尋ねる正義に、視線を合わせずに誠は答える。

本当に笑えない冗談だ。

姿形ではなく、言動、仕草にしても恭介と正義は似ても似つかない。

「だろうな。クラスの奴らに聞いたって……いや日本中に聞いたって、誰もが口を揃えて似てないって言うに決まってる。……けどな、アイツは真剣に俺を真似ているつもりなんだ。朝、胡散臭い笑顔を貼り付けて”夜没恭介”を始めた瞬間からな。ありえねえって思うだろ？ 恭介はクラスの奴らとも、お前と話している時でも俺を真似て、俺の様に振舞ってるつもりなんだ。アイツが俺を真似てるっつーんなら、お前と仲良くなる訳ねえのによ。そんな簡単なことにも気付かねえ……気付かねえ振りしてるんだ。」

「……馬鹿な話だ。」

夜没恭介を九翔正義だと、九翔正義に似てるという誰も奴など居ないだろう。

愛想を振り撒く、という点では確かに似てはいるのだろう　が、それは皆同じだ。

ただ、やるかやらないかの違いだけ。

誠も、恭介が正義に似てるなど一度たりとも思ったことは無い寧ろ正反対だとは思っていなかった。

なのに、恭介自身は必死に正義を演じているつもりなのだというのは、なんて　なんて滑稽な話なのだろうか。

「別に、それでもいいと思ってた。いや、良くはねえが、急ぐことでもねえだろうな。アイツが俺を演じてるつもりでも、お前も、椎名も、いろんな奴が恭介を恭介として見てくれている。思い込んじゃってはいいるが、感情があることに変わりはない。気付いてないだけで、アイツはちゃんとアイツ自身の言葉で話している。だからきつと、時間が解決してくれるだろうって思ってた。恭介は笑ってる、家に来たときに比べたら随分マシだ、ならいいじゃねえかってな。ああ、そう思ってたんだ　3日前までな。」

段々と声のトーンが下がっていき、言い終わると正義は目を伏せた。

（ここからが本題、と。正直勘弁して欲しいところだが……今更か。）

誠は天を仰いで溜息をついた。

つまり今までののはさわりの部分。

正義は恭介がおかしいと言った。

なるほど、ここまでの話を聞いておかないと、仮に先に話を聞いてもどこがおかしいのかも分からないだろう。

今までの話でお腹が一杯で、誠はもう耳を塞いで今すぐここから逃げ出したい衝動に駆られたが、今更な話だ、と居住まいを正して正義のほうに向き直る。

「3日前だ。3日前から、突然恭介が夢を見始めた。」

「悪夢か何か？……すまん、余計な茶々だったな。」

言ってすぐに謝る誠。

だが、正義は首を縦に振って答えた。

「いや、間違っちゃいねえ。昔の夢だ。毎日見るらしい……多分今日もな。」

「まさか。忘れたんじゃないのか？」

流れからして、昔というのは先の話の時の事だろう。どうということだ、と誠は目を細める。

「いくら本人が覚えてないつつつても、脳みその方からも完全に消去されてるって訳じゃあねえだろ。寧ろ脳みそから奇麗サツパリ消えちまつてるって方が驚きだ……簡単に忘れられるもんじゃねえだろうよ。」

「だが恭介本人が忘れているのに、何故それが昔の夢だと分かるんだ？あるいは夢を見て昔を思い出したのか？」

「アイツが言うには、記憶にやねえが、他人の子供の頃の夢なんて見るはずも無いから、きっと自分の夢だろう、だよ。もしかすると心のどこかで覚えているのかもしれないし、あるいは覚えていて、覚えていない振りをしているのかもしれない。……日に日に夢がはつきりしていくつつつてた。どちらにしろ、このままいけば恭介は昔のことを全部思い出しちまうだろう。」

頭を振り、苦い顔をする正義　心なしか、表情に疲れの色が見えるような気がする。

それに気付かない振りをして、誠は話を促す。

「それで、夢を見ることがおかしいことなのか？」

「……いや。確かに、恭介がこんな夢を見たことは今までにねえ。少なくとも、俺の知る限りではな。何がおかしいかつつと、そうだな……そうだ、恭介は段々壊れてきてる。夢を見始めた日から段々と、な。」

「……………」

「あの薄っぺらい笑顔がいつもみたいに貼り付けられねえ。仮面

がすぐボロボロと？がれちまう。お前はたまに妙な口調で喋るつつたけどな、昔の事を忘れてからこつち、恭介はあの妙な口調は滅多に言って言っていないほど使わねえんだ。聞いたことがあるのは、そうだな……俺に俺の家族、んでお前と　後は指で数える程度だろうよ。そんな今じゃ珍しい口調が、ここんとこ毎日出てる。何かの弾みですぐに、な。」

頭を搔きながら喋る正義の顔は辛そうだ。

「昨日聞いたよ。お前一体どうしたんだってな。そしたら夢の話をされた。……なあ、お前想像できるか？あの恭介が怖いっつてきたんだぜ？震える声で、仕舞いにや悲鳴まで上げてよお　今にも泣き出しそうなツラで、自分が自分じゃなくなる気がするって怯えてんだよ。」

「……………」

誠は、乾いた笑いを浮かべながら淡々と話す正義に何も言うことが出来なかった。

「昔がどうだったかにしろ、”今”の恭介の根底にあるのは、昔を忘れた、感情が無いから俺を真似ているつもりの恭介だ。小3の夏から今の今までアイツはそうやって生きてきたし、これからもうやって生きていくんだろ。……アイツはな、怖いんだよ。日に日にハッキリしていく夢を見て、昔を思い出したら　感情があつた自分を思い出しまつたら、今までの自分が壊れるような気がして怖いんだ。泣きそうなツラで助けを求めてくる恭介に俺は何も出来なかった。」

ついに、誠は自分の目を疑った。

いけすかない、何時も人を馬鹿にしたような笑いを浮かべている正義が。

顔を合わせれば喧嘩ばかりして、互いに嫌いあつてるとばかり思っていたところに、又ケ又ケと友人宣言をしてきた正義が。

お調子者で、樂觀的に見えて、それでいて本心を曝け出した所を滅多に見ることの無い正義が　その乾いた笑顔の裏で泣いていた。

「自分には感情が無いって必死に否定する恭介によお、俺は感情があるって意地張って馬鹿みてえな事しか言えなかった。ずっと一緒にいるってのに、気の聞いた言葉一つ掛けれやしなかったんだ。拳句の果てには、やり場の無い不安を何処かにぶつけようとするアイツを蹴り飛ばして、下らねえ説教だ。俺は、アイツに何も　何もできなかつたんだ。」

泣き笑いとは、こういう事をいうのだろうか。

正義の顔はどこから見ても笑っているように見えて、だがしかしその歪んだ笑顔は、見ようによっては泣いているようにも思えた。今までに聞いたことも無い声色　助けを請うかのような震える声。

見えない涙を頬に流して、懺悔するかのように親友に何も出来なかった自分を責める正義。

誠はただ戸惑うことしか出来なかった。

「なあ、誠。頼むよ、恭介を助けてやってくれ。俺じゃ無理だ無理だつたんだ。椎名じゃ無理だ……もう、お前しかないんだよ。アイツの事を分かってやれる友人はもうお前しかないんだ。」

正義の懇願に、誠は深く考え込む。

長年恭介と一緒にだった正義に解決できないものが、果たして2年半程度の付き合いしかない自分に如何にか出来るのかと。

勿論誠は、恭介の事を大切な友人だと思っている。

だがしかし、悔しい話だが、正義にここまで言わせる出来事を自分が解決できる自信は無い。

自信の無いものを、そう安請け合いしてもいいものなのか

「頭ならいくらでも下げる。お前が本当に嫌なら態度も変えるよだから、頼む。」

「だったら頼むから頭を上げてくれ、くすぐったくて敵わん。明日恭介と話す。やるだけの事はやってみるさ　だが、期待はしないで欲しい。」

「　すまん。」

結局、誠は引き受けることにした。

頭を下げる正義を見て、誠は深い溜息をつく。

正義が友人の恭介のために他でもないこの自分にここまで頭を下げるのに、同じ恭介の友人である自分が何もしない訳にはいかないだろうというのが理由の一つ。

もう一つは、出来る出来ないより、やるかやらないか　簡単な話、結局はそこである。

自分が動く事でどうにかなるのなら願ったり敵ったりなのだがさてどうしたものか、と誠は頭を悩ませ、

「　出よう、いい頃合いだ。軽々しく引き受けたのはいいものの、いざ恭介と向かい合って言葉が浮かんできませんでしたでは格好もつかないからな。家に帰って少し考えてみる。」

とりあえず、帰ることにした。

「ん、おお、そうだな。もうこんな時間か。あーあー、誰だよこんなに氷散らかしたの……って俺だわな。ほら、飲み終わったんならよこせよ。」

正義はチラリと時計を見ると、トレイと鞆を持って立ち上がった。トレイに散乱した氷に愚痴りながら、正義はケーキの皿と、先程誠が飲み終えたミルクティーのカップを奪ってトレイに載せると、そのままレジの近くの返却口まで歩いていった。

別にそんなに急ぐことも無いだろう、と誠は呆れながら鞆を持って立ち、忘れ物が無いかテーブルを確認する。

乱暴に持ち上げられたのだろう、トレイの上に散乱していた氷が、テーブルの上にいくつか零れていた。

不恰好に砕けた、氷の欠片。

誠は一瞬自身が想像したものに寒気を覚え、足早に正義の後を追った。

” ありがとうございましたー！！ ”

店員の気持ちのいい掛け声に少し遅れるような形で、客の出入りを知らせる軽やかな電子音が店内に鳴る。

「 なるほどねえ。彼にそんな過去があったのか。 」

つい先程まで正義と誠がいた席の後ろ側。

椅子の背もたれにゆったりと体を預けた黒いパーカーとジーンズ姿の男は呟く。

「いや、これは思わぬ拾い物だった。まったく、寄り道はしてみるものだね。」

深く被られたフードからは、楽しげな笑みと、僅かな白髪しか見えない。

何が楽しいのか、フードから僅かに見える白髪を手で弄りながら男は笑う。

「中身が空っぽである筈の彼を、そこまで突き動かすものは何かと常々疑問に思ってはいたけど……成程、道理で。」

誰に話しかけるわけでもなく、男は一人で言っただけ。

後ろでテーブルを拭いていた店員が、気味が悪そうに男を見た。

「中々にいい御友人をお持ちのようだけど……いやはや、それだけに心中お察しするよ。しかし、何時も思うけどこのコーヒーはいただけない。いや、まるでドブ水でも飲まされているかのようだよ。」

男はホットコーヒーを一口飲むと、不機嫌そうにカップをテーブルに置いた。

そして、カップの近くに置いてあるコーヒーゼリーを手にとると、一口掬って食べ、口元を綻ばせる。

「……同じ材料なのにどうしてこうも味が違うのか。まったく、コーヒーゼリー専門の料理人が居るのかと勘違いしてしまうよ。し

かもこのミルクを少し垂らすだけでどうだ　　素晴らしい。」

コーヒージェリー一つで人目も憚らずにはしゃぐ長身の男。

周囲の突き刺さるような視線も気にせず、男が嬉々としてゼリーを食べていると、男のパーカーのポケットの辺りがもぞもぞと動く。

「……ん？」

男が、ゼリーを食べる手を休めると同時に、パーカーのフードの根元の部分から、ピヨコツと可愛い音でも聞こえてきそうな感じで、小さな犬の顔が出てきた。

「どうした？君も食べたいのかい？小さな犬の名無し君。」

「……………」

男の問いに、犬　真つ黒な毛色のチワワ犬は、黙ってプルプルと震えて、鼻をヒクヒクと動かすだけだった。

「何か言ってくれないと分からないよ。　それに君からはまだ名前も教えてもらってない。」

「……………」

チワワの喉元を軽く撫でながら、男はまるで友達に語りかけるかのような口調で言う。

取り付けられた真紅の首輪の近くを撫でられ、チワワは気持ちよさそうに目を細める。

「お客様。申し訳ありませんが、当店へのペットの持ち込みはご遠慮下さい。」

そして、犬と男の一時は迷惑そうな顔をした店員にストップを掛けられた。

「……まったく。この国は確かに楽しい、だが少々煩すぎやしないかい？君はどう思う？小さな犬の名無し君。」

「……………」

不機嫌そうな男の問いに、チワワは当然答えずに静かに震えていた。

「お客様。」

「……はあ。やれやれ、いいかい」

多少ではない苛立ちを含んだ声を発する店員に、面倒臭そうに対応する男。

店長が出てくる事態になるまで、男は店員の注意をのりくらりと対応しながらゼリーの味を楽しんだ。

その間、ずっと男の首元から顔を出して震えていたチワワが一匹。取り付けられた真紅の首輪には、可愛らしい字でポチタロウ、乱雑な字で大明神とマジックで書かれていた。

「んー……。いやあ、悪かったな。随分長いこと話し込んでしまった。入ったときにやまだ6時前だったつてのによ。」

「気にするな。私も幾らか話の腰を折ってしまったからな。……というより無駄話が多かったからだろう。」

「違いねえや。」

喫茶店から出るやいなや、思いつきり背伸びをして誠に謝る正義構わない、と言って誠も軽く背を伸ばした。

喫茶店に入るときにはまだ夕焼け空が明るかったものの、今ではすっかり日が暮れて月明かりが二人を照らしている。時刻はもうすぐ午後9時に差し掛かるうとしていた。

「時間も時間だしな、送るぞ。」

「……止めろ、気持ち悪い。」

「オイ。」

正義らしくも無い誠に対する殊勝な態度に、誠は寒気がするとばかりに体を震わせる。

「いらん気を使わんでいい。商店街を抜ければすぐ家だ。」

「そうかい。帰り道にお前を襲いそうな奴に一言忠告しといてやるよ。御愁傷様つてな。」

「……どういう意味だ。」

今度は誠が正義を睨み、正義はそ知らぬ顔で明後日の方向を向いた。

「この調子だと明日は晴れだな。」

「そうだな……。」

昨日と違い、雲ひとつ無い夜空。

数多の星の輝きと、月の光が惜しみなく榊ヶ丘を照らす。

「最近のニュース見たか？地震に台風、どっかじゃハリケーンまで起こってやがる。」

「……ああ、最近物騒なニュースばかりだ。」

「穏やかじゃねえよなあ。……何も起こらなきゃいいけど。」

空を見上げて、何処か遠くを見るかのように目を細める正義を、何ともいえない表情で誠は見る。

正義が抱く不安は、不穏なニュースによるものなのか、それとも

「うっし！！んじゃ俺は帰るぜ。気をつけろよ。悪いが、明日は任せた。」

パチン、と小気味良い音を出して正義は両頬を軽く叩くと、鞆を肩に担いでヒラヒラと片手を振った。

「ああ、お前もな。明日は泥舟に乗った程度には期待しておけ。」

誠は軽く微笑むと、冗談にならない様な冗談を言う。

正義は、何じゃそりゃ、と言って笑い、誠に背を向けて寮へと進む道へ歩き出した。

（本当に泥舟にならなければいいがな……。）

誠は暫く正義の背中を見つめた後、明日恭介にどう切り込んでいくかを考えながら、自宅へと足を進めた。

これは、そんなデートの話。

10/21・下? (前書き)

やっと異世界編入りました!!どうもタムラカエデです。

思ったより早かったです、内容も薄かったです()

もしかしたら4分割くらいになるかもしれません。

7daysも中盤くらいに差し掛かってきたので、段々と一日の内容と背景を濃くしていけないといけませんと思う今日この頃。

Q、何時召還されるんですか早くやれボケ。

A、僕も早く召還したいですごめんなさいファイナルアンサー。

異世界編も徐々に暗い方向に動いていきます。

日常編も暗い方向に動きつつあります。

終点は地獄でございます。

では、無いような内容()かもしれませんがお読みいただければ幸いです。

「ふむ、それで？」

「ご指示の通り、暫く刃を交えた後撤退いたしました。今現在、マクルト・ティファレト混合軍はティファレトを囲む様に陣を張っております。」

セフィロト王国の内政、外交、軍事等の、政治における全ての最終決定権を持つ評議会が存在する場所、ダアト。

そのダアトの中心に位置する塔の、最上階にある会議室 薄暗い部屋の中で、円卓を囲むように腰を下ろしている10人の老人たちは、ティファレトを囲っていたダアトの兵から戦闘の報告を聞いていた。

「経緯は以上です。ご指示の通り撤退はいたしました。兵は国境付近に待機させております。一応、ギーメル各所を警備させている兵にも、何割かをティファレト方面に向かわせるよう伝令を飛ばしておりますが……いかがいたしますか？」

濃い紫の鎧を身に着けた騎士は報告を終えると、指示を仰いで目を細めた。

騎士の言葉に、老人たちが一斉に視線を動かす。
その視線の先には、ただ一人目を瞑り、深く考え込むように伸び

た顎鬚を弄る白髪の老人。

周囲の視線を受けた白髪の老人　評議会の議長、ウラヌスは、顎鬚を弄る手を休めるとゆつくりと目を開け、抑揚の無い声で話出す。

「　　そうだな、ギーメルからティファレトに向かわせた兵を全部呼び戻せ。そしてその人員を、テットとギーメルの交差点の警備の強化に充てる。よいか、テットまで出なくて構わん。これは、ケセドとゲブラーがテットを通ってギーメルに入るのを防ぐための処置だ。撤退させた兵は……ティファレト領内に入り、向こうの軍に見える場所で陣を張らせておけ。現状維持だ　此方から仕掛けるな。あちらから仕掛けてくることは無いと思うが……もし仕掛けられた場合は、今回と同様に適当に戦って、傾合いを見てギーメルまで引け。そこまで引けば、仕掛けてくることも無いだろう。」

「……は。現状維持、ですか。此方から打って出なくてよろしいのですか？」

「構わん。よいか、絶対に此方から打って出るのは許さん。絶対に、だ。待機している兵には十分に言い含めておくように。」

怪訝な顔の騎士に、ウラヌスは念を押すように語気を強めた。

納得がいかないのか、騎士は一瞬顔を曇らせると、言葉を選びながら進言する。

「　　お言葉ですが、ウラヌス様。今ここで攻め込んでおかないと手遅れになるかもしれません。数からして、恐らく今ティファレトにいるマクルト軍は先発隊でしょう。我々が表立って軍を動かした以上、マクルトは大義名分が出来たと、嬉々として攻め込んでくる筈……後続の隊が来るのは確実です。最悪、マクルトは全兵力

を　ともすれば、他の国の軍まで動かしてくる可能性もあります。今ここで打って出て混合軍を消しておかなければ……我々では太刀打ち出来なくなります。どうか、ご一考を。」

言って、頭を下げる騎士。

部屋が静寂に包まれる。

「　君、名前はなんと言ったかな。」

一瞬の静寂の後聞こえてきた色の無い声に、騎士はびくりと肩を震わせて頭を上げる。

見下したような視線や、冷笑する老人たちの中で、ウラヌスは無表情で騎士を見ていた。

何かまずいことでも言ったか、と内心冷や汗をかきながら、騎士は恐る恐る口を開く。

「　イーガル・イシュチエル、と申します。」

「ふむ。では、イーガル君　何故君はそのような発言をしたのかね？」

「……と、申されますと？」

やや緊張気味に騎士　イーガルは答える。

「君の言うことは尤もだ　ああ、尤もだとも。今の状況を理解できている者なら、誰であろうと想像つく。」

心臓の音が高鳴る。

「もちろん君は我々が　よもや、この大国の頂点に立ち、人々を動かす立場にある我々が、そのような簡単なことも理解できない馬鹿どもとは思っていないはずだ。」

薄っすらと浮かんだ汗のせいで、短い銀髪が顔に張り付く。

「そして、我々がそのことを理解している上で、現状を維持しろと言っていることも、当然賢い君は理解できているはずだ……そうだろう?」

体の震えが、止まらない。

「そんな君が、わざわざ今この場で言葉にするとという事は」

今すぐにも視線を逸らしたい、そんな衝動に駆られる。

「　その発言は、我々に命令している、という意味で受け取っても問題は無いかね?」

イーガルは、今すぐにも叫び声をあげてこの場から逃げ出したかった。

憤怒の表情で怒鳴られるならまだ良かった。

人を馬鹿にしたかのような顔で嘲笑われるならまだ良かった。

無表情で、まったく笑っていない目で、ただ淡々と語るウラヌスの様子に、イーガルの心臓は恐怖で張り裂ける寸前だった。

「……い、いえ、そのような事は。」

やっと出た言葉も、緊張で舌がもつれてしどろもどろになってしまふ。

周囲の蔑んだような視線を一身に受けながら、目を泳がせて必死に弁解の言葉を探すイーガル。

周りが嗤う中、別に面白くともなんとも無いような様子で、ウラヌスは口を開く。

「別に構わんのだよ、イーガル君。我々に命令をしようが、暴言を吐こうが、それは君の自由だ。まだ先の騒動が起こってから日も浅い。血の臭いすら抜けきっていないこの塔の中で、染み一つ新しく増えようが、我々は一向に構わんのだ……イーガルよ。」

イーガルは、恐る恐る足元を見る。

彼の足元には、まだ付いて日の浅い血の痕。

ティウルが、ダアトの兵の首を撥ね、剣を突き立てた場所。

マクルトの騎士たちとの戦闘で、まだダアトの塔のいたるところに血の痕があり、死体は処理したものの、臭いも抜けきっていないかった。

「も、申し訳ございません」

自身もまた、この血痕の主のようになるのかと戦々恐々しながら、必死に謝罪の言葉を搾り出すイーガル。それをウラヌスが、遮るように言葉を放つ。

「理解したのならそれでいい。よいか、何も考えるな、余計な口を開くな。駒は何も考えずに、ただ黙って我々の指示に従っていればよい。自分で考え、我々の指示以外の行動をとるような駒はいらん。切って捨てて、新しいのを用意するだけだ。貴様の代わりなどいくらでも居るのを忘れるな。……次は無いぞ、分かったら行け。」

ウラヌスの言葉に、イーガルは無言で頭を下げると、逃げるよう

に退室していった。

扉が閉まる音を皮切りに、老人たちがイーガルの滑稽さを嗤う。ウラヌスは扉をじっと見つめながら、何かを考えるかのように顎鬚を弄る。

「イーガル……ふむ、イガルク、か。……セレティネ。目の色を見るに、彼はお前の国の者かと思うがどうだ？」

冷笑する老人たちの中で、くすんだ銀髪のお婆 セレティネがウラヌスに言葉を返す。

「知りやしないよ、あんな腰抜け。まあ、多分あなたの言う通りイエソドの国のもんだろうけど……最近の若いのがあんなのばかりだと、イエソドもお終いかもねえ。」

しゃがれた声で嘆くようにセレティネは言うど、ヒエヒエヒエ、と気味悪く笑った。

「はっ、若い……ねえ。お前に比べたら皆若く見えるのではないか？」

「又ハハ、違くない。その御老体では、国を憂うのも辛かろうてそろそろ引退することをお勧めするが。」

セレティネの言葉を聞いて、青髪の老人 パトリムが鼻で笑い、その隣に居た老人たちの中でも比較的若く見える金髪の老人も豪快に笑った。

「煩いよ、あんたたち!!」

セレティネは目玉をギョロリと動かして、パトリムと金髪の老人を睨む。

三者の間で険悪な空気が広がり、他の老人たちはこれは面白いと囁し立てる。

この馬鹿どもは何をやっているのだ、とウラヌスは目を瞑って呆れ返ったように溜息をついたところで、彼の後方からドアの開く音がした。

「何だい？ 大国セフィロトのトップに立つ人たちが子供のような喧嘩なんて……いささかどころじゃなく恥ずかしいと思うんだけどな。」

この部屋に似つかわしくない若くて明るい男の声に、ウラヌスが後ろを振り返ると、そこには黒いローブに身を包んだ長身の男が居た。

「返す言葉も無いな。もっとも、君の出現で多少なりとも収まりはしたようだが。後ろの部屋で休んでいたはずだと思ったのだが……何かあったのかね？」

「何か……ね。さつき君が異様な空気を出してたから、いよいよ堪忍袋の緒を切らしてこの人たちを殺しちゃったのかなと思って出てきたんだけど……違ったようだね。もしかして部下でも苛めてたのかい？ 駄目だよ、いくら駒でも大事にしないと。」

ウラヌスの問いに、あっけらかんと答えるローブの男 深く被災れたフードからは、楽しげな笑みと、僅かな白髪しか見えない。

「お客人、中々に愉快な事を言うてくださるな。ウラヌスが我らを殺すなど……いや、本当に愉快だ。」

ローブの男の言葉に、金髪の老人が顎に手を当て口の端を上げる。しかし他の周りには不評だったようで、怪しい者を見るような目でローブの男を睨んでいた。

「そうかい？ いや、喜んでくれたのなら嬉しいよ。よかったね、ウラヌス。一人でも喜んでくれる人が居て。」

周囲の視線など気にもしない様子で軽い口調でウラヌスに話すローブの男。

何か含んだような物言いに、金髪の老人や何人かが目を細めてウラヌスに視線を送る。

視線がローブの男からウラヌスに移る。ウラヌスは深く溜息をついて、煩わしいとでも言うように口を開く。

「気にするな、ヘリオス。お前らもだ。まったく……頼むから妙なことばかり言わないでくれ。君が口を開くたびににおっかなびっこりしては心臓が持たん。」

ウラヌス是不機嫌そうに眉根に皺を寄せる。

ローブの男はまったく悪びれていない様子で肩をすくめた。

「それはすまないね。どうにも、僕には冗談のセンスがナンセンスみたいだ。あ、今のアメリカンジョークって言うらしいんだけど、どうだろう？……あれ？ 駄洒落って言ったかな？」

「私に聞くな。アメリカンジョークとかいうのは良く分からんが、駄洒落とかいうのならそうなのだろうな。洒落にもならないくたらない言葉遊びなのだろう？」

「あ、ウラヌス今のは面白いよ。」

「……………」

愉快そうに明るいうつ調で話すローブの男に、真面目に答えてしまったことを若干後悔したのかウラヌスは押し黙って、更に眉に皺を寄せる。

呆気にとられたかのように、ヘリオスと呼ばれた金髪の老人は小さく口を開け、周りの老人たちも何と言えはいいかわからないような顔をしていた。

微妙な空気が漂う会議室の中で、ただ一人楽しそうに　　口元しか見えないが　　笑うローブの男。

ウラヌスは疲れたように溜息を吐くと、空気を換えるために咳払いを一つし、

「　　さて。」

見るもの全てを恐縮させるかのような双眸で口を開いた。

瞬時に空気が変わり、その場に居たものは皆表情を引き締めた。

ローブの男も、もう口元に笑みを浮かべていなかった。

ウラヌスは軽く周囲を見渡した後、卓の上に両肘を付いて手を組んだ。

「少々話が脱線したが……いや、違うな。まだ始まってすらいなかったが　君はもういいのかな？これ以上余計な茶々を入れられても困るのでな。ふざけるのなら今の内にやっておいて欲しいのだが。」

ウラヌスに視線を向けられたローブの男は何も言わず、話を促すように片手を差し出した。

よろしい、とウラヌスは一度頷いて話を続ける。

「では改めて……先程の話の通り、ティファレットを囲っていた我が兵は、外からマクルトの軍、内からティファレット軍の挟み撃ちにあり、国境付近まで撤退した。フォルセティウスの事だ。第二軍、三軍と後続の隊を送ってくるだろう。ネツアクも動いているとの知らせもあつた。恐らくマクルトの本隊辺りに付いて来るだろう。」

「フォルセティウスの奴は喜び勇んで攻めてくるだろうな。」

「……ふん。あの坊や、私たちが何考えてるか分からなくて頭を抱えているに決まっているさ。」

「だが、どのような状況においても好機を逃さない強かな奴だ、アレは。」

「然り。我らを攻める口実が出来たのだ。十国全ての軍を動かしてでも我らを潰そうと画策しておろう。」

「……その通り。フォルセティウスは絶対に好機は逃さない。ここぞとばかりに全ての軍を動かしてくるだろう。そう、つまりは我々の計画通り、ということだ。」

次々に老人たちが口を開く中、そう言ってウラヌスはニヤリと笑った。

ウラヌスの言葉を聞いて、全ての老人が顔に嫌らしい笑みを浮かべる。

「と、いう事は後はヴェーダの魔族どもと守護天使という訳ですか？」

ヘリオスの言葉に、ウラヌスはローブの男に視線を向ける。

「だ、そうだが。どうなのかね？」

「モウマンタイ、ノープログレム、パーフェクト。完璧で、万事順調、首尾上々。全ては手筈通りに、滞りなく進んでおります。……ヴェーダに関しては僕の指先一つで思い通りに動いてくれると思うよ。」

ふざけた調子で恭しくお辞儀すると、ローブの男は口の端を上げた。

他の老人たちが怪訝な眼差しでローブの男を見る中、ウラヌスはならば良し、と頷く。

「ならば残る問題は守護天使のみだ。さて、この大国セフィロトに存在する十の国と、その国を守護する十人の天使。

第二の国コクマーには、^{知恵}”神秘の書”^{神の神秘}ラツィエル。

第三の国ビナーには、^{理解}”雷の戦車”^{神の番人}ザフキエル。

第四の国ケセドには、^{慈悲}”傭兵”^{神の正義}ザドキエル。

第五の国ゲブラーには、^{峻厳}”赤い豹”^{神を見る者}カマエル。

第六の国ティファレトには、^美”竜殺し”^{守り手}ミカエル。

第七の国勝利ネツ阿克には、”竜使い”神の栄光ハニエル。

第八の国栄光ホドには、”生殺与奪”神の癒し手ラファエル。

第九の国基礎イエソドには、”伝令”神の人ガブリエル。

第十の国王国マクルトには、”最後の剣”兄弟サンドルフオン。

そして、第一の国王冠ケテルには、第77代目にして初代と同じ能力を持ち、歴代最強にして同時に現守護天使においても最強を誇る”炎の柱”玉座に侍る者メタトロン。

それで……まあ、そうだな。彼らにはこの世界からご退場頂きたい訳なのだが……。」

クツと少々笑いながら言葉を切るウラヌスに、ローブの男が深く被られたフードの下で片眉を上げた。

「なんともまあ、さも簡単そうに言ってくれるね。先に言っておくけど、僕に守護天使をどうこうしろと言われても無理だよ。」

「ほう、これは驚いた。君にも無理なことがあったのか。」

わざとらしく驚いた様子を見せるウラヌスに、ローブの男は不機嫌そうに口を尖らせる。

「一応、僕は普通の人間なんだけどね。神だって出来ない事があるんだし、人間の僕に出来ない事があっても不思議じゃないだろう？ 守護天使全員を相手にするなんて無理に決まっているよ。」

「その言い方だと、全員では無ければ相手にすることが出来ると取れるのだが。」

割と本気で驚くウラヌスに、ローブの男はニヤリと笑った。

「時と場合によるね。」

驕るでもなく、さも当然かのような物言いに周囲が息を呑む。

周囲の反応を気にも留めずに、ローブの男は少し首をかしげると、不思議そうに尋ねた。

「というか、まさか本当に僕に相手をさせるつもり？……サンダルフォンと、特にメタトロンは遠慮したいところなんだけど。」

結構本気で心配そうに尋ねてくるローブの男に、ウラヌスは笑いを堪えるかのように答えた。

「いや、君の心配は杞憂だよ。サンダルフォンと、メタトロンに關しては特に、だな。……いや、しかしいいことを聞いた。もしもの時には、両手を上げて君に頼るとしよう。」

そして、心なしかほっとした様子のローブの男を横目に、ウラヌスは表情を戻して話を続ける。

「そう、守護天使は厄介……実に厄介だ。この計画の一番の要であり、同時に一番の障害となっている。特にサンダルフォンとメタトロンは、我々の手には負えん　まあ、あくまで我々には、だが。時に、強大な騎士を殺すためにはまず乗っている馬から殺せ、という偉大なる先人の教えがあるんだが、君はどう思うかね？例えれば　今現在、その馬がこのこと此方にやってきているとするな

らば、君はどのようにするのだろうか？」

「　　そうだね。僕だったら、まずそのドアを開けて馬の印象を良くするところから始めると思うよ。」

面白そうにローブの男が言った後、ガチャリ、とドアが開く音がした。

老人たちは一斉にドアの方に顔を向け、ウラヌスは視線だけをドアにやると、不気味に笑った。

「　　あれが馬だって？普通逆じゃないのかい？」

「　　いいや、馬さ。目に入れても痛くないほどに、たっぷりと愛情を注がれて育てられた……な。」

ドアから入ってきた人物を見て、軽口を叩くローブの男とウラヌス。

周囲の視線を一身に受けた来訪者は、人を見下すかのような威圧感のある声で、不機嫌そうに言葉を発する。

「　　おい、人を呼び出しておいて劳いの言葉も無しとは一体どういう見だ。　　それとここは何時から化け物屋敷になったんだ？そこら中にこびり付いた血の痕と、錆び付いた血の臭い……金策にあぐねてとつとつ血迷ったのか？」

「……開口一番無礼な奴だな、貴様は。とりあえずご苦労と声を掛けておいてやるう。ケテルからここまで来るのには苦労しただろう、フレイ。だが生憎と出せる茶も無くてな、喉が渴いたのならそこからこびり付いている血の痕でも必死に舐めている。」

灰に近い白い髪を逆立てた、ラフな白い服を着こなした長身の男性。

評議會の前だというのに、腕を組み、不機嫌さを隠そうともしない表情で、家畜でも見るような目でじつとウラヌたちを見ている。傍らに付き従っている、白い髪を長く伸ばした端麗な顔立ちの侍女は、主の不遜な態度になんら忠言することなく、目を瞑りすました顔で控えている。

若いながらも威厳のある端正な顔立ちで、その白い瞳の双眸からは、周りを畏怖させるかのような鋭い眼光を放つ、フレイと呼ばれた男性。ケテルの現王、フレイ・ケテル・オメテオトルⅡエヘイエーがそこに居た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0108v/>

ただそれだけの話

2011年10月26日01時10分発行